

令和2年度

新型コロナウイルス感染症対応の記録

～各学校園の取組編～



兵庫県マスコットはばタン



兵庫県マスコットはばタン

兵庫県教育委員会

はじめに

令和2年2月、全国の学校に対する休校要請が、安倍首相（当時）から発表されました。そこから教育現場は、新型コロナウイルス感染症の影響を多大に受けることになり、これまで誰も経験をしたことのない対応を、現在に至るまで求め続けられています。

このような状況におかれながらも、これまで兵庫県の幼児児童生徒に対する保育及び教育活動が継続してこられているのは、設置者である市町組合教育委員会や各学校園の教職員の皆様が、感染症対策と保育及び教育活動の両立に心を砕き、日々、大変な御尽力をいただいているおかげであり、改めて心より感謝申し上げます。

令和3年1月には、本県に対して2回目の緊急事態宣言が出され、解除はされたものの、新型コロナウイルス感染症は、未だ終息が見えてこない状況です。だからこそ今後も、幼児児童生徒が新型コロナウイルス感染症を正しく理解し、よりよい活動ができるよう、行政機関や学校における指導が一層重要になっていくと考えています。

そこで兵庫県教育委員会では、このたび市町組合教育委員会及び各学校関係者の皆様にご協力を頂きながら、今年度皆様にご尽力いただいた貴重な保育および教育実践等を、「令和2年度 新型コロナウイルス感染症対応の記録」としてまとめ、冊子を作成しました。本冊子には、コロナ禍にあっても、学校園での保育及び教育活動を可能にするための手立てや、ICTを活用した工夫等、今後の保育や指導の参考となる内容や、新しい保育及び教育のあり方を探る上でのヒントになると思われる内容が豊富に掲載されています。

感染症への対応は、今後も継続が求められることが予想されますが、各学校園におかれましては、コロナ禍にあっても、充実した保育及び教育活動に取り組むことができるよう、本冊子を参考にしながら、学校園における環境整備を進めて下さることを願っています。

令和3年3月

兵庫県教育委員会

令和2年度 新型コロナウイルス感染症対応の記録 ～各学校園の取組編～

目 次

はじめに	・・・	1
目 次	・・・	2
1 「臨時休業中」の対応		
(1) 家庭で過ごす幼児児童生徒との関わり	・・・	3
(2) 学びの支援と学校園が楽しみになる工夫	・・・	18
(3) オンラインの活用と動画制作	・・・	26
2 「学校園再開後」の対応		
(1) 感染対策		
ア 消毒作業	・・・	48
イ 飛沫感染防止のための衝立、製作、対策等	・・・	52
ウ マスクの着用	・・・	66
エ 環境の工夫と意識の啓発	・・・	69
オ 手洗いの取組	・・・	89
カ 給食の実施と新しい生活様式の仕組みづくり	・・・	95
キ 特別支援における対策	・・・	103
ク 「教科」における配慮	・・・	106
(2) 指導の工夫		
ア ICT及び教具の活用	・・・	118
イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫	・・・	135
ウ 「特別の教科 道徳」に関する取組	・・・	141
(3) 学校園の生活及び行事の実施		
ア 兵庫型「体験教育」	・・・	143
イ 儀式的行事	・・・	163
ウ 文化的行事	・・・	168
エ 健康安全・体育的行事	・・・	181
オ 旅行・集団宿泊的行事（兵庫型「体験教育」を除く）	・・・	205
カ 夏季休業日短縮への対応	・・・	211
キ その他	・・・	221

1 「臨時休業中」の対応

(1) 家庭で過ごす幼児児童生徒との関わり

家庭への配布等



兵庫県マスコットはばタン

こいのぼりキットの作成とポストイン（幼稚園等）

休園中各家庭において、親子で楽しく取り組むことができるよう、こいのぼりキットを作成しポストインした。

園児が自由に選ぶことができるように、色や素材の材料を多めに用意し、作り方を電話で知らせ、出来上がりの写真を園だよりに掲載したので、保護者にもわかりやすく、園児も楽しんで作成することができたとの報告を、後日保護者から受けた。

次回のポストインの際には、庭に飾ってある家庭もあった。

こいのぼりの出来上がり写真を掲載した園だよりの一部 →



今日から 5 月です。昨日お手紙を配布していると、あちらこちらでこいのぼりが元気に泳いでいる様子を見ることができました。

そこで、こどもの日にお家で飾ってもらえるように、こいのぼりセットを準備しました。作り方は、電話でお伝えした通りです。

外で元気に泳げるようにと、ナイロン製になっています。挑戦してみてください。

下は、製作途中の写真です。

イチゴの配達（幼稚園等）

年長児は、年少の頃から育てていたイチゴを、進級したら収穫することを楽しみにしていた。そこで、手紙と一緒に各家庭へ届けることにした。

家庭では、子どもと一緒に大切に育ててもらい赤く色づいたイチゴの味を楽しめたようだった。

再開後、

「たくさん収穫できて喜んでいた」「イチゴいっぱい食べたよ」など、感想が寄せられた。イチゴの観察、収穫は、5月の指導計画にも入っている。

休業期間中ではあったが家庭で保護者と共に経験することができ、有意義な取り組みとなった。



一人一鉢のイチゴの苗を自宅に配達



子ども達を楽しめる工夫（幼稚園等）

臨時休業中、子ども達が家で家族と一緒に楽しめるような遊びの提供をしたり、クイズを送ったりし、翌週ポストインした時、クイズの答えを交換できるようにした。

また、折り紙の折り方や親子で楽しめるクッキングなども、たよりに同封することで、親子のふれあいの場をもってもらえるような工夫をした。

そして、連絡帳で様子を伝えてもらうことで家庭での様子を把握できるようにした。



手作りプリント等の配布と野菜の一鉢栽培（幼稚園等）

入園式直後の4月8日から緊急事態宣言が発令され、園児や保護者が、不安に思うことがないように、家庭と電話で園児の様子や保護者の思いを聞き、園からのお便りや年齢にあった手作りのプリントなどを配布する。ポストに入れたり直接保護者に手渡したり話をしたりする中で、不安を払拭すると共に保護者との信頼関係を築くようにした。

緊急事態宣言が5月31日まで延びることになり、4歳児と5歳児は、野菜の一鉢栽培の準備をして配布し、家庭で一緒に苗を植え水やり等の世話を楽しんでもらった。宣言が明け、園に保護者と一緒に植えた野菜の鉢を持ってきてもらい引き続き園児たちが世話をしたが、「お家で水をあげた」「草もひいた」など家庭での共通の話題も増え、より一層自然への興味や関心を高めることができた。

鯉のぼり・ぬり絵など
手作りの製作キットを
家庭に配布



野菜の一鉢栽培セットを園で用意
家庭で苗を植えてもらいました。



家庭保育で使用できる教材等の配布（幼稚園等）

4月から約2ヶ月間にわたり、家庭保育となったので、家庭で遊べる色紙、線遊びや色塗り遊びなどを配布した。

色紙は折り方手順をコピーし、楽しいものが作れるよう案内した。また、実際に色紙で折ったこまやめんこなどを一緒に配布した。兵庫県国公立幼稚園・こども園園長会作成の『なつのおそび』をデータで送ってもらったので、親子で体を動かして遊べるものや、簡単おもちゃ作り、親子クッキングなどを主に選択して、配布した。

5月は週1回程度ポストインもしくは取りに来ていただくかの方法を行った。家庭で、時間を持て余していたようなので、喜んで取り組めたと聞いた。



↑ 配布した『なつのおそび』

園と家庭とがつながる取組（幼稚園等）

・週に一度、担任から架電、家庭での様子を把握した。

・園と家庭との往復封筒を作成し園からの配布物、家庭からの提出物に活用した。

・家庭で過ごす遊びのヒントとなる資料を定期的に配布した。

・クラスだよりで、園児が楽しめるよう、職員が植えた夏野菜の苗の名前当てクイズや草花を使った遊びを紹介した。

・玄関に自由画帳を設置し、来園時に自由記載できるようにすることで、「みんなげんき?」「ようちえんにきたよ」等、次に見た方とのコミュニケーションとなるようにした。

・地域に感染者もなく、小規模園なので、園庭・絵本の部屋を開放していたが利用家族が重なることはほぼなかった。



↑ 自由記載の自由画帳



↑ クラスだより

↑ 往復封筒

教職員と園児の信頼関係が築けるポストインの実施（幼稚園等）

自宅で過ごす間、少しでも園児たちとつながりを持てるように、また、楽しんでもらえるようにとの思いから、二週間に一度程度自宅へ配布物をポストインした。

配布物としては、その時期に合った制作キット（こいのぼり）、手作りおもちゃ（パズル）、運動遊び表、ボール等を準備した。

制作キットは、年齢に応じた作業が進められるよう、材料や作り方を学年毎に変えた。また、絵合わせパズルや子どもたち一人一人の興味に合わせたプラパンのキーホルダーを作り、それぞれに配布した。

現在も、キーホルダーは、鞆につけて登園している。教職員の思いが今の園児達との信頼関係に繋がっていると嬉しい。



親子で取り組める教材等の配布（幼稚園等）

4月の始業式、入園式から6月までの約2ヶ月間、幼児や保護者が家庭で安心、安定しながら楽しく、規則正しい生活が送れるようにした。

幼児には、年齢に応じた製作（親子で一緒に作って遊べるもの）や折り紙（折り方の説明付き）等、保護者には、「けんこう観察カード」や幼児と一緒にできる「生活チェック表」等を週に1回のペースで配布し、親子で生活習慣や健康管理、新型コロナウイルス感染症に関心をもてるようにした。

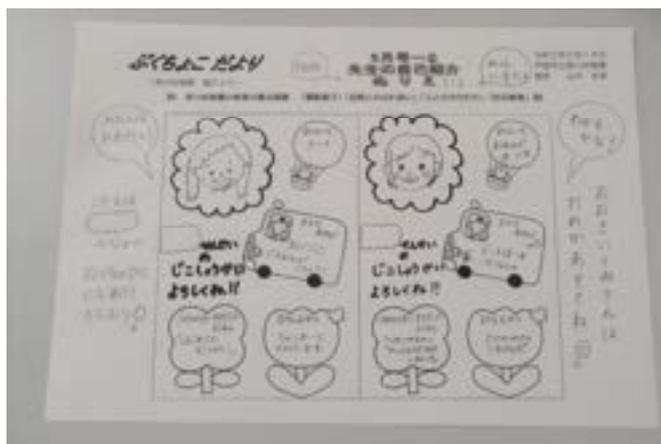
また、子育ての不安や悩み、ストレスの軽減につながるよう、園庭の花壇の様子や教職員の思い、園の電話番号等を書いた手紙も添え、共に園の再開を楽しみに待てるよう取り組んだ。



↑遊びの紹介（兵庫県国公立幼稚園・こども園長会より）や、折り紙、「けんこう観察カード」

先生の自己紹介ぬりえ（幼稚園等）

臨時休業となり、担任が電話をするが、年少児は担任と会ったこともない。そこで、4月末に市教委より配布された連絡用往復はがきで、担任の自己紹介ぬりえを往信で送った。（返信は自由なお絵かきなど）その後、臨時休業が延長になったので、園だよりで、全教職員の自己紹介ぬりえを特集し、各家庭に送った。年長組には、前年度からいる教職員は名前を抜いて、クイズ形式にした。先生の好きな遊びで幼稚園の遊びの紹介、好きな絵本で絵本の紹介をして、園生活を楽しみにし、好きなおやつで先生に親しみをもってもらえたと思う。



↑ 園だより 全職員の自己紹介ぬりえ

「おうちであそぼう」の冊子を配付（幼稚園等）

「今、子供達のためにできることは何か」を考え『心と体の健康』や生活の中での『学び』を支えるひとつとなるよう「おうちであそぼう」の冊子を配布した。本冊子は幼稚園教育要領の5領域の観点を基に作成し、迷路やぬりえ、親子で取り組める体操や料理、期間中に迎えた母の日に合わせてプレゼントの絵を描くことができるようなシートも綴った。



↑ 冊子「おうちであそぼう」

また、楽しみながら生活リズムを整えられるようなお約束シートや、教職員が野菜の苗を植える際の土作りの様子を写真で掲載し、苗の拡大写真からクイズを出すなど、再開後の園生活が少しでもスムーズに、そして楽しみとなるような内容を心がけた。再開後の子ども達の姿からは、野菜クイズの解答を自分の目で確かめるなど、興味関心をもち、環境にかかわる『学び』のつながりを見ることができた。

園児にもできるカレーづくりのお手伝い（幼稚園等）

休業が長引き、家庭でできる教材（ぬりえや遊びの紹介等）を家庭配布した。その中にあったカレーづくりの教材を、より幼児が取り組みやすいように、保護者向けに、写真で紹介した。

初級は玉ねぎの皮むき、中級は野菜の型抜き、上級はピーラーでの皮むきとし、包丁を使わなくてもできるお手伝いにまとめた。

子ども達がずっと家庭にいる状況になり、保護者が毎日、学習支援や保育をせざるを得ない状況の中、「これだったらできそう、できる」と思ってもらえることを期待して作成した。



↑子どもたちが簡単にできるお手伝い 初級・中級・上級

職員のアイデア満載の「おうちであそぼうえほん」（幼稚園等）

今年度開園したばかりの当園は、全園児139名が新入児という状況で家庭保育となり、家庭も園も不安を感じていた。

そこで、日課表や健康観察カードに加えて、職員のアイデア満載の『おうちであそぼうえほん』を作成し、配布した。内容は、楽しく歌いながらできる

『てあらいのうた』や折り紙、簡単クッキング、職員紹介などであった。他にも、こどもの日には鯉のぼりキットを用意したり、家庭からお家での過ごし方や子ども紹介などを募ってクラスだよりとして発行したりした。

保護者の育児不安や虐待も懸念される中、こうした取組で信頼関係が築け、6月のスムーズな再開に大いに役立った。



↑ アイデアいっぱい手作り絵本

「5月のしおり」の配布（幼稚園等）

家庭保育協力期間中に「5月のしおり」を各家庭に配布した。簡単にできる親子クッキングや、迷路、折り紙、塗り絵などを紹介し、また家庭にあるもので製作も楽しめるようにしていった。

また毎日の検温や、手洗い、うがい、歯磨き、手伝い等の生活約束表を用いることで、規則正しい生活を送れるようにしていった。

この期間中に家庭でしっかりと取り組めたからこそ、今や生活の一部として、当たり前前に実践できている。

「いまできること」を考え、園児にとって分かりやすく、楽しめるものを提供することが職員にとって、今後の保育を見つめ直す良い機会となった。

起きた時間や寝た時間を記入する生活約束表 →



←読んだ絵本や遊びを記入する遊び記入表

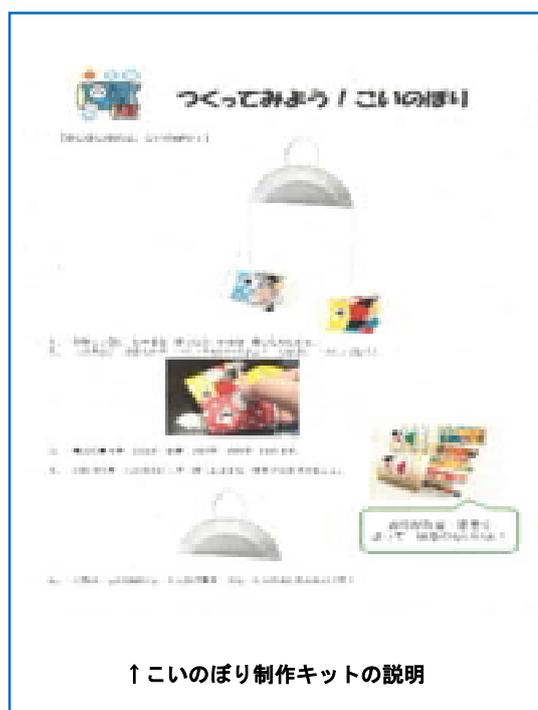


幼児の興味関心を高める支援（幼稚園等）

幼児の生活に関する支援として健康観察カードや、幼稚園の畑や花壇、飼育動物の様子を掲載した手紙、遊びのアイデアなどの配布をした。

5月の端午の節句の頃には、こいのぼりの制作キットの配布を行った。職員でどんなこいのぼりがいいか、親子で一緒に作れるものがよいかなどアイデアを出し合いこいのぼり制作キットとして配布した。

親子で楽しんで作ることができたこと、作ったこいのぼりを飾ったことなどの感想が聞かれた。



↑こいのぼり制作キットの説明

児童とのつながりを意識した配布（小・中学校）

休校中の児童への課題の配布は、当初は学級担任で分け合い同じ家の兄弟姉妹分をまとめて配布した。また、隔週で担任から児童一人一人へ電話をかけ、健康状態や学習状況の把握不安が少しでも和らぐような会話を心がけた。

また、各学年・学級の通信にできるだけ子ども達の作文や声を載せることで、お互いのつながりを意識できるようにした。その後の配布・回収については、不要な接触を避けるために、週に一度保護者に学校に持参してもらい、①玄関に置いたかごで回収 ②児童の下駄箱から新しい配布物や追加の宿題等を受け取る、という方法に変更した。

課題の配布・回収について

- ①回収について
児童玄関の学級のかごに入れてください。
- ②配布について
児童の下駄箱に、新たな課題・配布物が入っているので、持ち帰ってください。
- ③初回（5/7、8）については、職員が玄関で対応しますので、質問などありましたら遠慮なくお知らせください。今後も配布・回収が続くことを考え、下駄箱を使う方法にしました。

配布・回収方法を知らせる掲示 ↑

心のつながりを大切にした家庭配布（小・中学校）

臨時休業中には、いつでも学校が再開できるように準備を進めるとともに、児童宅への課題の配布や電話での状況確認等を行った。

課題等の配布については、保護者や児童と直接接触することを避けるため、ポストへの投函とし、配布日は事前に保護者へ連絡メールにて通知した。配布物には担任からのメッセージも添えるなど、実際に会うことはできないまでも、心のつながりを大切にしていって取り組んだ。

また、各担任が各家庭へ電話し、児童の生活の様子や健康状態、困っていることがないかなどの確認を行ったり、「図工」「リズム体操」「校歌」などの動画を作成・配信したりするなど、家庭で過ごす児童を支援する活動に取り組んだ。



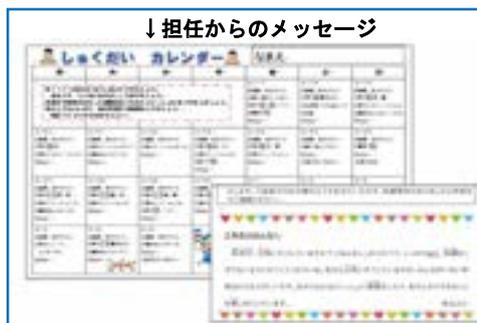
←課題の配付

リズムダンスの
動画撮影 →



学級通信や学習課題の一工夫（小・中学校）

本校は全学年単学級のためクラス替えもなく、子ども達への負担や不安は複数クラスのある学校に比べると軽かったかもしれない。しかし、新しい担任が児童と十分にコミュニケーションがとれない状況下であったので、休業中の課題連絡や配布に合わせて、学級通信に担任からのメッセージを添え、家庭での生活の不安や健康状態を学校に伝えやすい雰囲気づくりに努めた。



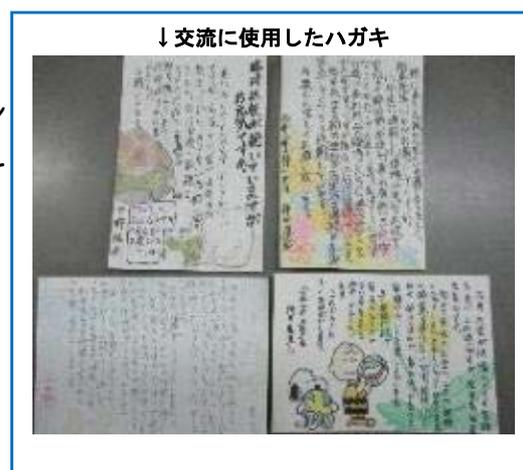
学習課題については、前学年の復習だけでなく、解説を加えた資料を活用して新学年の学習内容にも取り組んだ。また、保護者向けのメールシステムの活用や定期的な電話連絡により、学校からの連絡を細やかに伝えるとともに、保護者からも相談しやすい環境づくりをすすめたり、メールのアンケート機能を活用して健康状態や生活実態の把握に努めたりした。

ハガキによるコミュニケーション（小・中学校）

ハガキ（手紙）による交流

○ 生徒との良好なコミュニケーションを図ることを目的にハガキ（手紙）による交流を実施した。

○ 宛名や本文の書き方（時候の挨拶や近況報告など）等の指導も行った。



○ 生徒からは「頬にあたる風が心地よい季節となりました」「学校から届いた手紙を読むととても明るい気持ちになり、早く学校に行きたいなという気持ちになりました」という返信があり、生徒の心境を把握する上でも非常に効果的な取組となった。

「うつさない、うつらない」(小・中学校)

年度当初の緊急事態宣言発令による臨時休業中は、児童宅へ学習課題や配布物を郵便ポスト等に配達した。

教職員が感染している可能性を考慮し、配布物はすべて消毒してから配布した。

児童宅では非対面として、接触を減らすように徹底した。回収する場合は、校舎正面玄関のみで受け渡しを行い、ビニールシートでシールドを自作し飛沫感染防止にも配慮した。

お便りや課題の配布回収時に感染の不安を軽減し、児童・保護者と担任のやり取りを行うことができた。誰もが感染の可能性を認識し、「うつさない、うつらない」という意識の向上の一助となった。



↑ ポストイン資料の消毒

家庭へのポスティングとレターパックの活用(小・中学校)

課題や連絡のプリント等が封入された封筒を、学級担任が児童の家庭へポスティングして回った。

また、保護者及び教職員の負担軽減を図るため、市から支給された「レターパック」も活用した。

送付用のレターパックに課題や保護者への連絡物と、返信用のレターパックを同封して各家庭へ送付した。

後日、児童が取り組んだ課題や提出物が封入されたレターパックが学校へ届いた。各学級担任は、児童から提出された課題を丁寧に添削し、ポスティングによって返却した。

ポスティングは学校から家庭への一方通行であるが、レターパックにより家庭からの送付が可能になった。



←封入作業

ポスティングに向かう教員↓



「HUB ダン」の設置 (小・中学校)

学校と生徒・家庭とのつながりを維持するため、連絡ボックス「HUBダン」を体育館内に設置した。HUB(ハブ)とは拠点・中継を意味する英語で、ダンは段ボール箱のことである。

設置以降、休業中の学習成果物や通信等をやり取りし、自主的に行う学習を支援したり、学校からの情報を発信したりした。また、教職員にとっては生徒とコミュニケーションを図る機会となった。臨時休業期間中、毎日全校生徒の約半数が活用した。活用状況は、連絡メール「ラインネット」で保護者へも知らせた。



←体育館に連絡ボックスを設置



↑受付には名簿と消毒液を設置

←箱の中身を回収し提出物を投入

靴箱を利用した学習プリント等の受け渡し (小・中学校)

学校からの学習課題や健康観察カード等の受け渡しに児童の靴箱を利用した。毎週月曜日を新たな課題の受け渡し開始日に設定し、いつ取りに来ても良い分散的な登校可能日として、児童の家庭学習を支援した。

休業期間が長引く中、課題内容は、復習のプリント中心から、徐々に、ホームページ上の教員が製作した学習動画配信と併せた予習的な課題を加えていった。保護者からは、「定期的に先生から添削や返事がもらえるので、子どもが学習や生活のリズムを崩さずに過ごせています。」との声が聞かれた。



←靴箱を利用した課題の受け渡し

「バッチリメニュー」・「わくわくメニュー」 (小・中学校)

臨時休業中の家庭学習を継続的に支援するために、週1回、各家庭へ課題配布 (ポストイン) した。

家庭学習の長期化に伴う学習意欲の低下を防ぐため、各教科の課題は「バッチリメニュー」と「わくわくメニュー」を設定し、各自の興味関心に合わせて選択できるようにした。

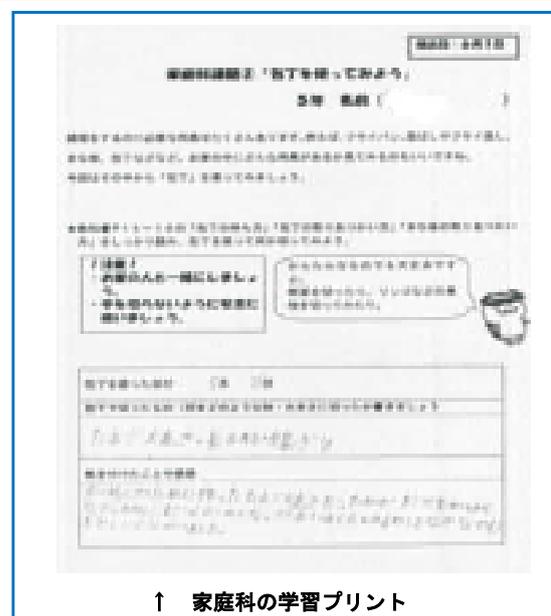
また、学校再開後スムーズに授業展開できるように前学年の復習と新学年の予習ができるように課題内容を工夫した。



家庭で行う学習プリントの作成 (小・中学校)

入学式翌日から臨時休業となり、家庭学習が必要となった。プリントの配布、動画配信などを検討したが、全ての児童に等しく教育を提供するために課題をプリントで配布することが最善であると判断した。

内容は復習のみでは限界があることから予習を中心とし、児童が主体的に取り組める内容を全教職員で検討した。各家庭のポストに配布し、可能であれば児童の状況を確認した。できた課題は保護者に学校へ届けていただき、添削指導したものと次の課題を配布した。双方向性のある指導は再開後の学習の理解につながった。



学校からの一方通行にならない学習支援の工夫（小・中学校）

臨時休業中、特に力を注いだことが、家庭の協力を得て行った一方通行にならない学習支援である。

2週間に一度の割合で学習課題や通信などの連絡物を各家庭にポストイングする。提出期間を決めて保護者が課題を学校に持参する。担任を中心に丁寧に

添削し、コメントやメッセージを書いてポストイングする。この繰り返しを行った。保護者には、マスク着用、手指消毒などの感染症対策を徹底した。

電話連絡も定期的に行っていたが、児童の成果物を確認することで、学習や生活の状況が把握できた。また、担任からの文章記述により、児童との交流に役立てることができた。



↑ 玄関に設置した課題提出箱

児童生徒が少しでも前向きに取り組めるような課題作成（小・中学校）

臨時休業中の学習課題については、新しい単元の学習ができなかったため、復習プリントが中心となった。しかし、先生方でアイデアを出し合い、児童生徒が家庭で少しでも前向きに取り組めるような課題を作成した。配布は直接手渡しすることが困難であったため、ホームページや一斉メールでの周知やポストイングで対応した。

また、4月、5月には登校日を設定し、直接児童生徒と出会う機会を設けた。学習課題の受け渡しや、健康状態の確認を行い、臨時休業中の児童生徒の家庭生活についての状況把握に取り組んだ。



↑ 登校日の課題の受け渡し

児童生徒が自分で学習を進めていくことができる課題づくり(小・中)

児童生徒が各家庭において、自分で学習を進めていくことができるような課題づくりに取り組んだ。その課題の一部分を図に示している。できるだけ教科書の展開に沿いながら、ポイントを示したり、深い意味理解につながる説明を加筆したりしている。また、課題づくりと合わせて、児童生徒が取り組んだ後の課題の活用方法についても工夫を凝らした。家庭で取り組んだ課題を学校に返送し、学校と児童生徒との双方向の授受が可能となるよう、返信用封筒を配布した。このような機会を設け、教員は児童生徒が取り組んだ課題を添削するだけでなく、コメントを書き入れる等、児童生徒の家庭での取組を評価し、励ました。

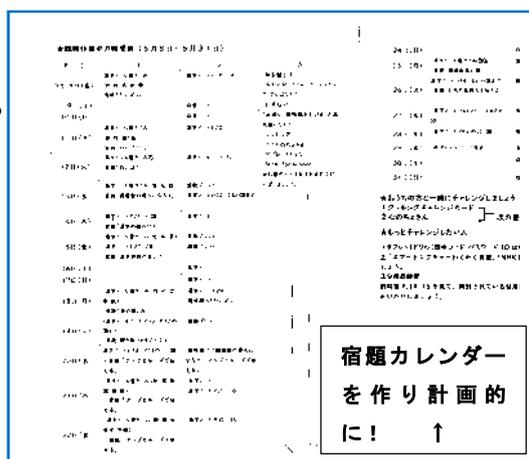


↑作成した学習プリントのサンプル図

学習課題のポスティング(小・中学校)

臨時休業中は、学習支援のため学習課題のポスティングを行った。

1年生は、初めての宿題であるため、ひらがなや数字の練習、点つなぎ等、宿題のやり方を学年便りで丁寧に説明して行った。折り紙やハサミで切る工作等、楽しめる宿題も入れた。2～4年生は、国語、算数等のドリルの取り組み方を詳細に書き、児童だけでもできるようにした。また、一日の時間割や宿題カレンダーを作って、計画的に学習ができるようにした。高学年では、ノートまとめの例を配布し、教科書を読んで予習ができるようにしたり、家庭科の一環として、生活リズムの見直し表の作成、学習に役立つサイトの紹介をしたりした。「できたらやってみよう」やタブレットドリルの紹介も行い、進んで学習している姿も見られた。



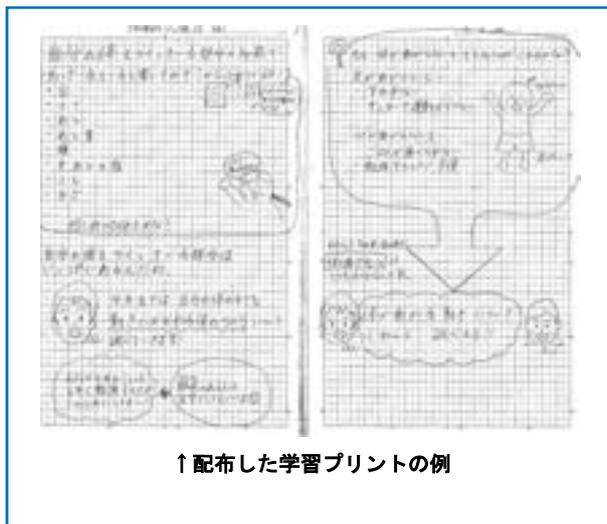
学習プリントの作成(小・中学校)

臨時休業時に、予習ができるように、先生たちの手作り教材を各家庭に届けた。

教材内容については、対面での授業が困難な中、児童生徒が興味を持つことができるような紙面になるよう、工夫を凝らした。

先生の一言コメントにあたたかさがあり、早く教室で授業を受けたい、という児童もいた。

また、各校ホームページに学習コンテンツを掲載し、家庭学習の助けになることも期待した。



生活計画実施表(小・中学校)

長期の臨時休校による児童の生活習慣の乱れが心配であった。そこで、宿題を各家庭へポストインする際に「生活計画実施表」も併せて配付した。上段には1日のスケジュールを見童が記入する表を、下段には学習と運動、メディア利用時間、睡眠時間及び保護者の確認欄を設けた。その結果、保護者に確認をしてもらうことで保護者との連携も取れ、児童が規則正しい生活を行えるよい取組となった。この表は、担任が電話で様子を確認する際にも、有効であった。



1 「臨時休業中」の対応

(2) 学びの支援と

学校園が楽しみになる工夫



兵庫県マスコットはばタン

家庭と幼稚園生活との関わり(幼稚園等)

入園式の次の日から休園だったので、新入園児や進級児の新しい生活への期待と保護者に、不安や戸惑いの軽減をしてもらえるように、ハガキでのクラスだよりの発行や安心ネットによる発信をすぐに始めた。また、5月のGW明けからは週に1回程度の登園日を設けた。その際は密を避けるため、時間差による戸外での体験活動(玉ねぎ引き、いちご狩り、花の苗植え、夏野菜植え等)を中心に、テラスで絵の具を使ったお絵描きをしたり、絵本の貸し出しを行ったりして、再開後の幼稚園生活が楽しみになるような計画を立てるようにした。帰りには事前に職員が準備した、自宅で取り組める製作キットを配布し、次の登園時に持参してもらうようにした。



イチゴ畑の前でお絵描き



お家で作った
こいのぼり



ハガキでのクラス
だよりの配布



玉ねぎ引き



夏野菜植え



花の苗植

登園児の活動と休園児との心のつながり(幼稚園等)

5歳児クラスで今年度のクラス目標として“思いやりプロジェクト”を実施。プロジェクトの一環としてジャンボひまわりを育てることにした。

植物の栽培は、時期を逃すことができないため、登園している園児で活動を進めることとなった。

屋外で友達と協力して花壇を作り、ミニポットにひまわりの種をまいた。全園児の登園を待って、手作りの大きな花壇に植え替えた。その後、ひまわりの成長を全員で喜び合い、花壇を作ってくれた友達に感謝した。時期を逃さず植物を育てる活動となった。



↑ ひまわりを植えるための花壇を作っている所

手作りこいのぼりの飾り付け(幼稚園等)

4月・5月休園の間、子ども達は幼稚園に遊びに行きたくてもできなかったのもので、幼稚園の様子を知らせるおたよりに「先生達は、みんなが幼稚園に来る日を楽しみに待っているよ」のメッセージと共に、手作りこいのぼりを園のフェンスに飾り付けた写真を掲載してポストインした。

後日、その様子を見た園児が「早く幼稚園に行きたい」と話していたことを保護者から聞くことができた。

また、コロナ禍で運動不足解消に園周辺をウォーキングされていた地域の方にも好評で、特に未就園児の子が園の側を通るたびに「こいのぼりだ!」と喜んでくれているのが嬉しかった。

・5色のこいのぼりを作り、フェンスに飾る →



←・離れたところから見た様子

子ども達へのメッセージを込めた掲示物(幼稚園等)

休業中、幼稚園前を通る時に子ども達や保護者の目にとまり、「早く幼稚園に行きたい」という気持ちをもってほしいという思いと、地域への発信として(“みんなで頑張りましょう”という思いも込めて)園だよりを作成し、幼稚園フェンスに掲示した。

同時に、「待っているよ」「早く会いたいよ」というメッセージも届けたいと思い、本来、子ども達と共に作成しようと考えていたこいのぼりの制作物も掲示した。

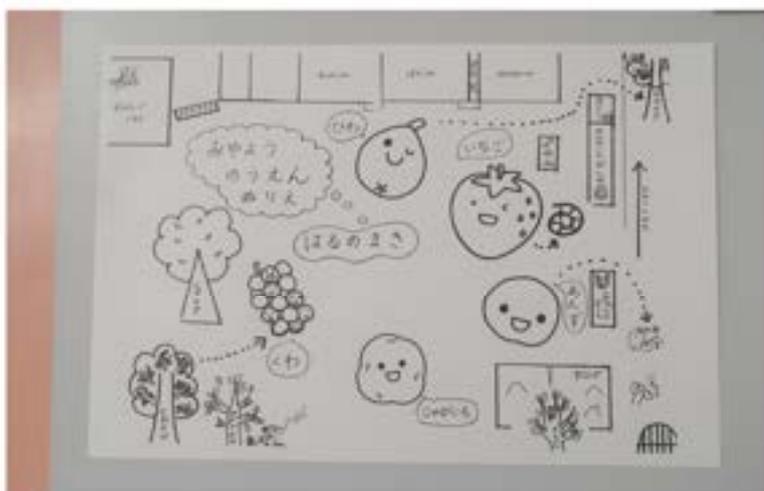
保育再開後に保護者の方から、「嬉しかった」という言葉をいただいた。



←幼稚園からのメッセージ

「みやよのうえん」ぬりえ（幼稚園等）

5月末、臨時休業中ではあったが、分散登園をすることができた。幼稚園には春の自然がいっぱい。通常であれば、子ども達の気づきから遊びを始めていくが、今年度はみやよのうえん地図でも知らせて、子ども達が旬の自然を逃さずに興味を持てるようにした。地図はぬりえになっているのでより意識づけることにもなった。ぬりえは市販でも、インターネットでもたくさんあるが、宮川幼稚園の生活をぬりえにすることに意義を感じた。



↑みやよのうえん 春の巻
幼稚園の収穫物をぬりえ地図にしました

家庭や地域へのメッセージ（幼稚園等）

登園している家庭、自粛生活をしている家庭、地域に向けて「心はつながっているよ」という思いを込めたメッセージボードを掲示したり、園での様子を動画配信したりした。

自粛している家庭へ電話をした際、保護者から「園の前を通るたびに、色々なメッセージが増え、園庭がカラフルになり、早く園に行きたいです！」という声が聞こえてきた。子どもの命を守り切れるのか不安を感じつつも、自粛解除が待ち遠しく、職員みんなで頑張っていこう！という思いが強くなった。そして、考えられるすべての予防対策を職員で話し合い、取組を行い、現在につながっている。



↑「心はひとつ笑顔の花咲く阿弥陀子ども園」
家庭や地域に向けメッセージを掲示



↑職員から子ども達へ動画を配信

出張図書館により、読書に親しむ心を育てる（小・中学校）

多可町図書館からの提案により、外出自粛中の生徒に対し、発達段階を考慮して専門の司書が選りすぐった「おすすめ本」が、分散登校日の学校へ直接届けられた。生徒は、自らの興味関心の赴くままにお目当ての本を捜し、学校に居ながらにして多可町図書館蔵書の貸出しを受けた。



↑ 出張図書館の貸出風景

暇を持て余しがちな臨時休業中の生徒にとって、今回の取組は、読書に親しむ心を育てる大きな機会となったように思う。

臨時休業期間終了後もこの取組は継続しており、主に国語の授業とタイアップしながら、「おすすめ本」を提供してもらっている。これが生徒の好奇心をくすぐるようで、貸出冊数も例年より伸びている。

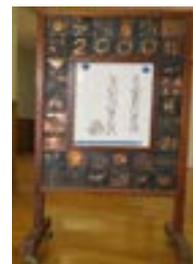
図書室の利用見直し（小・中学校）

4月からの臨時休業中に、児童の読書習慣の維持・定着のため、図書室の本の貸し出しを行った。

まず、あんしんネットのアンケート機能を使って、「図書貸し出しの希望の有無」「来校方法（車での送迎・徒歩等）」の調査を実施した。



↑ 図書カウンター



↑ 休校中の案内板

その後、希望保護者には、来校時間が重ならないよう、メールで来校の日時を伝え、貸し出しを行った。

また、感染予防の面では、本の返却の際は、一定期間別室で保管したうえで、ブックカバーの消毒を行ったり、貸し出しカウンターにアクリル板を設置したりした。

さらに、分散登校が始まってからも、積極的に図書の本の貸し出しを各学級で行った。

感染予防対応策と学びの保障に関する支援（小・中学校）

臨時休業中の取組として、感染予防に係わる対応策と同時に学びの保障に関する支援が必要である。

自宅学習として、2週ごとに課題及び週間計画表を生徒に配布し、指定日に提出するように指導をした。

課題については、授業の予習や前学年の復習を含めた内容とし、意欲的に取り組めるものとなるよう工夫した。

また、週間計画表の記述においても学年に応じた学習時間を確保し、系統的な学びができる取組となるよう努めた。



↑ 課題と週間計画表

学習指導推進部を活用した学習支援（小・中学校）

学習指導推進部を中心に協議して、課題として出す教科やその内容、出し方・量等について共通理解を図った。また、時期によって各学年の課題内容を変更することで、偏りがないように工夫したり、課題の作成についても、専科教員や新学習担当・教科担当教員等が積極的に関わったりすることで、学級担任に過度の負担がかからないよう配慮した。

リモート環境が整備されていなかったため、家庭で使える学習支援サイトを紹介したり、学校再開が近づいてきた時期には、「6月からのくらしのやくそく」を事前に配布したりして、児童への動機づけを行った。



↑ 紹介した学習支援サイト

規則正しい生活と計画的な学習が進められる支援 (小・中学校)

週1回程度の割合で、心のケアも含めた家庭訪問を行い、右記のような日課表(形式は、学年によって異なる)の作成を促し、規則正しい生活と計画的な学習が進められるように支援した。また、振り返りをさせることで、生活の改善を意識させた。1年生については、プリント等を配付し、家庭の協力を得ながら、本読みやひらがな等の習得に努めた。

自己管理が難しい児童には、具体的に個別の課題表を作成し、毎日のチェックを心掛けさせた。

1週間の計画表 6年 組 番 名前()

5/8(金)~5/14(木)の学習のめあて	(例) その日の宿題を集中してやり切る。
5/8(金)~5/14(木)の生活のめあて	(例) リズムをくずさず、毎日同じ時刻に起きたり寝たりする。

毎日のタイムスケジュール

午前	午後	午後
5 6 7 8 9 10 11 12	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
起床	朝食	起床
朝食	学習	朝食
学習	起床	学習
起床	夕食	起床
夕食	学習	夕食
学習	起床	学習
起床	入浴	起床
入浴	寝る	入浴
寝る		寝る

月日	起床時刻	学習計画(学習する教科と内容)	学習時間	学習の振り返り
(例) 5月8日(金)	7時 00分	(国語) 国語 笑うか泣くか、漢字スキル本p2 (社会) 社プロ 自学ノートに等す (理科) 夕食に野菜サラダをつくら(自学) (読書) 家にある本のつづき	2時間	◎
(例) 5月9日(土)	7時 30分	(国語) 漢字練習スキル本1ページ (理科) おやつにホットケーキをつくら(自学) (読書) 家にある本のつづき (読書) 家にある本のつづき (1時間15分)	4時間5分	◎
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
月 日 ()	時 分 ()	()	時間	
5/8~5/14をふり返って				

↑ 日課表

学校再開後を見通した日課表の配布 (小・中学校)

本校では、全学年で学級通信に次週の日程と学習内容を掲載しており、休業中も実際の時間割に沿った週時程を計画し、それを日課表として学級通信で配布した。

学校再開後の授業がスムーズに進められるよう、4月からは新学年の予習を課題として設定したり、学級通信で教科書の活用など学習方法についても解説した。

課題配布と回収は木曜日に保護者が来校して行うよう依頼し、必要に応じて面談も行うことで、家庭での様子を把握したり相談を受けたりすることができた。

	1日目(金)	2日目(月)	3日目(火)	4日目(水)
1週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<社会と国語> プリントを写す。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<社会と国語> 教科書P14をノートに写す(書き込み)
2週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
3週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
4週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
5週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
6週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
7週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
8週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
9週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)
10週間	国語<漢文> 空読安全のスタ一の下書き、白い紙に書く。	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)	国語<国語の基礎> 国語の基礎(教科書の86~87に書き込み)

↑ 1週間の時程と学習内容(抜粋)

学校再開に向けた取組（小・中学校）

家庭で過ごす児童への学習・生活支援とあわせ、学校再開に向けた取組を進めた。

国・県の指針・指標をもとに学校や児童の実態に合った「河東小学校感染症対策ガイドライン」に沿って学習・生活・健康体育の三部会が対策を話し合い、共通理解を徹底した。

主な取組としては、教科ごとの授業のルールづくり、感染症について子ども達に指導すべきことをまとめたプレゼンテーションづくり、密を避けるための校内施設・設備の工夫などがあげられる。

この取組は、現在に至るまで状況に応じ見直しや新たな工夫を加えながら継続している。



おかえりひたみちっこ ガンバレひたみちっこ（小・中学校）

臨時休業中、学校再開に向けてPTAと協議を重ね、子ども達の心のケアが最重要課題であると確認した。そして、学校再開時には、子ども達が元気に登校してほしいとの願いを込め、グラウンドに、メッセージを描くことになった。



↑ グラウンドメッセージ

保護者と学校職員の協働により、数日かけて整地・測量・下絵作成をおこない、学校再開前日には一日がかりで「おかえりひたみちっこ ガンバレひたみちっこ」と描いた。前例のない取組ではあったが、学校と保護者の絆を深めることができた。学校再開当日、心のこもった大きなメッセージを見た子ども達は大喜び。学校再開に向けた大きなプレゼントとなった。最高のスタートを切った子ども達は、心のストレスを感じることなく、心身ともに健康な毎日を送ることができている。

英語専科教員による課題作成 (小・中学校)

市内の英語専科教員がワークシェアの考えのもと、小学生を対象とする家庭学習用の教材を作成した。児童の発達段階に対応できる内容となるよう、ALTとも教材内容のすり合わせや意見交換等を行った。基本的な筆運び、興味のある国調べ、児童らが関心をもっている歌の英語訳の歌詞といった教材、またNHK for School等の参考となる番組サイト等をQRコードをつけて紹介したプリントを作成した。全学校の教員が活用できるよう市内の共通フォルダにアップしている。スピーチ練習のプリントには、保護者のサインをもうけ家庭学習の協力を保護者に求めるようにした。児童が教科書等を活用し自主学習のできるような工夫をした結果、学校再開後には「英語で歌えるようになったよ」との声、調べたことを資料添付して提出する姿が見られた。



↑ 休校中の学習プリントに調べた資料を添付して提出

1 「臨時休業中」の対応

(3) オンラインの活用と動画制作



兵庫県マスコットはばたん

ロイノートを活用した双方向の授業実施 (小・中学校)

家庭での Wi-Fi 環境が整備され、タブレットを使用しての学習が展開できるようになった際、ロイノートを活用して双方向の授業を行った。

週の時間割を配布し、児童は時間ごとに資料箱から資料を取得。学習内容は音声や動画で補足しておき、資料にそって学習できるようにしておく。最終的には、その時間のまとめをノートに記述し、その画像をタブレットで提出させた。その後、担任が内容を確認し、アドバイスや評価、励ましの言葉等を記述して返信するようになった。

リアルタイムでのやり取りではなかったが、児童からの質問への対応や課題の評価、添削なども行い、児童とのコミュニケーションもある程度取ることができた。



Google Classroom によるつながりづくり (小・中学校)

新学期を迎え、本来であれば始業式 (入学式) の日から学級担任と児童との信頼関係が築かれていく。その信頼関係を基盤に一年間の学校生活が安定し充実したものになるはずだが、令和2年度は全く違った幕開けとなってしまった。

「これから先、学校はいったいどうなるのだろう…」と不安を抱えているのは、児童や保護者だけではなく、教職員も同じだった。

まずは、児童に進級した喜びを感じさせ、学級担任への親しみを持てるよう、Google Classroom を使って学級・学年からの発信を行った。



ロイロノートによる個別指導・つながりづくり（小・中学校）

Google Classroomでの学級・学年への発信に加え、児童一人一人の学習の悩みや生活の様子をやり取りするために、ロイロノートを活用した。

取組にあたっては、通信の時間帯をどうするかについて校内でしっかりと話し合い、①児童の生活リズムを乱さないこと、

②教員の勤務時間の適正化を意識することを軸として、児童からの送信は家庭で話し合って決める、教員からの返信は翌日になることもあることとした。

この取り組みで児童と教員のつながりが深められ、学校再開後の学級経営がスムーズに進められている。



ウェブ会議システムの活用（小・中学校）

5月13日から臨時休業中に自宅と学校をつなぐオンライン授業をウェブ会議システム「ZOOM」(ズーム)に接続し、タブレット端末を活用したオンラインによる双方向対面の授業を行った。

「何してるん!」「元気そうやん。」声を掛け合い6年生のオンライン授業が始まった。子ども達の健康チェックや近況報告の後、新型コロナに関する新聞記事を読んでまとめた考えを発表して意見交換をするなど、毎回のテーマを決めて話し合った。

また、オンライン上で使う授業支援ツール「ロイロノート」を活用して、学習課題やメッセージのやり取りをすることができた。ネットワークでお互いつながることで安心感も生まれ、団結力が深まった。



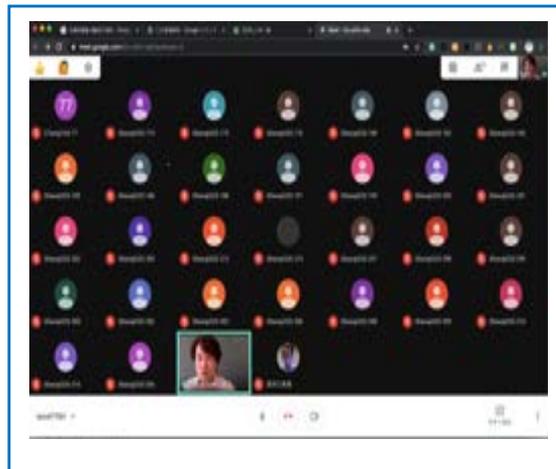
Google Meet の活用 (小・中学校)

本年度臨時休業中の取組として職員研修を重ね、Google Meet を利用しての生徒との朝と夕方の HR を各担任が行った。

各担任が双方向で会話を交わしながら「今日の時間割」や健康観察カードのチェック等を実施した。

多くの生徒が学校や仲間の顔を見て話せることに喜びを感じ、有意義な時間となった。

保護者からも生活のリズムができてよかったという声をたくさんいただいた。また e ライブラリを活用した各教科の課題も生徒にとって効果的な取組となった。



同時双方向オンライン授業の実施 (小・中学校)

4 月中頃～5 月末までの臨時休業中、「同時双方向オンライン授業」を実施した。

1 年生～6 年生までの全校児童の家庭と学校をオンラインでつなぎ、「国語」「算数」「理科」などの授業を行った。

また、「体育」も実施し、休校中の運動不足を解消するためにオンラインでラジオ体操を行ったり、軽い運動を行ったりと多様な内容の授業を展開した。

養護教諭が、オンラインで「体をほぐす体操」を行うなど、臨時休業中の「心の安定」につながる実践も行った。その成果もあり、学習の進捗に大きな遅れはなく、児童の心にゆとりができ、安定した学校生活につながった。



Web 会議用ソフトウェアの活用と定期的な家庭への連絡 (小・中学校)

臨時休業中に、学年ごとに Web 会議用ソフトウェアを使用し、「朝の会」を行った。子ども達は各家庭からオンラインで参加をし、久しぶりの再会をととても喜び、「久しぶり～」「元気だった？」など、優しい言葉が飛び交っていた。

また、ホームページや学校通信、学級通信等を活用し、行事予定や課題等定期的に学校からの連絡を行った。

定期的に家庭訪問を行い、課題をポストインする学校もあった。

あわせて、定期的に電話連絡し、子ども達の声を聞き、生活の様子や課題の進捗状況を把握するとともに、個に寄り添った支援を行った。



「オンライン」による朝の会↑

学校HP↓



一斉メールを活用した健康チェックと家庭訪問 (小・中学校)

児童生徒の心身の健康状態・家庭学習の状況を確認し、適切な家庭生活と自宅学習を保障するため、一斉メールを活用した健康チェックと担任と学年担当がペアになって家庭訪問を毎週1度行った。家庭訪問では、極力生徒の顔を見るようにし、提出された課題は添削・評価を行った上で返却、新たな課題を配布することを心がけた。



↑オンライン授業の配信



同時に、教科書の内容に応じた家庭学習の実現に向け、外部から講師を招いての校内研修を実施し、5教科を中心にオンライン授業の配信を行った。特に社会科は、地理と歴史の単元について、計19コンテンツの配信を行うことが出来た。

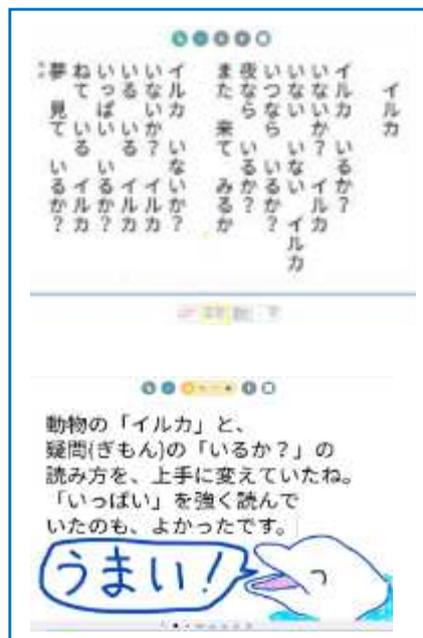
iPad を活用した学習支援 (特別支援学級)

特別支援学級 (自情) では、家庭学習の基本は学習プリントだが、iPad を活用した課題にも取り組ませた。

iPad を家庭の Wi-Fi に接続させ、ロイロノートを使って「休校中の学習」として、漢字と計算、詩の音読 (録音して送る) 課題のやり取りを始めた。

児童がプリントに飽きてきた時期だったので、平日午前のやり取りは、児童のやる気を取り戻すことにつながった。

さらに、zoom とロイロノートを同時に起動することで、授業の映像やロイロノートの課題を見せながら音声で説明することができるようになった。これにより、課題の理解を深めたり、間違い直しの指導において、分かりやすく伝えたりすることができた。



「にしわきデジタルスクール」(小・中学校)

市内の小学校において、オンラインの学習教材を使い、家庭で学ぶ「にしわきデジタルスクール」に取り組んだ。国語や社会、算数など、教科書と連動した動画や音声を活用した。児童が学習課題に取り組むためには、市のホームページへアクセスし、児童自らで学習を進める。

オンラインが利用できない家庭に対しては、同様のデータをコピーしたタブレット端末を貸し出し、オフラインで学習を進めることも可能とした。履修の進行状況を合わせるために、市内で統一した内容とし、各学年の担任等が役割分担を行い、学習教材を作成した。



おもしろ算数コンテンツの作成（特別支援学級）

特別支援学級に在籍する児童が、端末を使用して家庭でも取り組むことができる「おもしろ算数コンテンツ」を制作した。

集中力、多動などの課題のある児童や、数量の感覚が身につきにくい児童でも、視覚的に捉えることができるよう工夫し、楽しみながら繰り返し学習することができるよう配慮した。

1年生算数 教材指示用コンテンツ	
時計のよめかた	時刻時刻を正確しく時刻を読み取る練習ができます。 時計のフラッシュ
たし算1	4-3の数の計算シミュレーション 17+2 17+3 17+4の計算シミュレーション
ジョウゴのたし算	1けたくりあがりなし、あり、混合のたし算フラッシュ 分解してたずくり上がり算
ひき算1	17-4の計算 20-6の計算シミュレーション 21-8の計算シミュレーション
フラッシュひき算	1けたくりあがりなし、あり、混合のひき算フラッシュ 分解してたずくり下がり算

↑ 視覚的に捉えやすい算数コンテンツ

「ほけんだより」の発行による支援（小・中学校）

新年度のスタートが新型コロナウイルス感染症対策のために臨時休業になり、「ほけんだより」を発行して健康管理をうながした。

朝起きて学校へ行くという生活リズムを乱さないように、家庭でできるリフレッシュの方法や簡単にできるマスクづくりなどを紹介した。

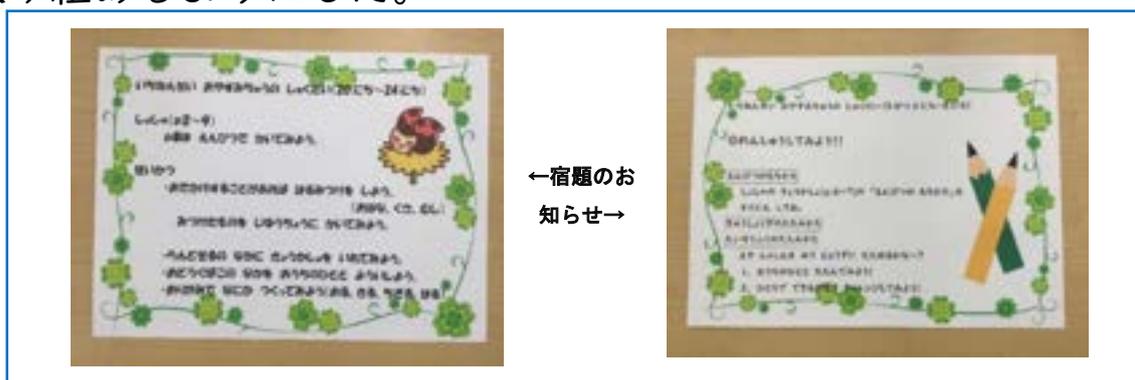
「ほけんだより」は分散登校時に配布したり、あんしんネットやロイロノートで配信したりして、生徒・保護者へ情報提供した。また、生徒の健康チェックは4月には紙の「健康チェック表」への記入を指示し、5月以降はロイロノート上の「健康チェック表」への入力にシフトした。これに加え、各担任は生徒の日々の健康状態把握のため計画的に家庭連絡をした。



↑ 「ほけんだより」

「復習」を中心に、「量」や「質」に配慮した学習課題 (小・中学校)

臨時休業期間中の学習課題を吟味、検討する際に最初に配慮したことは、家庭で一人で過ごさなければならぬ児童が一人きりでも学習が完結することができるかということであった。保護者が傍で支援することが難しい児童も意欲を失わず、課題に向かえるよう「復習」を中心に「量」や「質」に配慮した。入学間もない1年生には「早寝 早起き」、「家のお手伝い」等、基本的な生活習慣の習得を目指した課題を提示したり、「給食着のたたみかた」「ランドセルの使いかた」など、学用品の扱い方の課題をHPに見本を提示したりして、取り組めるようにした。また学習サイトや、ダウンロード教材の利用にあたっては各家庭のインターネット環境をアンケートメール等で把握し、実施した。環境が整っていない家庭にはDVD等にデータを保存して提供し、インターネット環境に左右されることなく学習に取り組めるようにした。



中学校で採用していたオンライン学習支援ソフトの小学校での活用

臨時休業期間中は、各学年でプリント課題を作成し、1週間から2週間に1回の臨時登校日に回収し、新たな課題を持ち帰らせた。

また、児童生徒の学びを止めないため、従来から中学校で採用していたオンラ



イン学習支援ソフトを小学校でも採用し、家庭の端末で学習できるようにした。自分で課題を選択して学習することに加え、教員から児童生徒に課題を送付する機能や、連絡を送る機能もあるため、各校で積極的に活用していた。

新型コロナウイルス感染症を「正しく恐れる」(小・中学校)

新型コロナウイルス感染症を「正しく恐れる」ために必要な基礎知識や、感染予防のために自分たちにできること(手洗い、マスク、手指消毒等)とできるだけ避けた方がよい行動(3密、人に近づきすぎること等)について、分散登校可能日に学習した。

また、新型コロナウイルス感染症に対する不安から、感染者やその接触者に対して、誤った情報による不当な差別、偏見、いじめ等を行うことは、決して許されるものではないことを学び、一人ひとりがお互いを思いやり、冷静に行動することが、自分と自分の大切な家族や仲間の命を守ることにつながることを共通理解した。



←プレゼンテーションを見ながらコロナについて学習中

ZOOMを使った→校長先生からのメッセージ配信



リモート SHR (小・中学校)

臨時休業日に、リモートでショートホームルーム(SHR)を実施した。生徒には、SHRの開始時刻とクラスルームでGoogle Meetを使うことを連絡した。SHRの開始前に、すでに多くの生徒とつながっており、SHRを行うことができた。担任の先生の姿を見ると多くの生徒が笑顔で手を振っていた。服装も様々で家での過ごし方の様子も垣間見ることができた。SHR中の担任の先生からの話を、手を振ったり、アクションボタンを押したりして応えていた。中には、間違えて直接Google Meetでつながろうとした生徒がおり、間違いに気付くまでに時間を要した。普段、学校では見られない姿もあり、クラスのつながりを確認できる取組であった。



←Google Meet



↑ショートホームルームの様子

いつものまいにちをすごすためにできること（幼稚園等）

コロナウイルスの不安が少しでも解消し、自分でできる感染対策として手洗いやマスクに関心もてるようにと願い、職員共同で紙芝居を作成した。大阪大学大学院ホームページに掲載の絵本「いつものまいにちをすごすためにできること」を参考に、幼児に分かりやすく伝わるにはどうすればよいか話し合いながら、絵と文をまとめた。

休業中に少しでも早く子ども達に知ってもらえるように、紙芝居の動画を撮影し、YouTube 川西公式チャンネルから配信を行った。

臨時休業中は電話連絡や教材のポストイン、動画の配信を行ったことで、園で先生や友達と会えることを楽しみにできた、という意見を聞くことができた。



↑休業明けにも紙芝居を読みました

ポストインと動画配信を組み合わせた支援（幼稚園等）

家庭でも幼稚園での遊びを少しでも楽しみ、充実感や満足感を味わえるような支援を行った。

折り紙等を封筒に入れ、家庭へポストイン。園のホームページに園庭に咲いたチューリップの写真と年齢に合わせたチューリップの折り紙の紹介や、今年度始めに配布した幼児教育資料

「すくすくひょうごっこ」を参考にした遊びの紹介をするなど、積極的に動画配信を行なった。

園児や保護者からは、「家での過ごし方が充実した」という声や「動画配信が楽しみだ」という声など、ご家庭で楽しんでいただけた取組となった。



「くすのきさん」と「ふわちゃん」(幼稚園等)



↑宮川幼稚園の守り神の「くすのきさん」



↑幼稚園のみんなが大好きな「ふわちゃん」

YouTube で2回動画配信をした。1回目は幼稚園の守り神の「くすのきさん」が子ども達に、「元気にすごしているか」「みんなに会えることを楽しみにしている」ことを伝えた。2回目は、ウサギの「ふわちゃん」が幼稚園の生き物や花や野菜、果物などを紹介した。幼稚園に来ることが楽しみになるように作成した。ホームページでも動画ではないが「ふわちゃんねる」と名前を付けて、「ふわちゃん」が発信した。

YouTube を利用した授業動画の製作・配信 (小・中学校)

約3ヶ月に及ぶ休校期間において、児童の学びを途切れさせないことを目的に、算数と理科について前学年に履修できなかった単元と、新学年の学習単元を、双方向通信学習アプリとYoutube を利用して配信した。

いずれも、教科書説明や工作、実験等を児童の視点を想定して撮影し、教員が実際に児童に語りかけるように行った。

児童の中には保護者と一緒に視聴して学習を進めたり、理科の実験を実際に家庭でやってみたりするなど、児童の家庭での学習の意欲付けに効果的であった。



←算数動画例
「展開図」



理科動画例→
「種子の発芽」

児童とのつながりを生む学習動画（小・中学校）

長い臨時休業中でも、児童とのつながりをもてるよう、学習動画を作成した。教員がそれぞれの得意な分野や担当の教科・学年でチームを作り、教材や教具を手作りして自主的に撮影に取り組んだ。

題材は、言葉遊びやリコーダー演奏など、1年生から6年生までのだれもが興味を持ち、何度でも繰り返して視聴できるものを選び11本の動画となった。

休校中も学校とつながり、楽しみながら学習できるよう、動画は、ホームページからだれもが視聴できるようにしている。児童が学びをとめないことをめざし、工夫をこらすとともに教員同士のつながりや学びも深まった取組となった。



【国語】

- ・ひらがなとなかよし
- ・「かき」と「かぎ」
- ・「ほ」と「ぽ」
- ・ことばあそび
- ・「ふきのとう」朗読1・2

【理科・生活科】

- ・ミニマトを植えよう
- ・草花あそび

【音楽】

- ・リコーダーレッスン1・2

【保健室から】

- ・手を洗おう！

パワーポイントを使った動画作成・配信（小・中学校）

- ・各教科の授業内容をパワーポイントを使い、図形の変化に合わせて音声を流したり、教員の映像を挿入したり工夫をして作成した。（右図上）
- ・家庭でできる運動を紹介する動画を作成した。（右図下）
- ・1年生向けに校歌が聞けるようにした。
- ・動画リンク集を記載した。
- ・動画配信も一方向ではあるが、配布プリント併用することで効果はあったように感じる。
- ・動画視聴ができない家庭があり、環境整備が課題。

↓ 理科における動画配信



↓ 体育における動画配信



授業動画制作及びケーブルテレビでの配信（小・中学校）

神河町で整備されているケーブルテレビ「K-net」でコロナウイルスへの対策や、休業中の家庭での過ごし方、新学年の先生からのメッセージ、さらには英語や数学の授業を配信した。

双方向ではなかったが、新しい学年の先生方を紹介する中で、先生方の熱いメッセージが生徒にも伝わった。

学習面では、英語科ではALTがコロナウイルスに関連した話題を取り上げるなど、興味深いものとなった。数学でも、小学校からの計算でちょっとしたつまずきから中学3年生の内容まで幅広く網羅し、どの生徒も興味深く学べる授業を展開した。さらに、本校の教員が見本となり家庭でできる体操や、学校司書による良書の紹介なども行った。



YouTube を活用した学習動画の制作と配信（小・中学校）

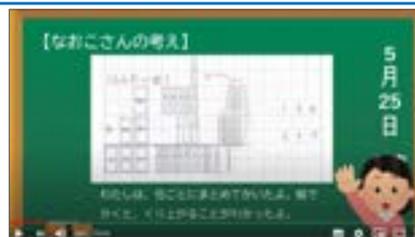
学習や授業の遅れを解消するために、全教科で学習動画を制作し、YouTube にアップした。また、お薦めの YouTube 動画へのリンクもはった。結果、5教科69本、実技教科7本、学活3本の計70本の動画を準備できた。自作の学習動画の再生回数は延べ3800回以上で、ほぼすべての生徒が利用していたようだ。



ネット環境が整っていない生徒については、感染症対策を講じた上でのPC室の利用を可とした。平均すると1人あたり17回利用していたことになり、新たな学びの方法に生徒や教員が出会う契機となった。学校が再開した後も引き続き動画をアップし、授業の予習や復習に活用する教科もあった。

「まなみや」（小・中学校）

4月17日より、幼児・児童・生徒の学習を支援するため、市のホームページに「まなみや」を開設した。幼児には「ようちえんのおともだち」として、おうちの人と視聴するコンテンツを作成し紹介をした。小学生、中学生には自分で学習を進めることのできる「家庭学習の進め方ガイド」（小学校各学年の国語・算数、中学校各学年の国語・数学・社会・理科・英語）と、それらの説明動画を掲載した。5月8日からは、4・5月に小中学校で学習する内容の説明動画を配信した。学校園が再開されるまでに108本の動画を作成し、幼児・児童・生徒の学びの支援を行った。



↑小学校3年生「たし算と引き算のひっ算」



↑ようちえんのこどもたち「あいさつ・あそび」

YouTube を活用した授業動画の制作（小・中学校）

緊急事態宣言の発令に伴う臨時休業により、児童生徒と接することができない状況が続いた。学校との関係を絶やさないう学級担任を中心に定期的なポスティングや電話連絡に加えて、各校のホームページを通じて学習内容や学習の手立てをYouTubeで配信した。



← BAN-BAN テレビで各学校からのメッセージ動画を配信

YouTube で
学習動画や
各学校から
お知らせを
配信 →

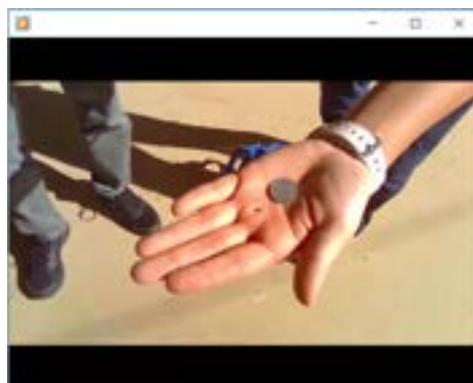


授業動画の制作は経験のないことであったが、家庭で過ごす児童生徒を思う教職員のあたたかな気持ちが伝わる内容となった。また、学習保障にとどまらず、臨時休業中の学校の様子を紹介したり、部活動の先生からのメッセージを配信したりといった内容で、児童生徒や家庭の不安解消に向けた情報発信となった。

1週間に1回程度の頻度で動画をアップ (小・中学校)

休校期間中、各学年で1週間に1回程度動画をホームページ上にアップした。授業を進めるためのものではなく、家庭において、子どもたちが自ら学習するときに役立つ授業動画が多かった。

入学してからの2か月は、1年生にとって、学校生活のルールを身につける大切な時期である。6月に学校生活が始まったときに困らないよう、「ランドセルのしまい方」「提出物の出し方」「引き出しの整理の仕方」などの動画を配信していた。



↑ 動画配信 3年理科「種のまき方」

学校へ来るのが楽しみになる動画 (小・中学校)

臨時休業中の家庭学習については、それぞれの学年で学習プリントを作成し、定期的なポスティングと電話連絡で対応したが、視覚的に訴えることができる動画配信も有効であるため、市内全校で動画を作成することとなった。

本校では、学校再開を視野に入れて、「学校へ来るのが楽しみになる動画」を作成することを目的とした。1年生は小学校生活が始まるので学校紹介を中心とした内容にしたり、3年生は新しく始まる理科・社会を紹介したり、6年生は運動会に向けて家庭でできる運動を紹介したりするなど、担任が子ども達に語りかけ、家庭生活から学校生活へスムーズに移行できるよう工夫した。

屋上から学校の周りの施設等を→方角を確かめながら紹介 (3年)



←家庭でできる運動の実演・紹介 (6年)

在宅勤務中の動画制作と KCV（加東市ケーブルビジョン）を活用した授業配信（小・中）

臨時休業期間中の学習保障、児童と教員をつなぐ1つの手立てとして授業の動画配信を行った。

学校での密をさけるため、在宅勤務が実施される中、4月には、KCVを活用した授業配信を行った。5月に入り、本校ホームページのルームに各学年ごとに算数や外国語などの授業動画をアップした。それぞれの学校に在籍する児童だけが自由に閲覧できるように配慮しIDとパスワードを配布した。

在宅勤務の中、交代でビデオを取り合い、編集を行う作業は、大変であったが、会えない児童のために全職員一丸となって取り組んだ。児童からも「ビデオで先生たちに会えて良かった。」「安心した。」という感想が寄せられた。



↑ 1年生「学校探検」 動画撮影中

「家庭学習のモチベーション維持」と「学校再開後への円滑な接続」（小・中）

休校中、担任と児童とをつなぎ、「家庭学習のモチベーション維持」と「学校再開後への円滑な接続」を図るために、YouTubeを使って、各担任からのメッセージを配信する取組を行った。

配信は計3回、時間は1本5分程度。担任の自己紹介クイズなど担任と児童、さらには保護者とをつなぐ動画をはじめ、生活科や理科で育てている花や野菜の成長の様子や、社会科の都道府県クイズなど、家庭学習と学校再開後の学習活動を円滑につなぐことのできるような学習動画を配信した。

保護者からは、「先生からの楽しい動画を親子で見て、外に出られないことや学校に行けないストレスを吹き飛ばし、心が温かくなりました。」等のコメントが多数寄せられた。



↑ 実際の配信画面。
（3年生、春みつけをしにいこう）

コロナに負けない体づくりの DVD 作成と配布 (小・中学校)

コロナに負けない体づくり

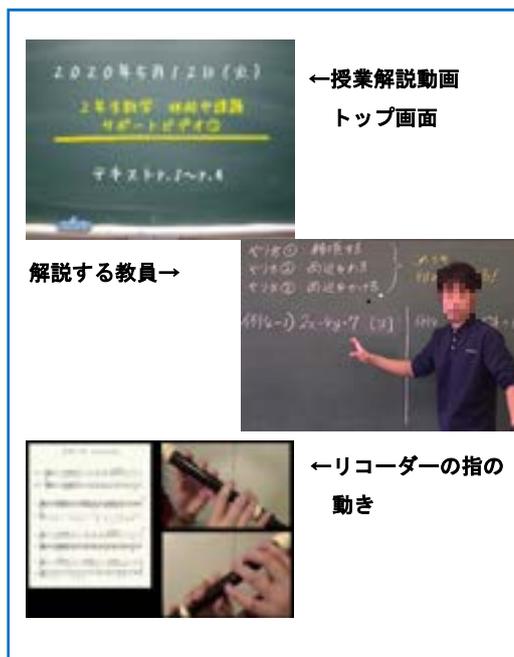
- コロナに負けない体づくりを目的に休校中にやってほしいストレッチなどを動画にまとめ、DVD を作成した。
- 作成した DVD を各家庭へ届けるとともに、休校中に児童生徒が活用していた市内の放課後等デイサービス事業所 (7カ所) にも配布し、活用をお願いした。



学校 HP を活用した生徒へのメッセージ (小・中学校)

学校HPに休校中の学校の様子や教員から生徒へのメッセージを掲載した。課題配布時には、学校HPに教科担任からのワンポイントアドバイスを紹介し、特に数学と音楽は解説動画を配信した。

数学では、家庭学習の補助として生徒のつまずきやすいポイントを説明した動画を作成した。音楽では、リコーダーの運指を動画で確認できるように工夫した。その他、リズムゲームや作品制作など学年に応じた課題を設定し、生徒の家庭学習を支援した。



QRコードを使った資料共有（小・中学校）

学級担任や教科担当教員は、家庭での学習を支援するため、各々工夫してプリントや動画等の資料を作成して配信した。

臨時休業が始まってしばらくの間は、学校で使用しているタブレットを持ち帰っていなかったため、児童はそれぞれの家庭にある端末で学校からの情報を受け取っていた。

そのため、どの端末からでも視聴できるように、作成した資料をQRコードにして児童に知らせた。

ここで紹介している理科の発芽の学習動画は、児童が家で育てている大豆の成長の様子と比べたり、学校再開後の授業で大豆の成長を振り返る際の資料としたりして活用することができた。



↑大豆の種が発芽する様子を動画で撮影

学校ホームページの活用（小・中学校）

数学科では、緊急事態宣言中、配布したプリントの解説について、イラストを使った動画を作成し、ホームページにアップした。予習動画として活用したことによって、計算方法が統一化でき、基礎基本の定着につながった。

社会科では、3年生の授業の予習として動画を作成し、学校ホームページにアップした。緊急事態宣言解除後には、授業で同じ動画の内容を教材として利用したことで、基礎の定着に加え、歴史的な背景を押さえることにつながった。

保健体育科では、県教委「運動プログラム」や、自宅でできる縄跳び運動などをホームページにアップし、休校中の運動不足やストレス解消のための運動を紹介した。



↑ ホームページにアップした学習支援教材

ブログによる情報発信 (小・中学校)

年度当初の4月～5月、ほとんどの日が臨時休業となり、授業ができない状況になった。定期的に家庭訪問は行っていたが、教職員の思いや願いを子ども達や家庭に届けたい思いから、ブログを作成し、発信することにした。

ブログの内容は、新型コロナ対策、新出漢字やひらがなの学習、ストレスを発散させる体操など、様々な内容を動画で発信できた。ブログの作成の仕方を研修するとともに、学年部で動画を作成し、週に1回ぐらい更新を行った。児童に対する気持ちを込めて協力しながら作成し、中には劇化して歌いながら手洗いの仕方を指導する楽しい動画も発信できた。



ウイルス対策を伝える動画
(教職員による劇含む)

独自のホームページ作成による情報発信 (小・中学校)

児童及び教職員全員に Google アカウントを付与した。

市教育委員会に相談し、期間限定での本校独自のホームページ開設の許可を得た。

文部科学省や民間企業等から発信されている学習コンテンツの掲載や学校再開にあたっての注意事項等の発信を行った。

学校再開後も、学校行事での児童の様子や PTA 活動としての情報発信等に活用している。

今後さらに、学習コンテンツの充実を図ったり、児童・保護者向けの情報発信ツールとして活用の幅を広げたりしていく予定である。



学校からのメッセージを動画配信 (小・中学校)

臨時休業中 (4月～5月)、「市川町教育委員会ホームページ」を活用し、学校からのメッセージを動画配信した。

内容は、家庭でできる運動・各学年の教材・ひまわりの種の植え方など多彩で、児童・保護者に「かわくん」「なべちゃん」(教員扮する)からメッセージを送った。

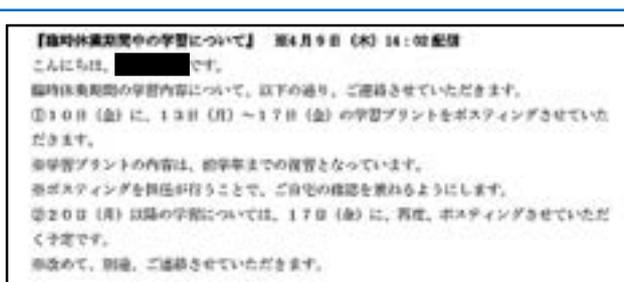
保護者の関心も高く、「楽しく観ています。」「運動したり家族でひまわりの種を植えたりしました。」「先生方の声を聞いて落ち着いて生活しています。」など好評を得た。しかし、ホームページ上の動画配信できる最大の時間は、約2分までであった。その後GIGAスクール構想のおかげもあり、今ではテレビ会議ができるまでネット環境を整えていただいている。



学校ホームページの充実と活用 (小・中学校)

学校ホームページに学習内容を掲載したり、学習プリントをポスティングしたり等、家庭で過ごす児童生徒が生活のリズムを整えられるよう様々な工夫を重ねた。

机に向かって行う学習だけでなく、学校キャラクターにちなんだ体操や昼食調理を教員が実演し、児童生徒にやってみようと呼ぶ動画等も作成され、学校ホームページに公開した。



↑ ポスティングの予告～メール配信システムの活用



↑ 生活にメリハリをつけよう～学校HPに動画掲載

学校再開に向けた様子や教員からのメッセージを配信 (小・中学校)

学校のホームページに「休校中の生活」の項目を設け、家庭生活や学習についての提案や臨時休業中の課題や解説動画の配信、また、学校再開後、スムーズに学校生活に戻ることができるよう学校再開に向けた準備の様子や教員からのメッセージの送信を行った。

毎日のやるべき課題がはっきりとし、家庭での生活リズムも整えることができ、効果的であった。また、教員からのメッセージは、前向きな気持ちになることができ、学校再開への気持ちの準備につながったと、子ども達から好評であった。



学校ホームページによる生活リズム指導 (小・中学校)

休業期間が長くなり、生徒の生活に問題点が見えてきた。①生活リズムが崩れる。②何をしたらいいのかわからず、ダラダラ過ごしてしまう。③孤立感を感じている、クラスの友達との一体感がない。

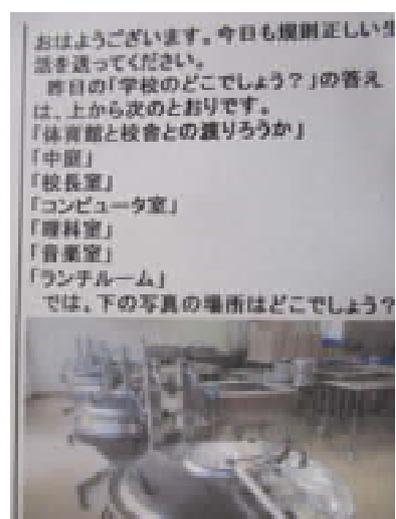
本校では、学校ホームページに学年のページを設け、8:30に朝礼として、その日の時間割とコメントを、15:30に終礼としてコメントをアップした。時間割は学習ばかりではなく、「音楽」好きな音楽を聴こうなど、すべての教科で行った。この期間のホームページのアクセス数は非常に多く、多くの生徒がホームページを見ていたようである。



クイズ・まちがいさがし・おもしろ問題 (小・中学校)

本校のホームページは、1日平均300を超えるアクセスがある。そこで、ホームページを利用し、毎日子ども達への呼びかけや学校に関するクイズ・まちがいさがし・算数おもしろ問題などを掲載した。

入学式後、すぐに休校になった1年生の保護者から「小学校にはこんなにいろいろな場所があることがわかり、早く学校に行きたいという期待が膨らんでいます」というお話を聞くことができた。また、2年生の子どもから、「毎日、あるなしクイズやまちがいさがしを出してくれてありがとうございます。朝、ホームページの問題をしてから、勉強しています。」というお便りが学校に届いた。オンライン授業などはできなかったが、ホームページがほんのわずかでも子ども達の生活に役立ったのではと感じる出来事であった。



↑学校クイズ

YouTube を活用した応援メッセージの配信 (小・中学校)

臨時休業が2カ月にわたったことをうけ、児童と学校を結ぶ応援メッセージ動画を制作し、YouTube で配信した。

1年生は、入学したばかりで楽しみにしていた学校の様子も先生のことわからないままであった。この動画を繰り返し見ながら、先生の顔と名前を覚えたという児童もいた。

学校再開を楽しみにする気持ちを持ってくれるよう、児童と先生をつなぎ、子ども達に応援の気持ちを届けられるよう各先生方が、工夫しながら笑顔のメッセージを届けた。



YouTube による
動画メッセージ配信

「今日の1冊」（小・中学校）

本年度、学校ホームページで「今日の1冊、なんだろう？」と題して本を紹介する取組を始めた。臨時休業が長期化する中、直接会うことのできない児童生徒とのオンライン・コミュニケーションの一つとして、4月21日に最初の一冊を紹介。掲載する本は、学校司書を中心に教職員が選定し、学校再開後は図書委員会児童生徒のおすすめ本を加えて季節・学習テーマに応じた本の掲載を続けている。

「ホームページを見て本を借りに来ました」「〇〇先生のおすすめ本、読んだよ」という児童生徒や、「いつも楽しみにしています」という地域の声など、一冊の本を通した温かなつながりを感じながら、今後も取組を継続していく。



2 「学校園再開後」の対応

(1) 感染対策

- | | |
|--------------|------------------------|
| ア 消毒作業 | イ 飛沫感染防止のための衝立、製作、対策等 |
| ウ マスクの着用 | エ 環境の工夫と意識の啓発 |
| オ 手洗いの取組 | カ 給食の実施と新しい生活様式の仕組みづくり |
| キ 特別支援における対策 | ク 「技能教科」における配慮 |



兵庫県マスコットはばタン

消毒作業の取組 (小・中学校)

(消毒作業)

- ・ 学校・生徒の実態を考慮し、放課後に消毒作業をおこなっている。
- ・ 消毒台カートを作製。カートの上に棚を設置し、学級学年ごとに消毒セットを配置する。終わるとカートに乗せたまま保健室へ移動し、次回の消毒に備えられるようにする。
- ・ 各場所に、「消毒済」「清掃済」の札を用意し、重ねて作業しないように「見える化」している。



↑ 消毒台カートによる感染予防対策

校内消毒のボランティア活動 (小・中学校)

2学期から、地域・保護者のボランティアが毎日放課後に校内の消毒作業にあたっている。約30名のボランティアで、ローテーションを組み、2か所ある階段の手すりの消毒、トイレの清掃と消毒、窓ふき、特別教室の清掃を行っている。教職員に代わってボランティアの方が消毒作業をしてくださるおかげで、教職員も本来の業務に専念する時間ができ、たいへん感謝している。



←階段の手すりの消毒



トイレの清掃・消毒 →

手指消毒時における密を避ける工夫（小・中学校）

朝の登校時、児童玄関前でマスクの確認・手指消毒を行っている。その際、密を避けるため、コーンバーを用い児童間の距離を適切に保てるよう工夫している。この児童間の距離を適切に保てるようにするための工夫は、教室内、廊下、トイレの入口など、多くの場所で行っている。

児童の検温については、1ヶ月単位の個別の健康観察表を作成し、朝一番に確認を行っている。この健康観察表は、該当月が終わると学校で保管し、児童の健康状態の変化を確認できるようにしている。これらの取組や日常的な手洗いの励行により、児童の3密回避に対する意識の向上・維持が見られている。



←登校時に手指消毒を行っている所

登校並びに手指消毒時の密を避ける場の工夫→



PTAの協力による校内の清掃・消毒活動（小・中学校）

例年通りのPTA活動ができない状況の中、コロナ対応に追われる教職員への支援はできないかとPTAとして協議した。生徒らから「トイレは汚いので使いたくない」との声を聞き、感染対策や学校環境整備の視点で、PTAが費用負担をして専門業者による清掃と消毒を実施した。徹底的な清掃を行うことで、安全点検にもなった。現在は、業者よりメンテナンスのポイントの説明を受け、衛生サポートスタッフが環境維持に努めている。生徒たちもきれいになったトイレは、これまで以上に丁寧に利用するようになった。この活動は、教職員の生徒に関わる時間の確保、安全・安心の確保のための活動として始まったが、結果として、生徒会とPTAが直接つながるきっかけとなり、生徒から今後も共同で活動をしようという声が出てきている。



↑専門業者による徹底清掃と消毒

PTAとの合同消毒作業（小・中学校）

放課後にPTA三役と学校職員とで「合同消毒作業」を行った。3密の温床となりやすい体育館の衛生環境を改善する目的で実施した。

水ぶきで汚れを取り→消毒液で拭き→もう一度水ぶきで仕上げるという工程を丁寧に作業し、体育館を美しく除菌することができた。

コロナ禍でPTAの活動ができない状況の中で、子ども達のために「何かできることはないか」との思いでつながった。少人数という縛りがあるにせよ、学校とPTAが協力して取り組むことに意義はあった。



↑PTAとの合同消毒作業の様子

保護者・地域ボランティアによる清掃と消毒作業（小・中学校）

感染予防のため、放課後に教職員の手で、共用部分の消毒作業を行ってきた。担任は教室、他の職員で教室外と分担したのだが、元々人手が足りない中、毎日の作業となると時間もかかり、教職員も疲弊していく。

そこで学校から保護者に放課後清掃ボランティアを募集、また地域には地域学校協働活動として地域ボランティアを広く募集していただいた。週1回、リスクの高い児童用トイレは保護者ボランティア、廊下を含む各階のフロアを地域ボランティアの皆様にご協力いただき、スティッククリーナー、お掃除ロボットを地域にお借りし、効率よく清掃・消毒作業ができた。



↑清掃グッズ



↑受付



↑保護者ボランティア



↑地域ボランティア

次亜塩素酸水生成器の設置（小・中学校）

令和2年8月、全市立学校に次亜塩素酸水生成器を設置した。当該校は次亜塩素酸水やマイペット、アルコールを使って消毒作業を行っている。毎日、管理職及び教職員が、校内を巡回し、大勢がよく手を触れる箇所を消毒している。また生徒は下校時に自分の机を消毒するほか、移動教室の際は、授業終了後に、次に教室を使うクラスのために、使用した机等を消毒している。

また、生徒会活動でも感染症対策に取り組んでいる。保健委員会が中心となり、授業中および休み時間に積極的に換気を行っている。そのほか、整備委員会が加湿器の管理を行い、学習環境の整備に努めている。

机の清掃↓



↑よく手を触れる箇所の清掃

手作りのシールド作成（幼稚園等）

4月の緊急事態宣言により、学校園が休園となった2ヶ月余り、園再開後の生活の仕方を職員で話し合い、安心して友達と園生活が送れるようにアクリル板の設置を考えた。しかし、マスク同様、アクリル板は購入困難で、手作りのシールド作成を行うこととした。

ラミネートとプラスチックの段ボールを使い、休園期間に作成をした。園再開と同時に使用を始める。給食や、製作の時など、ソーシャルディスタンスを取りながら、活動ができる為、極力、いつもと変わらない活動を行うことができた。使用後の消毒もしやすく、保育室での保管も、折りたためるため、場所を取らずにすんだ。作成に時間はかかったが、園児の遊びを保証し、教員の負担も少ない物となっている。



↑ 1台の机に通常4人のところ、2人で座っている。（給食時）

※向かい合いや、L型、対角線上など活動に応じて、座り方を変更することもできる。

自作セパレーター（幼稚園等）

本年度は、3クラス63名の園児が在籍している。本園では、天板サイズ縦45cm×横90cmの机を園児2人で使用しており、1人に1つの机がないため、距離を保つには、長辺を向かい合わせにしてすわり、セパレーターで遮るしかない状況であった。

市販のアクリルセパレーターは、大変高価であり、また、需要が高まっていたことから品切れも多かった。そこで、簡単に入手できる材料を調達して、セパレーターを自作することにした。材料は、透明塩ビ板（厚さ1mm、35×45cm）を3cmアングル4個で両端を固定した。全クラス分、合計33個を作成した。軽量で重ねることもでき、あまりかさばらない。また、予備の材料を常備しているため、割れた場合でもすぐに補修や新たに作成できるメリットがあった。



↑ 左側にあるのがセパレーター

アクリル板による飛沫感染予防（幼稚園等）

本園では、感染予防として、手洗い、うがいの他、園児への意識づけとして紙芝居や絵本などで感染予防について伝えてきた。その中で、園児たちは飛沫の拡大を防ぐことが大切だと理解し始めた。

そこで、感染予防の取組の一つとして、給食時に机の中央にアクリル板を設置し、飛沫感染の予防をしている。

（2歳児～5歳児）

アクリル板を設置したことで、より一層、園児の意識が高まり、お互いに静かに給食を食べている。1歳児は、アクリル板越しの保育が難しいため、保育教諭がマスクをして食事の援助をしている。



↑ 圧迫感がないよう透明度の高いアクリル板設置をしている。

透明な飛沫予防パーテーションを手作り（幼稚園等）

給食時の感染予防対策として、園のテーブルの大きさに合った、透明な飛沫防止パーテーションを手作りした。

保育室に配置できるテーブルの台数は限られており、1台を3名の園児で使用している。対面で着席した際、食事時の飛沫を防ぎながらも、透明な板を使用したことで、友達の様子を感じながら、食事をする事ができる。

給食の準備中や食後はマスクをし、食事時の会話も控えるなど、子ども達も感染予防についての意識が定着してきていると感じる。



↑ 友達と一緒に食べている様子



↑ 手作りのパーテーション

園内にあるものを活用してパーティションを制作（幼稚園等）

再開前に職員室に園内にある物を活用してパーティションを作った。再開にあたり、手洗い場の前に並ぶ目印を設けた。各教室で制作や昼食の際に使うパーティションも教職員がラミネート等で手作り。入園式等では座席の間隔を広くとる。降園前の保護者連絡はボードに活動の様子を掲示。ホームページに連絡事項を

入園式（小学校体育館）職員室のパーティション



手洗い場の目印

教室のパーティション

毎日掲載。毎朝健康観察票を提出。外部人材を活用した行事は全て中止。全園児203名が大保育室に集合することはなく、終業式等の儀式は園内放送で実施している。誕生会等の季節行事も原則として各学級か各学年で行い、登降園は学年ごとに10分ずつ時間差を設けている。運動会は学級ごとに4日間で開催するなど、工夫して感染予防に努めている。

園児にやさしい感染予防対策（幼稚園等）

幼稚園では、座っての制作活動や飲食の際の飛沫防止のために、教員手作りの仕切りを机の上に設置している。仕切りは園児が持ち運びしやすいように工夫されており、手際よくセッティングしている。

また、園児が歌ったり運動したりする際に、スムーズに間隔をあけられるよう床に目印のシールが貼ってある。自分たちで適切な距離を保ちながら元気いっぱい活動できている。

園児はマスクを着けての生活にも随分慣れてきている。マスクは保護者の手作りで、その子に合ったサイズやお気に入りのキャラクターを入れたものが多く、保護者の愛情が感じられる。



←手作りの仕切りを用いての制作活動

間隔をあけての歌の練習→



丁寧な消毒作業の実施と工夫して作成した衝立（幼稚園等）

保育室には積木やままごと等、子ども同士が遊びの中で共用する遊具・用具が多くある。子どもが安心して衛生的に使用できるように、定期的に、あるいは必要に応じて消毒を丁寧にするようにしている。

また、園では複数人掛けの机を使っているが、制作遊びや食事の場面等で、向かいや隣りの席の子どもと間隔を取ることが難しい。そこで、透明の衝立を職員で作成して、座席の間に置き、感染予防に努めることとした。拭き取りがしやすく、持ち運びがしやすいものができるだけ安価に作成できるように、ラミネートフィルムや100円均一の商品を使って作成した。



「おいしいね」と顔を見合わせています

飛沫パーテーションの設置とマスク着用の習慣づけ（幼稚園等）

幼児の机は4人で座るタイプのため、給食や製作では、飛沫対策パーテーションを設置し、飛沫が飛ばないように場の工夫をした。また、給食ではマスクをはずすため、個人のマスク置き場を作り、毎日マスク入れの袋を交換し、衛生面に気を付けるようにした。

子ども達が感染予防の必要性を理解して生活できるよう、日々の保育を通じて伝えている。そのことで、子ども達は、給食中はマスクをしていないため、なるべく喋らないようにすることが大切だということを理解し、静かに食べるようになってきている。また、給食が終わった子からすぐにマスクをつけるようになるなど、マスク着用の習慣が身についている。



←給食時の
パーテーション設置



個人のマスク置き場→

飛沫感染予防用デスクガードの設置 (小・中学校)

1年生の教室の児童机に「飛沫感染予防用デスクガード」を取り付けた。これで子ども達は、安心して授業を受けることができるとともに、友達同士の対話的な学習活動も可能となった。

(保護者の感想)

「机の仕切りなど、自分の目でどういう風に学校生活を送っているのかを見ることができてとても良かった。コロナが増えているのでとても心配だが、楽しく学校に行ってくれたらと思う。」

飛沫感染予防用のデスクガードを設置 →



← 全教室で安全な対話的活動も可能に

「アクリル板」「透明衝立」「透明スクリーン」 (小・中学校)

飛沫感染予防用として「アクリル板」「透明衝立」「透明スクリーン」を活用した。

理科室では、十分な間隔がとれない座席間にアクリル板を、図書室では対面座席に透明衝立(自作)を配置した。英語教室では、昇降式の透明スクリーンを

設置し(自作)教員やALTの発音の際の口元を見せたり、生徒同士のコミュニケーション活動をしたりする際に活用した。

また、保健室も透明スクリーンで部屋を二分し、体調のすぐれない生徒とけが等で来室する生徒を分けて対応した。授業をはじめ、学校生活全般に多くの制限がある中で、工夫を凝らしながら少しでも多く本来の活動を取り入れることにより、生徒が生き生きと活動する姿が見られた。



←図書室の透明衝立

透明スクリーンを下ろして、コミュニケーション活動 →



「三密回避」を基本とした感染予防対策(小・中学校)

感染予防対策のために、「三密回避」を基本として、学校行事を計画した。

まず、授業参観は参加人数の制限を行い、参観時間を地区ごとに設定したり、学年により日時をずらしたりするなど、一度に大人数が集まらないような工夫を行った。

また、個別懇談会では、アクリル板を設置し、対面を避けた。また、斜めに座る等、飛沫感染予防を行った。学校の来校者には、正面玄関でアルコール消毒、体温測定を必ず行ってもらうようにした。

「三密回避」を念頭に行事を計画することで、地域保護者の方々にも理解をしてもらうことができた。



↑手洗いやマスク等の啓発

教室環境の整備と過ごし方(小・中学校)

学校再開後、教室環境においては、列を削減し座席間を広くすることで生徒の距離を保つようにした。また、学級活動や授業中、生徒が接近して活動する場面も多くあるため、生徒の机に飛沫防止ガードを設置している。

マスク着用と飛沫防止ガードを使用することで、生徒たちの感染への不安や感染リスクを軽減し、英語の発音練習、音楽の発声、また各教科でのグループやペア学習をスムーズに行うことができる。給食の時間にはマスクを外すため、飛沫防止ガードを使用して全員が前を向いて食べるようにした。



← 給食の様子



授業中の様子→

感染症予防啓発と教職員による飛沫感染予防対策（小・中学校）

①児童生徒について

児童生徒に、生きる力の1つとして感染予防対策の大切さを伝えている。

マスク着用やこまめな手洗いはもちろんのこと、ソーシャルディスタンスをとることなどである。例えば、手洗いやトイレで並ぶとき、廊下を歩くときは間隔をとって密接にならないよう日々の生活を通して身に付けている。



←フェイスシールドの着用



↑ソーシャルディスタンスをとって



←パーティションの設置

②教職員について

マスクの着用やフェイスシールドの着用、職員室内で対面する机の間に透明なビニールで作ったパーティションを設置して飛沫感染予防に努めている。

飛沫感染予防及び意識向上をねらいとしたアクリル版の活用（小・中）

教室での飛沫予防のため、児童一人一人に高さ43cmのコの字型アクリル板を準備した。児童は、グループ活動時や給食時に、自分で机の上に置き、アクリル板の両側を机とゴムで固定して使用している。消毒は、随時スクール・サポート・スタッフがやっている。



←給食時のアクリル板使用の様子

職員室アクリル→
板パーティション
設置の様子



また、職員室では、高さ60cmのアクリル板パーティションで全職員の机を仕切っている。校長室の応接テーブル上にもアクリル板を置き、会議や来客時の飛沫感染予防を行っている。

飛沫が直接他人に届くことを防ぐとともに、児童や職員の感染予防意識を高めることにも役立っている。

飛沫予防アクリルパーテーションの設置 (小・中学校)

- 「学校感染症対策・学習保障取組支援事業補助金」を活用し、飛沫防止アクリルパーテーションを設置した。
- コンピューター室では、生徒一人一人の座席間に設置した。
- 音楽室では、等身大の飛沫防止パーテーションを設置した。
- 換気・マスク等の対策と合わせて環境を整えることで、生徒が安心して学ぶことができるよう感染拡大予防に取り組んでいる。



飛沫予防用デスクトップパネル設置 (幼稚園等)

- 主に給食時に使用する目的で設置。
- 給食時に対面に座る園児との間に設置することで、マスクを外し、安心して食事ができるようになった。
- パネルに食器の置き方などを掲示することで、給食時の言葉かけによる指導を少なくし、園児自らが気づけるような指導に切り替えた。

↓パネルにメニューを載せている様子



学習相談員のフェイスシールド着用（小・中学校）

日本語指導が必要な児童生徒の支援として、西宮市では「生活・学習相談員」を配置している。

授業時に学習言語を支援するため、児童生徒等の隣で活動する時間が長いことから、マスクの着用と併せて、フェイスシールドを使用できるように配付し、学校や対

象児童生徒・相談員の事情に合わせて着用できるようにした。日本語指導の一環として、相談員が口径を児童生徒に見せる場面もあり、マスクを外さないといけない時に、各校でフェイスシールドを効果的に活用できた。



↑フェイスシールドを着用した指導の様子

PC室と図書室の感染予防対策（小・中学校）

学校内においては、「密」を避けることが難しい場合も多く、一斉授業再開後では授業内での工夫が求められた。

PC室は一人一台であるものの対面での配置になっていたため、教員手作りの間仕切りを作成した。

また、図書室の貸し出しにおいても密を避けるため、距離をとるための足元の印に加え、アクリル板の設置をおこない、当番と借りる生徒の飛沫感染の予防に努めた。



↑ PC室
一人ずつの仕切り



↑図書室
貸出カウンタ

手作りパーテーションと手洗い啓発ポスター（小・中学校）

学校での取り組みの一つとして、職員室や特別教室等多くの人が利用するような場所に、飛沫感染のリスクを抑えるためのパーテーションの作成がある。学校園再開後はあらゆる物資が少ないなか、廃材を利用して作成するなど何とか児童生徒が安心して学習に専念できるよう配慮する取り組みを実施した。



また学校園再開後すぐは、まだ手洗いや消毒の習慣がついておらず、手洗い等の啓発のため、ポスターだけでなくビニール手袋を活用して立体的なものを準備するなどし、手洗いなどを奨励するべく働きかけた。各校の様々な取組によって、現在手洗いや消毒などの基本的な感染症対策は学校園で広く浸透している状況である。



図書室のシールドの設置（小・中学校）

図書室の机上のシールドを作製。ホームセンターで材料の塩ビ管とビニールシートを購入した。



コロナ後に撤収しやすいように継ぎ手には接着剤を

使用せずに差し込みだけで組み立てた。ビニールシートも清掃や交換がしやすいようにクリップ止めにした。

図書室の入退室時の手の消毒や座るときは、三人席の中央を空けるなど感染予防対策を行った。

アクリル板を掲示板としても有効活用 (小・中学校)

パソコン室の机が対面式で、区切りが無かったため、臨時休業中にパーティションを作製した。

単なるパーティションにならないよう、アルファベットやローマ字入力の掲示物を貼り付けた。

対面による飛沫を防止できるとともに、掲示物の工夫により、これまで以上に充実した授業を行うことができた。



↑パーティションを工夫してパソコンを使う

向かい合っでの食事を可能にするアクリル板 (小・中学校)

感染予防対策のため、給食時は、児童同士が間隔を空け、同じ方向を向いて食事をとっている。しかし、教員と児童は向かい合って食事をとることが多いため、間に透明のアクリル板を設置している。

このことにより、安心して給食を実施することができている。

(マスクを外しての指導は行わない)

職員室では、感染予防対策のため、すべての向かい合わせた机の間に衝立を設置している。透明のラミネートシートを活用することで、お互いに表情を見てコミュニケーションを取りながら業務を行えるようにしている。また、衝立の下に隙間を設けることで、書類等の受け渡しができるように工夫している。



←児童と教員の間
に、透明のアクリル
板を設置

ラミネートシートを
活用した衝立 →
(下に隙間がある)



様々な感染予防対策グッズを自作(小・中学校)

各学校で、さまざまな感染予防対策を行ってきた。

全員がそろって授業を進めていく際、理科室や技術室などは4人掛けの対面テーブルであるため、できるだけ学校にあるものを使って中央にシールドを張った。例えば、理科室は実験で使うスタンドを、技術室は万力を使って固

定している。授業だけではなく、三者懇談では教員と保護者の間に透明のシートを設置するなど、感染予防策を講じた。

また、感染症対策に加え熱中症対策も考慮し、自作でグラウンドにミストシャワーを設置したり、生徒が登下校時に日傘を使用するなど、その時にできることを工夫してきた。



↑ 技術室では万力を使用



↓ 三者懇談用



← 理科室では実験用スタンドを使用

話し合い活動を可能にする卓上シールドの使用(小・中学校)

学校再開後、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、主体的・対話的な学習に欠かせない、話し合う場面が、少なくなった。

そこで、本校では児童一人一人に卓上シールドを用意し、話し合い活動を保障した。

ペアトークや、グループでの話し合い活動を取り入れることで、児童から様々な意見が出てくるようになった。相手の意見を取り入れ、自分自身の考えを広げ、深める場面が増えてきている。



↑ 卓上シールドの使用

吹奏楽の活動における感染予防対策(小・中学校)

吹奏楽の活動では感染予防の対策として、消毒や換気をしっかりと行いながら、演奏時には一人ひとりの前面と左右をパーテーションで区切り飛沫の拡大を徹底的に防ぐよう心がけた。また部屋には病院などで利用されている除菌装置を設置し、学校生活において感染拡大を絶対にさせない努力を行った。

校舎には手洗い場を増設し、生徒会保健委員会やスクールサポートスタッフの方が常に衛生面に気をつけ、消毒液や、石鹼の補充、体温計の設置やソーシャルディスタンスを促すシールを床に貼ったりした。



↑ 感染予防対策の様子

赤いテープとパーテーション(小・中学校)

学校再開後、感染症対策として、登校前の検温、マスクの着用、こまめな手・指の消毒を児童・保護者に呼びかけた。トイレや手洗い場の待機場所に赤いテープを貼り、密にならないようにした。

10月になり各教室では、授業中の話し合い活動や給食は、パーテーションを置いて行うようにしている。



手洗いの順番を待っている児童



パーテーションをおいての給食

簡易パーテーションの制作(小・中学校)

給食中に感染の危険性が高くなると言われていたため、職員が簡易のパーテーションを制作し、給食時に活用した。

給食中の飛沫拡散を防止できるとともに、学級担任も児童自身も安心感をもって給食をとることができた。

また、サイズはA3サイズで十分とは言えないものの、周囲の友だちに対する配慮の意識を高めることができた。



↑パーテーションを工夫して給食

マスク用のコップを活用（幼稚園等）

マスク用のコップを一人一つずつ用意し、自分で管理しやすいようにした。外遊びや、食事の時など、マスクを取り外す際に、自分でコップに入れることで、友達のマスクと間違えることもなくなった。



↑給食中、マスクをコップに入れているところ

降園後、コップは消毒し、毎日清潔に使えるようにした。繰り返すことで、“マスクはコップに入れる”、“マスクは清潔に扱う”という習慣が身に付いた。

また、年長児は、就学に向けて、3学期からマスクを取り外す際は、ポケットに入れて管理するよう指導した。

マスク着用の意識付け（幼稚園等）

登園時から2歳児以上はマスクを着用し、保育中も運動遊びや給食、午睡の時以外はマスクを外さないように指導を行った。幼い子ども達ながらもマスク生活は日常の当たり前の姿になりつつあり、園児や保護者にも意識付けられたように思う。



←話を聞く時
(友達との間隔を開けて座る)



←給食の様子
(近距離での向かい合わせを避けて座る)

また、職員も常時マスクを着用し、指導の際に口元が見えた方がよい場合は、マウスシールドなどを用いるようにした。

保育室では園児同士が間隔を空けることを意識できるように、床や机にビニールテープやシールなどで印を付けた。遊びや生活の中で、園児自身が自分や友達同士で確認し合える環境づくりを心掛けた。

園児にマスク着用の必要性の理解の啓発（幼稚園等）

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3・4・5歳児や職員は必ず、マスクの着用をしている。2歳児も可能な園児は着用している。

なぜ、マスクをしないといけないのか、マスクの必要性について園児にもわかりやすく伝えるために、会話・咳・くしゃみなどでは、飛沫がどれくらい飛ぶのかをペープサートを使って指導した。マスクは自分の体を守るために必要であることを知らせ、その他にも丁寧な手洗い、食事時の会話を控えめにするなど、園児自身も出来ることを意識して取り組めるように保健指導している。



←マスクの大切さについて話を聞いている所

飛沫がどれくらい飛ぶのかを伝えて
いる所



集団生活を可能にするための様々な取組（小・中学校）

- ・集団での登下校時は、マスクを着用し、距離をとり会話を控えるようにした。夏場のマスク着用は息苦しく熱中症を防ぐためにマスクをとっての登下校も実施した。
- ・全校児童が一堂に会してのランチルームでの給食を見直し、児童の距離を取り、対面にならないようにした。また、密にならないように5・6年生は各教室で給食を実施した。
- ・手指消毒、手洗いを励行し、立ち位置をマークし、距離をとった。
- ・消毒作業は、児童の帰宅後、全教職員で接触頻度の高いところを中心に実施した。
- ・児童集会などでは、児童間の距離を取りマスクを着用し、換気をして実施した。
- ・教室は2方向からの換気を常時行った。また、気温の低い時には、コート等を着用した。



↑ 手洗いの立ち位置

食事時間以外のマスク着用の徹底と時間割の工夫（小・中学校）

本校においては集団感染から児童を守る取組として、手洗い・消毒・換気はもちろんのこと、食事時間以外のマスク着用を徹底した。しかし、学校再開後は熱中症対策も行

わなければならない、運動場で遊ぶ場合はマスクを外してよいこととした。このことにより、靴箱付近にマスクを外したまままで密の状況が生じることから、休み時間の運動場利用を3学年ごとの交代制とした(時間割参照)。

図書室については、マスクを着用しての利用であるが、運動場を利用できない児童が殺到するのを避けるため、1学年ごとの利用とした。

運動場での遊びについては、11月からマスク着用で全学年が同時に利用しているが、図書室については、この時間割を継続して利用している。

		月	火	水	木	金
守徳小	運動場	1・3・5時	2・4・6時	【11月以降】 【11月以降】 高熱	1・3・5時	2・4・6時
	図書室	1時-1時30分 3時30分-4時	1時		1時	1時
徳林小	運動場	2・4・6時	1・3・5時		2・4・6時	1・3・5時
	図書室	1時-1時30分 3時30分-4時	1時		1時	1時

↑ 運動場・図書室利用時間割

食事中における感染防止対策の工夫（幼稚園等）

牛乳を飲む時や弁当を食べる時、手洗い・消毒を自分から気がついて行えるよう声をかけ、大事な事を伝え関わっていった。また、一つのテーブルに二人ずつ座ったり、対面にならないようにしたりし、テーブルや座る場所など配置を工夫した。

食事中は、大声で話さないよう声をかけ、様子を見守り、飛沫がとばないようにすることの大切さも伝えていった。食事が終わった幼児から順次マスクの着用をするようにし、習慣づけていった。飲食前の消毒も毎回おこない、感染防止対策に努めた。



↑ 牛乳を飲んだり、弁当を食べたりしているところ ↓



おやつや弁當時の環境の工夫（幼稚園等）

今年は、4月当初臨時休園となったが、預かり保育は平常どおり実施した。飛沫感染や密を避けるため、園児のおやつや弁当を食べる際の環境を工夫した。

園児がなるべく違和感なく、安心して食べることができるよう園児の好きな絵などをラミネートした、手作りのパーテーションを作成した。また、園児にも分かりやすいように手洗いの仕方を手遊びで伝えたり、食べる時の会話を無理なく控えられるようにBGMを流したりした。4月当初の取り組みが、6月に園再開になり、全園児が登園するようになってからも、スムーズな給食開始につなげていくことができた。



↑ 手作りパーテーション

間隔をとった「給食タイム」(幼稚園等)

今年の給食は、二人用の机に園児一人が座って食べられるよう、机の数を手配した。また、少しでも広い空間での給食タイムにしようと考え、遊戯室での給食を設定した。

低年齢のため、話さずに食べる約束をしていますが、自分で気がつかないうちに声を出して、話し始めてしまう子がいたため、CDなどの音楽を流し、心地よい音を耳にして、話さず食べる雰囲気作りに配慮した。感染防止対策によって、友達との距離をとり、楽しい給食タイムとはいかなかったかもしれないが、例年より、集中して食べる子が増え、落ち着いた雰囲気の中で、給食活動を進めることができる取組となった。



↑ 二人用の机に一人で座り、間隔を取ったの
“給食タイム”

お弁当の時間 (幼稚園等)

通常は、各クラスの保育室で、1つの机に4人掛けで楽しくお弁当が食べられるようにしていた。

空間を広くとり、幼児同士の距離もとるために、遊戯室で、1つの机に2人掛けで食べた。また、間に衝立を立てた。

準備が自分たちでできるように、机を置く場所にマークをつけ、衝立も幼児が扱いやすいものを牛乳パック、ラミネートをした画用紙、積み木を使って手作りした。

準備から片付けまで、自分たちでできるようになり、身辺自立にもつながった。



↑ 楽しくお弁当を食べて
いる様子
←2人掛けの机

絵本の読み聞かせが、「映画みたい」「大きく見える」(幼稚園等)

幼稚園では遊びを通して人との関わりを大切にし、保育を行っている。幼児同士や幼児と教員が接触をしないで保育を進めることは難しい。3密を避け、できるだけ今まで通りの保育をしたいと考えた。

教員の周りに集まったりしていた絵本の読み聞かせや保育の導入を、プロジェクターを使って、スクリーンに映し、3密を避けながらするようにした。幼児は大きく映った絵本を「映画みたい」「大きく見える」と大喜びだった。広い遊戯室では教員の声も届きにくいのでマイクを使い聞こえるような工夫をした。

また、幼児が作った作品を披露する機会では大きく映すことで、幼児が見たいという気持ちを満足させながら作品を共有し、話し合ったりともに学び合ったりすることができた。



↑ 園児への読み聞かせ

四角い枠の中での絵本の読み聞かせ (幼稚園等)

毎日、絵本の読み聞かせをしている。通常は、教員の足元に幼児を集めるが、幼児同士の間隔をとらないといけない。

入園当初の4歳児は、友達と離れて座るということが難しいため、床に養生テープで間隔をあけて、四角い枠を貼った。

読み聞かせをする時は、その枠の中に座るようにして、絵本の読み聞かせを行った。

4歳児でも、教員の指示がわかり、自分で枠を選んで座ることができ、絵本も落ち着いて聞いていた。



↑ 枠の中で読み聞かせを聞いている様子

床に四角の枠を貼る→



椅子の間隔を十分に確保するクラス環境（幼稚園等）

例年は、椅子を両隣りに並べて朝の会をしたり、担任の話を聞いたりして園生活を送っていた。しかし、今年は5歳児クラスの椅子を縦横の間隔を十分に確保して置いた。その事により、周りの子との接触もなく、落ち着いた雰囲気の中で、話を聞いたり、歌をうたったりした。



↑ 間隔が十分に確保されて椅子が配置されている5歳児クラスの様子

入園、進級時に見られた些細なトラブルなども少なくクラス活動をスムーズに行うことができた。また、5歳児クラスでは、小学校のように皆が同じ方向を向いて発表することで緊張した雰囲気ができ、感染予防のためのソーシャルディスタンスが子ども達にとっても良い環境構成になっている。

安心して遊べる場所の確保（幼稚園等）

3歳未満児はマスクの着用を行っていないが、マスクをしていない小さな子ども達でも安心して遊べるような場所の確保を行った。

自分の場所をつくってやることで密を避けるだけではなく、落ち着いて活動に取り組む姿が見られた。子どもの様子を確認しながら、机上での活動の機会ももっていった。フープなどで間隔をとりその中で遊ぶ活動も取り入れていった。2歳児でも集中してドミノに取り組む姿が見られた。

密にならない保育、場所の工夫を考える機会となった。



← 1歳児が絵を描いている所

2歳児がドミノ→
をしている所



登降園時の歩き方の改訂と感染症予防の意識の向上（幼稚園等）

登降園は、地区ごとのグループに分かれて保護者が当番制で送迎を行っており、例年は園児が2人ずつ手をつないで歩いている。年度当初、個人送迎にすべきか悩んだが、どのグループも3～5人と少人数であり、密にならないよう配慮して集団登降園を実施することにした。

歩く時の約束は「友達と間隔を空けて1列並び・1列歩行」である。列が長くなるので心配な面もあったが、当番の方が交通旗をうまく使いながら列を整えてくださり、園児は道の端を上手に歩いてきている。

感染症対策で歩き方を変えたが、そのことが一人一人の交通安全と感染症予防の意識にもつながったと感じている。

5歳児が4歳児（ピンクの服）を間に挟んで
↓ 並び方・歩き方のお手本に…



4歳児のみのグループですが、↑
上手に間隔を空けて歩いています

待つための「足形」(幼稚園等)



↑<手洗い場>
足形の所で待つ



↑<トイレ>
マットの外の輪に上靴を置く。トイレのスリッパにも
触れずに履き替えられる



↑<外の手洗い場>
足形を張り、間を開けて待つ

6月に園を再開するにあたり、環境を工夫した。手洗い場で待つ幼児が密にならないよう、待つ場所を足形で示した。また、トイレの入り口も、スリッパの履き替え時に密になりやすいため、マットを敷き、その周りに履き替える場を作った。幼児にも分かりやすく、守って生活する姿が見られた。

「ぴっかぴかデー」と「ぴっかぴかカルタ」(幼稚園等)

新しい生活様式に慣れ始めた12月。「緊張感」を「継続することの難しさ」を感じた。もう一度、感染症の恐ろしさや子どもたちにできる対策を、できるだけわかりやすく伝える方法はないかと職員で考えた。

そこで、毎週月曜日を『ぴっかぴかデー』と名付け、消毒やマスクなどでいろいろな菌から体を守れるよう、手作りカルタを作成した。

カルタの絵を見て、子どもたちは読み札を口ずさみ、楽しみながら手洗い・うがいをしたり、マスクを正しくつけたり、ソーシャルディスタンスに気付いたり…。送迎時にカルタを保護者に見てもらうことで家庭での取組にも繋がった。



↑ 職員手作りの『ぴっかぴかカルタ』

トイレ・図書室における感染防止対策（小・中学校）

(1) 足形の配置

トイレや手洗い場の密状態を防ぐため、足形を貼り、男子用トイレには仕切り板を設置した。



↑ 男子トイレの仕切り板



↑ 手洗い場の足形シール
トイレにも同様に貼った

(2) 図書室の工夫

椅子を取り払い、本を借りるだけにした。貸出カウンターには透明シートで仕切りを作った。返却本は専用の棚に返すようにし、消毒をしてから、貸し出し用棚に戻すようにした。



↑ 貸出カウンターの仕切り
透明シートで自作した



↑ 返却専用の棚
返却された本は、職員が消毒して書架に返す。

校舎内の感染防止対策に向けた工夫（小・中学校）

児童数 146 名の小規模校ではあるが、朝の登校時には児童玄関が集中する。6月再開に向けて職員会議にて話し合いを繰り返し、エントランスにコーンとバーでレーンをつくり、間隔をあけて待機するようにすることとした。



←児童玄関にレーンをつくり、靴を履き替える場面での密を避けているところ

一定の間隔で校舎に入った

後は、各階、階段が廊下に変わるスペースで健康観察を行っている。低学年も健康カードをスムーズに提出できるようになった。

各階、階段から→
廊下に変わる
スペースで
健康観察を行う



検温を忘れた児童は、ここで非接触型体温計を用いて検温する。37℃以上を示した児童は第2保健室で対応することとしている。

コミュニケーションツールとしてのホワイトボードの活用 (小・中)

コミュニケーションツールとしてのホワイトボードの活用

- ・一人学びの後、横並びのペアで自分の考えを見せ合い意見を交流している。授業の後は、教室の黒板に貼り付け、いろいろな友だちの考えを知る手段となっている。
- ・ホワイトボードを使用することで、会話をすることを防ぎ感染防止に努めるとともに、自分の考えを表現する力や他の友だちの意見や考え方をより広く知る機会となっている。



↑ ホワイトボードの活用

生徒の「感染防止意識」の持続と高揚への取組 (小・中学校)

学校生活の中で、さまざまな場面の感染防止対策を講じ、授業を実施している。その中でも最も有効な手立てを「感染防止意識の持続」と捉え、意識の持続と高揚に取り組んだ。

そのひとつは、視覚にうったえる大型掲示板の設置である。登校して、必ず目にする生徒玄関、各学年教室に向かう階段、廊下等に大型パネルで掲示した。特に、教室前廊下には、廊下天井から立体的につるし、一際目立つようにした。生徒の日記には「廊下を通るたびに目に入り、気をつけようと思いました。ちょっとジャマだけど。」とある。今後も感染防止意識が持続できるよう、教職員、生徒ともに取り組んでいきたい。

↓ 生徒の様子



間隔を十分にとった状態の環境づくりと衛生面の取組 (小・中学校)

本校は、全学年単学級で、1クラスの児童数も多い学級で30人、他は13人から22人と比較的少ない。1クラスの児童数が比較的少ないため、児童機の間隔もとりやすく、対策は比較的とりやすかった。席の配置については、前後の間隔を十分にとり、横列をずらすなど、できるだけ間隔がとれるように工夫した。30人在籍の学級では、主要科目を中心に児童を2つの集団に分け、新学習システム教員と担任で、空き教室を活用して、少人数学習に取り組み、間隔が十分にとれた状態での授業を進めた。

衛生面の取組では、手洗い場などに、間隔をとる目安となるテープを床にはったり、児童が考えた「感染症予防キャラクター」を消毒器や水道に設置して手洗いや消毒、マスク着用を意識しやすいようにしたりするなど、視覚的な工夫で感染予防を進めた。



↑ 感染症予防キャラクター

目で確認できるソーシャルディスタンス (小・中学校)

生徒が、「密」を避け、「ソーシャルディスタンス」を意識し実践できるよう、掲示物を工夫した。

階段・廊下では、「縦一列・左側通行」の表示、手洗い場など、「密」になりがちな場所では、「あしあとマーク」を設置した。「ソーシャルディスタンス」の距離が分かるよう、「両手間隔



↑ あしあとマークの設置

(前後、左右)」といった具体的な基準を示すことや、廊下に設置してある手すりに2メートル間隔で印を付けることで、常に「ソーシャルディスタンス」を目で確認できるようにした。掲示物や印を示すことで、生徒自身が自分で確認でき、言葉で注意する必要が少なくなった。

PC室と図書室の感染予防対策（小・中学校）

学校内においては、「密」を避けることが難しい場合も多く、一斉授業再開後では授業内での工夫が求められた。

PC室は一人一台であるものの対面での配置になっていたため、教員手作りの間仕切りを作成した。



↑ PC室
一人ずつの仕切り



↑ 図書室
貸出カウンタ

また、図書室の貸し出しにおいても密を避けるため、距離をとるための足元の印に加え、アクリル板の設置をおこない、当番と借りる生徒の飛沫感染の防止に努めた。

児童や保護者の不安を和らげる取組（小・中学校）

明石市立明石小学校の6学年は2学級で、一学級の児童数が40人を超えており、学校再開後に教室が密になるのではないかと児童や保護者の不安が予想された。そこで、コミセン活動の自粛や屋外体育の実施により使用されていない体育館、教室よりも広い多目的教室を活用することで、児童や保護者の不安を和らげようと考えた。

両教室では、荷物の置き場所や管理、着替え場所の確保といった不便はあったものの、対面を避け十分に間隔をとるなどの感染予防対策を講じることで、これまでとほぼ変わりなく話し合い活動や音読発表などを行うことができた。



↑ ホワイトボードや演台を使用した体育館教室



↑ 机の間隔を十分にとることができた多目的室

今後児童のストレス軽減や不安解消のため、現状でできうる最善の対応に努めたい。

今後児童のストレス軽減や不安解消のため、現状でできうる最善の対応に努めたい。

教室ゴミ箱のフタの設置 (小・中学校)

使用済みのマスクやティッシュはビニール袋に入れゴミ箱に入れるように指導している。しかし、ゴミ箱からウイルスの飛散も考えられることからフタを作製し設置した。フタはホームセンターでパネコートを購入し切断。角材で取っ手をつけた。

寸法は□295mm

厚さ12mm。教室に設置するものなので角はR加工，カンナと紙やすりによる面取り処理を行った。コロナ後に分解しやすいように接着剤は使わず釘2本で固定している。



↑蓋を作製し、設置した教室ゴミ箱

ソーシャルディスタンスの可視化で、距離感覚をつかむ (幼稚園等)

ソーシャルディスタンスを保つために、幼児一人一人の場所をテープで示し、視覚化した。

このテープで場所を明確化することで、友だちとの距離感覚をつかむことができた。

教室内での支援だったが、園庭で遊ぶときにも、「ソーシャルディスタンス」と声を掛け合う場面も見られるようになった。



↑ソーシャルディスタンスを意識するためのテープ

密を避ける取組と新しい生活様式の習慣化（小・中学校）

臨時休業が終わり、学校園が再開した当初は、分散登校を実施し、児童生徒が密な状態にならないように注意して教育活動を行った。

分散登校の中で、コロナ禍における学校での新しい生活様式になれることで、分散登校解除後に全校児童生徒が揃っても、混乱することなく落ち着いて学校生活を送ることができた。

また、学習においても少人数での学習を積極的に行うことで、お互いの距離を保ちながら、安全に注意して学習活動を行うことができた。



↑分散登校時の様子

「ソーシャルディスタンスライン」と「メッセージボード」（小・中）

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、臨時休業中に子どもたちが学校生活で使用する手洗いやトイレなど密になりやすい場所には赤いラインテープや足形を設置して、一定の距離を保てるようにした。

学校再開後、子どもたちは、使い方や待ち方を学習して混雑することなくスムーズに利用できた。また、分散登校により、出会うことのできない友だちとのコミュニケーションをとるための「メッセージボード」も作成して心のつながりも作れるようにした。子ども達は、友達からのメッセージをうれしそうに読んでいた。



↑ソーシャルディスタンスのライン
←メッセージボード

家庭科の調理実習時における学習環境・方法の工夫（小・中学校）

新型コロナウイルスの「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」として、家庭科の調理実習が挙げられている。しかし、調理実習は豊かな食生活を学ぶうえで重要な体験活動である。そこで、マスクを外す活動を避けつつ調理の基礎的な知識・技能を身に付けるために次のような工夫を行った。

- ・時間と水温によるゆで卵の出来上がり方の違いを観察
- ・米の炊き上がり方を「透明なべ」で観察
- ・野菜の切り方、皮のむき方を体験



↑ アクリル板を設置した家庭科室

人権学習会（小・中学校）

7月27日(月)、高砂市人権擁護委員の方々をお招きして、3年生が人権学習会を行った。

講師陣は、フェイスシールドを着用し、子ども達は、マスクにソーシャルディスタンスで感染症予防対策を講じた。

3年生の子ども達に基本的人権のことが分かりやすいよう、手話や歌、紙芝居などを織り交ぜて「だれもが幸せに生きる」ということについて学んだ。

生き生きと学ぶ子ども達の姿から、あらためて人権の大切さとともに、人権は知識・理解だけでなく、感じ取ることの大切さを体感できる取組となった。



↑ 3年生 人権学習会の様子

学級参観の実施（小・中学校）

- 校区を3地区に分け順番に15分ずつ学習参観を実施した。
- 受付では、マスク着用・体温測定・消毒を呼びかけた。
- 授業参観は時間制限を設け、チャイムを鳴らし、保護者に移動を促した。
- 参観者コースを設定し、校舎内を一方通行とした。
- 体育館を待機場所とするなど三密を回避できるよう工夫を凝らした。

学級参観の日程			
学年	地区	参観時間	授業科目
1年生	1地区	29分	算数
		49分	国語
		69分	理科
	2地区	19分	英語
		39分	音楽
		59分	体育
2年生	3地区	9:35~10:20	国語
		9:55~10:40	算数
		10:15~10:30	理科
	4地区	9:35~10:20	国語
		9:55~10:40	算数
		10:15~10:30	理科

↑ 予定表

「市立学校の新しい生活様式」の策定と取組（小・中学校）

感染リスクの低減に向けた学校運営のガイドライン「市立学校の新しい生活様式」を策定し、感染源・感染経路を絶つ取組を行ってきた。

主な取組としては、ソーシャルディスタンス（SD）を意識した授業、手洗いの徹底、養護教諭による感染対策授業のほか、教員による消毒作業を実施した。また、教員の感染症対策に係る業務の負担軽減を図るため、国・県の補助金を活用し、学校消毒作業員をすべての学校に配置するなど、持続可能な学校運営の推進に努めた。



↑ SDを意識した授業



↑ 養護教諭による授業



↑ 教員による消毒作業



↑ 手洗い点検の様子

新しい学校生活様式の確立（小・中学校）

コロナ禍において、校内での感染及び感染拡大を防止しつつ新しい学校生活様式を確立するため、次のような取組を行っている。



↑ 距離を取り対面を避けた給食風景

- ・登校時健康カードを提出し、健康チェックを実施。
- ・常時マスク着用と励行すると共に、教室に手指消毒薬や空気清浄機を常設。
- ・常時換気を行い冷房、暖房を使用して室温を調整。
- ・密を避けるためクラスの分割や広い教室を使つての授業。
- ・対面を避けた机配置と無言での給食の実施。

生徒に感染予防の意識を持たせ、学校生活全般を通じて密を避ける生活様式を意識させた。特に感染リスクが高まる給食時は「向き合わない・話さない・距離を取る」のルールを徹底し予防策を講じている。

「てまきずし」（小・中学校）

感染症対策の児童向けの合い言葉として、右下のような「てまきずし」という言葉を作成し、ポスター掲示したり、保護者へも取組の協力依頼として啓発資料として活用したりし、基本的な感染症対策の徹底を図った。

言葉の意味は、「て（手洗い）、ま（マスク着用）、き（距離、ソーシャルディスタンスの確保）、ず（ずっと続ける、継続して行う）、し（しあわせまろう）」となっている。

児童にも、わかりやすく取り組みやすいものとなった。また、漠然と多くの感染症対策を指導するのではなく、重要事項に絞った取組となり、指導が徹底しやすくなった。



↑ 合い言葉のポスター

感染防止対策指導の徹底（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校ではマスク指導、手洗い指導、授業等での学校での過ごし方の指導等を徹底して行った。

職員は児童生徒の下校後に、手すりやドア等の消毒を行っている。

学校のいたるところに、手洗い、距離をあける等の掲示物を貼り、児童生徒の意識向上に努めた。また、玄関、手洗い場、トイレ等には間隔をあけるためのラインを廊下にひく等の工夫をした。



↑手洗い場の間隔の目安



↑廊下の掲示

登校日や個別面談の工夫（小・中学校）

登校日や個別面談の工夫

- 密を避けるために学年別登校日を設定した。
- 担任がクラス全員と個別面談を行った。ソーシャルディスタンスに留意し、対面で面談を実施した。
- 家庭生活の様子や困り感を聞き取り、必要であればSC等につないだ。



←面談をしている様子



児童がマナーを守る行動をとることができる工夫（小・中学校）

感染防止のために、手洗い・うがいは重要である。

しかし、手洗い場では、どうしても児童が密になる傾向がある。

そこで、児童がきちんと列をつくり、マナーを守って行動できるように、手づくりの横入り防止柵や停止マークを設置した。

また、正面の壁には、手洗いの歌詞等の啓発ポスターを掲示し、児童に気付きを促し、マナーよく行動できるよう工夫した。

その結果、教職員の指示がなくても、児童自ら自律的な行動がとれるようになった。

手洗い・うがいの約束ごと

啓発ポスター



停止マーク

横入り防止柵

学校再開初日に感染防止の取組を説明（小・中学校）

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で緊急事態宣言が発令され、学校も臨時休業となり、学校が再開されたのは、6月1日（月）からであった。

学校再開初日、児童に対して感染防止の取組について説明を行った。三密を防ぐために、教育活動において互いに適切な距離を確保すること、換気を行うこと、マスクを着用し、手洗い・うがいをしっかり行うこと等についてグラフや図、写真、絵を用いて具体的に分かりやすく話をした。

これまでに経験したことのない状況下での学校再開となったが、子ども達は、久しぶりに友だちと再会できた喜びを感じながらも、感染症対策をしっかり理解し、実践して学びをスタートさせた。



↑ 学校再開初日に感染防止の取組を説明

学校独自の感染症対策ガイドラインの作成及び実施（小・中学校）

- ・ 中学校感染症対策ガイドラインの作成（職員で共通理解）
 - ・ 登校時の健康観察の実施（検温と体調を記入した健康観察カードを回収）
 - ・ マスクの着用と管理方法の徹底（クリアファイルでマスクケースを作成）
 - ・ 手洗いやソーシャルディスタンスの必要性について指導
 - ・ 取組をホームページに掲載し、保護者にも協力を依頼
- *上記のことを習慣となるまで繰り返し指導した。



↑ 登校時の消毒



↑ 健康観察



↑ ソーシャルディスタンスで健康診断



↑ 給食時はマスクケースに入れる

「かせき（化石）おいてけ」（小・中学校）

学校再開に向けて、**か**んき、**せ**きエチケット、**き**そく正しい生活、**お**もいやり、**い**じめはゆるさない、**て**あらいうがいマスク、**け**んこうかんさつの7項目について重点的に取り組むこととした。それぞれの頭文字をならべて、

「かせき（化石）おいてけ」を合い言葉に、学校全体で、できる限りの努力を続けている。

本校は全校児童28名という小規模校だが、少人数だからこそ、児童一人一人が、ソーシャルディスタンスや3密にならないことを意識して生活している。

また、教員は、毎朝、玄関で手指の消毒を促しながら、それぞれの表情を観察し、あいさつや声かけを大切にしてきた。この取組は、新型コロナウイルス感染症への対応だけでなく、児童の安心安全につながっていると考えている。



↑学校再開時、「かせきおいてけ」を全校生に呼びかけている様子

保健室の取組 (小・中学校)

学校再開時に視聴させる感染予防の指導動画を中学校区の養護教諭で作成し、保健室前の掲示や保健だよりは楽しく見ながら正しい知識を得られるように工夫した。

委員会活動では、助言しながら自分たちにできる対策を考えさせた。常時換気ができるようドアや窓に隙間を作る「換気棒」を作成して全教室に付いたり、業間休みと昼休みの終わりにプラカードを持って校舎内を回って全校児童に手洗いと手指消毒を呼びかけたりした。

また、新型コロナウイルス感染症を正しく理解し、関連する差別や偏見について考えることで、適切な行動が取れるよう、発達段階に応じた授業を行った。



児童が主体的に感染対策の必要性を訴え、その活動を広げる (小・中)

児童自らが主体的に感染対策の必要性を訴え、その活動を広げていった。児童会の保健委員会を中心に、新型コロナウイルス感染防止対策として児童が毎日頑張っている正しい手洗いの効果を、食パンを使った実験で確かめ、さらに真剣に手洗いに取り組んでもらおうとした。

その結果は正しい手洗いの必要性を実感するものであり、全校生や保護者へ伝えていった。

また、続編として手洗いチェッカーを使った実験も実施し、場面に応じた正しい手洗いなど、今一度見直す機会となった。



感染予防対策を講じた学校生活（小・中学校）

給食では、食べる際にマスクを外し、前を向いて黙って食べる等の厳しい制約を定めた。

これまで使用していた更衣室は密になるため閉鎖し、空き教室などを活用し、低中高男女ごとの更衣室を設けた。それでも更衣の回数を減らすため、体操服登校を取り入れた。

体育や休み時間におけるボール、一輪車などの使用を段階的に許可。使用前後の手洗いを徹底した。

音楽室や図工室、図書室、理科室では、座席の間隔をあけ、隣席はあけ、対面を避けた。さらに、授業の前後に手洗いをするように定めた。

朝会は、テレビ放送で行い、児童は教室の自分の座席で話を聞いた。表彰状は放送で披露した後、校長が教室で手渡した。



←図書室の貸し出しコーナーに手作りの飛沫防止のシート設置



←児童が並ぶ場所にはソーシャルディスタンス表示

「1m」の長さがわかる（小・中学校）

学校内でのソーシャルディスタンスがイメージしにくい（特に、低学年）、廊下や階段、床等に「1m」の長さがわかる表示をすることにより、子どもたちのソーシャルディスタンスの意識を高めるようにした。

また、水道も間隔をあけて使用できるように、床に足形のマークを設置。使える水道も限定した。



↑床や壁に1mの表示



↑足形や水道使用制限

あわあわ手洗いの歌（幼稚園等）

感染予防の基本である、手洗いうがい、マスクの着用について、園生活の中で、繰り返し声掛けしながら、丁寧な関わりを心掛けている。「あわあわ手洗いの歌」に合わせて手を洗うとよい事を伝えると、毎日の生活の中で習慣となり、歌を口ずさみながら、丁寧な手洗いができるようになった。

また、給食やおやつの中には、手作りのアクリルボードを置いて、感染予防に努めている。話をせずに食べることに慣れてきている。

今までとは違う生活様式にも少しずつ慣れ、感染予防への意識が高まってきている。

飛沫が飛ばないように、アクリルボードを立て、静かに給食を食べている →



←「あわあわ手洗いの歌」を歌いながら、手を洗っている

こまめな手指消毒（幼稚園等）

生活様式が変わり、手洗いやうがい薬を使った手洗いや、こまめな手指消毒の指導を行い、また、机やアクリル板など生活で接触する物全てのアルコール消毒を徹底した。

給食時には、テーブルを使う前後に消毒し、向き合って食べない、普段使うマスクと給食用のマスクを替える、食べ終わるとすぐにマスクをするなどの指導を徹底した。

また、話したり歌ったりする活動のときは、一定距離を保った上で、教員も子ども達もマウスシールドをつけて行い、安心してのびのびと活動することができた。



手洗い歌に合わせて手を洗い、うがい薬でうがいをする



←マウスシールドをつけての音楽会

楽しみながら手洗いをを行う工夫（幼稚園等）

子ども達が、楽しみながら手洗いを身につけられるように手洗い歌で手洗いをしたり、手洗いの手順のイラストの掲示をしたりした。歌に合わせて手洗いをを行うことで、しっかり手を洗えると共に、手を洗うことが楽しみになっている様子が見られた。

また、社会的距離の確保として、足跡を描いたところ、視覚的効果もあり、子ども達は自然に間をあけて並んで水道を使用する姿が見られた。



←歌に合わせて手洗いをしているところ



社会的距離の確保のために描いた足跡→

安心して遊べる場所の確保（幼稚園等）

3歳未満児はマスクの着用を行っていないが、マスクをしていない小さな子ども達でも安心して遊べるような場所の確保を行った。

自分の場所をつくってやることで密を避けるだけではなく、落ち着いて活動に取り組む姿が見られた。子どもの様子を確認しながら、机上での活動の機会ももっていった。フープなどで間隔をとりその中で遊ぶ活動も取り入れていった。2歳児でも集中してドミノに取り組む姿が見られた。

密にならない保育、場所の工夫を考える機会となった。



←1歳児が絵を描いている所

2歳児がドミノ→
をしている所



ソーシャルディスタンスで丁寧に手洗い（幼稚園等）

コロナ禍での幼稚園再開。
子ども達に、手洗いを徹底させるための準備をした。
これまで以上に手洗いを
するため、幼稚園全体で手洗
をするタイミングを教員が共
通理解した。

また、だれもがソーシャル
ディスタンスを意識できるよ
う、足元には、足型マークを
つけることにした。さらに、
より細やかな指導ができるよう、子ども達の観察を徹底し、
丁寧な声かけをすることにした。



↑ソーシャルディスタンスで手洗い

楽しみながら丁寧に手洗い（幼稚園等）



↑♪元気になわとび123～♪



↑手洗いの仕方に園歌を書き込んだポスター

6月の幼稚園再開にあたり、手洗いについては、園歌に合
わせて洗えるよう、ポスターに園歌を書き込み教えた。実際
に保育者や子どもが歌わなくてもできるように、歌を録音
し、園歌を流しながら練習したり手を洗ったりした。園歌に
合わせることで、楽しみながら丁寧に洗う習慣がついた。

手洗い場やトイレ、保健室の混雑を避ける取組（小・中学校）

手洗い場やトイレの混雑を避けるため、足型やビニールテープで待機場所の表示を貼った。

児童生徒の手洗いの回数が増えたため、液体石けんの補充をこまめに行った。また、他学年に感染が広がらないようにクラスごとに使用するトイレを指定した。

保健室内では、体調不良者とけがやその他の来室者とが出会わないよう、入り口を分けて衝立やビニールカーテンを用いて部屋を仕切った。発熱者が休養するベッドにはビニールクロス等をマットレスの上から貼ることにより、使用後は消毒できる形にした。

↓ 体調不良者とけが等の来室者の入り口を分ける



こまめな手洗いとしての「7つのタイミング」(小・中学校)

感染症対策として、児童は登下校を含みマスクを着用している。家庭で検温を行い登校するが、それに加えて、登校時に担任が検温簿を確認し、児童の体調を丁寧に把握している。

また、こまめな手洗いとして、7つのタイミング（1朝、教室で荷物を片づけた後 2業間休みの後 3給食前後 4昼休み後 5掃除後 6帰りの用意後 7トイレの前後）での手洗いを行っている。自動水栓が取り付けられ、児童もスムーズに手洗いを行うことができている。その他、並ぶ時にも一定の間隔が取れるように廊下に目印をつける等、児童が感染症対策を徹底できるように工夫しながら取り組んでいる。



↑ 自動水栓の手洗いで手を洗う児童

健康委員会児童がモデルとなり手洗いの啓発活動に取り組む（小・中）

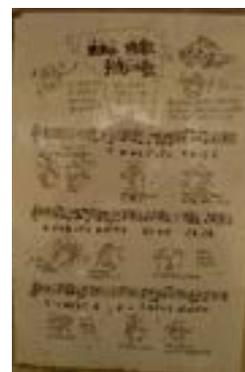
子ども達が感染予防に取り組みやすいように工夫した。

「新しい学校の生活様式」に関する掲示物では、健康委員会児童自らがモデルとなった。

手洗いでは、校歌の替え歌で手洗いの歌を作成し、手洗い場に掲示して給食時間に放送で流す、ホームページに掲載するなどした。

また、「手洗いキャンペーン」と題して、手洗いチェッカーを使用し、自分たちの手洗いが上手にできているかを知る機会も設けた。単に伝えるのではなく、身近な人や物を取り入れた題材により、子ども達は感染予防を理解しやすくなり、それらが自然と生活に定着していった。

↓児童の写真が入った掲示物



イラスト入りの
「太田小校歌 手洗いの歌」→

手洗い場の感染予防対策（小・中学校）

本年度は、手洗いなど手指衛生を行う時に、水道の蛇口を使用する人数を制限し、飛沫感染や人との接触を減らす取組を行っている。

さらに、水道の蛇口に使用禁止の札と足跡マークを床にはり、ソーシャルディスタンスの目安としている。

また、玄関や教室の入り口などに消毒用のボトルを置き、1日に5回、手を洗い消毒する機会を全校的に設定している。



↑ 児童手洗い場の様子

健康観察の徹底（小・中学校）

児童の体調の変化、発熱に迅速に対応するための対策として健康観察を徹底した。

①登校前、家庭で行う検温を含む健康チェックを保護者が行い、結果を健康カードに記入する。

②登校後、学校で健康カードを素早く回収し、学級担任が個々の児童の体調把握をする。家庭での検温ができていない児童は保健室で検温をした後、学習をスタートする。

③学校で体調が悪化した児童は保健室で過ごし、学級児童との接触を最小限にする。

また、接触感染の仕組みを理解させ、こまめな手洗いを習慣化させるよう促した。



↑ ソーシャルディスタンスを取りながらの手洗い

「密」を避けた分散給食の実施(小・中学校)

コロナ禍の学校において、一番感染が心配な時間の1つが給食の時間である。配膳や摂食中の感染リスクを低くするため、教室前のフリースペース等を活用して配膳を行っている。昨年までの教室内での配膳と比べ、ゆったりと準備や片付けを行うことができている。



↑ 配膳も密を避けて



↑ 1年生分散給食

また、特に今年度の1年生は単学級で38人在籍しており、特別支援学級の生徒を合わせると41人の生徒が教室で給食を摂ることになる。少しでも密を避けるため、少人数学習の教室を使用し、2ヶ所に分かれて半数ずつで給食を食べている。

給食時のきまり(小・中学校)

本校は、40人あまりの少人数の学校なので、給食についてはランチルームにおいて全校生で食べていた。

しかし、今年は感染予防対策を講じる意味で、この形式をやめ、学級ごとに教室で食べる形にした。教室の中では、全員前を向き、声を出さずに静かに食べている。

給食の準備は距離がとれる教室前廊下で行い、生徒同士が近づくことなく、空間的に余裕をもって行っている。密を避けて、安全安心に給食が実施できるよう工夫をして、準備や実食そして片付けまでを行った。



↑ 給食を準備しているところ

学校全体の状況把握のシステムづくりと衛生面の取組(小・中学校)

学校全体の状況を把握するためのシステムづくりを行った。

児童については、児童の健康観察カード→担任が確認後学級の一覧表へ→養護教諭→校長という流れ。



↑ 健康観察カード

↑ 給食準備の様子

職員については、職員の健康観察カード→校長の机の上へ提出という流れで、それぞれ校長が把握できるようになっている。職員についても、児童と同じく早い時期(4月6日)から健康観察カードを作成し、検温と記録を開始できた。

給食では、全員が前を向いたまま黙って静かに食べている。職員室でも席の配慮をし、隣や向かい合っただけの食事はしないようにした。給食台の台ふきには、キムタオル(丈夫なペーパータオル)を導入した。導入までは布の布巾を毎日洗濯していたが、より清潔なもので拭くことができ、洗濯の手間もなくなったので大変良かった。

セルフサービス方式の給食(小・中学校)



↑ 配膳は廊下でします



↑ 水道は間隔を空けます

6月1日から学校が再開となった。やっと始まった!という喜びとともに、学校生活は今までと少し違った風景が見られるようになった。

まず、常にマスクを着けて過ごすことや、手洗いを念入りにすること。それに加えて、手洗い場の床には間隔をあけて待つ印のテープが増えた。

一番大きく変わったのは給食であった。廊下に配膳機を出し、給食当番がおかずを入れ、静かにご飯を受け取るセルフサービス方式になった。以前なら机を班の形につけて、話し声が飛び交うにぎやかな給食の時間も、今では前を向いて沈黙のなか静かに食べている。

牛乳レストラン(小・中学校)

これまで牛乳は一斉に飲んでいましたが、職員室に6名まで入れる「牛乳レストラン」を設置し、自分のタイミングで、飲みきる生活様式を取り入れた。

新しい生活様式が分かってくると、自分の遊びの区切りで飲みに来たり、混雑している時には自分で時間をずらして入室したりするなど、個々で判断できるようになってきた。

この取組を通して、自分なりに生活を進める自主性が身に付くと同時に、「密を避ける」ことの大切さが自然に理解できたのではないかと思います。

席が空いたら友だちが知らせてくれることになっている→



牛乳レストランで牛乳を飲む園児たち



給食当番の動きを見直す(小・中学校)

生徒数が800名を超える大規模の中学校では、給食当番の動きを大きく変えた。配膳室前に準備されたテープを目印に、各クラスの給食当番が一行に並び、手指消毒液で念入りに消毒してから食缶などを運ぶ。教室での配膳の際も、密にならないよう、教室の配膳台に加え、教室前の広い廊下にも長机を置き、給食当番が食器に盛り付ける。他の生徒は、各自の給食を席に運ぶ。

昨年度までとは大きく異なる動きだが、混乱もなく、生徒たちはスムーズに動く。配膳が終わると、以前のように班ごとに向かい合わせにはならず、前を向いて食べる。食事中の会話は禁止。生徒たちはその趣旨をよく理解しており、静かな給食にも慣れたもの。



↑配膳室前で距離をあけて並ぶ生徒



↑教室前のスペースも活用し、密にならないよう工夫

登校時の健康チェックとハーフサイズ学級での給食(小・中学校)

①登校時の健康チェック

登校した者から順に、手指消毒をして、生徒玄関で健康チェックを行います。朝の検温結果や健康状態を、一人一人健康観察カードを見ながら点検している。部活動の朝練習がある場合は、各部ごとに顧問が行い、各学年に伝達することになっている。



↑ 登校時の健康チェックのようす

②ハーフサイズ学級での給食

1・3年生は1クラスの数が多いので、空き教室を利用し、ハーフサイズにして給食を食べている。全員が前向きで、無言で給食をするので、BGMを流しながら少しでもリラックスして給食ができるよう工夫している。教員もそれぞれの教室で給食指導にあたるようにしている。

新しい学校生活における職員間の共通理解と実施(小・中学校)

5月下旬、臨時職員会議を開催した。学年によって指導がばらつかないように、感染症対策を行った新しい学校生活について全教職員で共通理解を行った。

項目は①感染症対策について②各教科、特別教室の利用、学校行事③運動場や体育館の使い方④休み時間の過ごし方⑤給食や掃除、等である。

学校生活で行う感染症対策(1日の流れ)については、事前に学校改革推進委員会でわかりやすくまとめたものを活用し、職員会議で共通理解を図った。

6月の学校再開初日、特に大切な対応については朝会で、全校生に伝えた。

学校再開後しばらく、職員打ち合わせの時間を朝から放課後に変更。1日の振り返りを行い、気になる点については、話し合い、確認を行った。

↓ 共通理解を図る資料

6月からの学校生活についての共通理解(案) (編田中) 2020.5.28	
＜1日の学校生活全般＞ マスクをつける	
登校	登校前に検温 マスクをつけて間隔を空けて登校 教室に入る前に手洗い 健康観察カードの確認と健康チェック
朝会	体育館で実施
授業中	長時間かつ近距離で対面形式となるグループワーク、近距離で一斉に大きな声で話す活動は控える 席の間隔を空ける
休み時間	トイレは混雑しないように状況を見て、混雑している時は担任が声をかけ調節 ある程度の距離を保つことや、お互いの体が接触するような遊びは行わないように指導 ※ 昼休みも含め、詳細は体育・生指・図書など各担当から提案 実習の手洗いの徹底
給食	給食は教員で 食事中は声かけしない、虫除も控える 給食パックの洗浄は必ず、ついでで備える(牛乳パック・ストロー・パンの袋・小袋など 各朝2年・5年前の回収期に入れる) 座席を空けない
掃除	換気を必ずしながら取り進む 終わった後は、必ず手洗いで手を洗う 使った用具は消毒(教室の方は担任で、その他の場所については担任外で) トイレ掃除は教員で
下校	マスクをつけて間隔を空けて下校

「学校の新しい生活様式」を踏まえた日常の教育活動(小・中学校)

6月に「学校の新しい生活様式」を踏まえた教育活動が再開した。毎朝、交代で職員が玄関で子ども達を迎え、朝の健康観察を行った。また、全校集会は、換気を十分にいき、ソーシャルディスタンスに気を付けて実施している。

給食は、一堂に会しての全校給食を止め、1・2年生は広々とした空間で、同じ方向を向いて無言で食事している。3年生以上は、それぞれの教室で給食を食べている。ランチルームに全児童の笑い声が戻ってくるのが待ち遠しい。



←距離を確保した全校朝会



↓給食の時間

感染予防のために新しい生活様式を作成(小・中学校)

感染予防のための新しい生活様式を作成した。

常に子ども達が意識して生活できるよう、低学年にも理解しやすいように考えた。常に意識できるように考えた。常に意識できるように考えた。常に意識できるように考えた。

各担任が一つ一つていねいに説明し、常に守れているか各クラスで確認している。

子ども達は、つい相手と近づいてしまったり、手洗いなどやるべきことが後回しになってしまったりする。学校でルールを決め、全員で共有することで、日々の生活の中での感染予防の意識が高まっている。

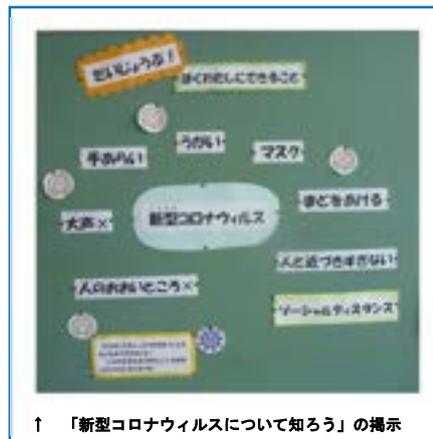
若小っ子の新しい生活のしかた



「いのちを守る10カ条」(小・中学校)

本校は、どのクラスも30人以上で、空き教室もない。コロナ禍において新しい学校生活を送る上での仕組みやきまり等をきちんと整備する必要があった。そこで、予防のためにできることを校内で共通理解し、「いのちを守る10カ条」として実践していくことにした。

児童には、それを実践すれば大丈夫であることを伝え、ことあるごとに指導していった。手洗い場が少なかったので5か所増設し、手洗いの徹底を図った。定期的に手指の消毒も行っている。給食の配膳は手袋をして行い、同じ方向を向いて黙って食べることにした。トイレ清掃は、当初教員が行っていたが、児童が行う場合は使い捨ての手袋をして作業している。毎日手すりやスイッチ、蛇口等の消毒作業、児童が帰ってからの教室の消毒も日課としている。



「新しい生活スタイルVer.1」の動画版の作成を児童が発案・作成(小・中)

6月からの学校再開に向けて「八鹿小学校の新しい生活スタイル」を作成し、児童への浸透を図った。

6年生が、「新しい生活スタイルVer.1」の動画版の作成を発案し、登下校、給食、手洗い休み時間の過ごし方等の内容について、総合的な学習の時間を活用して作成した。

動画は、全校生への理解と定着、意識化に大きく働き、大変効果的であった。集団での活動が制限される中で、6年生がリーダーシップを発揮し活動する姿に全校生も教職員も励まされた。特に小学校生活をスタートする1年生にとって、何よりの教材となっている。



←登校時の手指消毒と手洗いの場面↓

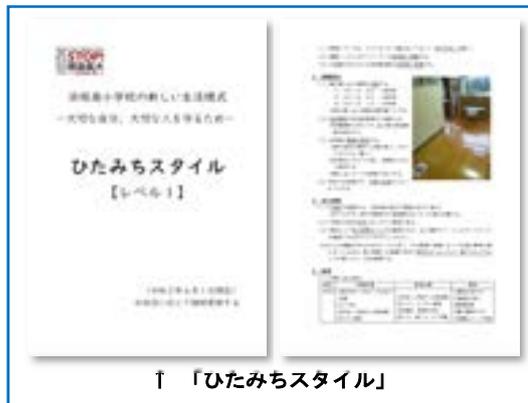


学校・家庭・地域が足並みを揃え、「ひたみちスタイル」を実施（小・中）

コロナ禍において、最小限のリスクで最大限の教育効果が得られるよう、国の方針を踏まえながら本校独自の新しい生活様式「ひたみちスタイル」を作成した。

活動場面に応じた対応策を具体的に明示し、教職員、全児童（家庭）、学校評議員や関係機関に配付した。また、学校ホームページに掲載するなど広く啓発を行った。

その結果、学校の取組を幅広くイメージしていただけるようになった。保護者からも安心して我が子を学校に預けられるという声が聞こえるようになった。学校・家庭・地域が足並みをそろえて、同じスタイルで生活することにより、感染症のリスクを下げることにつながり、成果をあげることができた。



↑ 「ひたみちスタイル」

「学校園生活マニュアル」の策定（小・中学校）

学校園再開にあたり、円滑に教育活動を進める上で必要な感染症対策について記した「学校園生活マニュアル」の策定を行った。

また、より感染リスクの高いと考えられる保健室での対応の留意点をまとめた「保健室での対応について」や定期健康診断を安全に行うためのマニュアル「健康診断実施にあたって」もあわせて策定した。

これらのマニュアルに従い、保健室ではビニールカーテン等で部屋をしきり、体調不良の児童生徒とそれ以外の児童生徒の接触を避けられるようにしたり、飛沫拡散防止のためのパーテーションを設置したりと、各学校園で感染予防に努めながら、安全に集団生活が送れるよう配慮している。

↓保健室を分けるビニールカーテン



↑机に設置したパーテーション

密になる状態を避ける（小・中学校）

コロナ禍での学校生活を送る上で、児童が密になる状態を避けることに取り組んだ。

1 登校時間の弾力化

コロナ禍の前は、児童の登校時間を8：00以降と設定していたが、その時間を弾力化し、児童が密集して登校することを防いだ。児童玄関では、コロナ禍の前に比べ、登校してきた児童が分散している状況があった。



↑密を避けて登校する児童

2 業間における運動場の隔日利用

隔日指定で、業間に運動場を利用する学年を制限した。密になる状況を防いだ上で、児童の運動機会を保障すること（児童の気分転換や体力低下予防のため）を図った。これらの取組により、学校生活の様々な場面において、密にならないように児童が主体的に行動する姿が見られ、分散することの意義を児童が理解していると窺うことができた。

口元の動きを見せるためのアクリル板活用とマウスシールド着用

特別支援学級（難聴）へのコロナ感染対策と実践効果を高められる対応を考えた。

コロナ対応から初めはマスクを着用しながら授業をしてきたが、発音が完全に習得できていない生徒にとっては、口元の動きが発音を習得する上での大切な判断材料になるため、マスクをしたままでは、学習効果を上げられないことが分かった。

そこで、コロナ感染予防と生徒の実態に応じた学習の効果の向上を考えたところ、アクリル板の活用やマウスシールドを着用しながらの授業が、難聴生徒にとって感染予防をしながらの最適な支援方法であると思い実践をしている。



←マウスシールドで口元を見せながらの授業

アクリル板を使用 →



特別支援学級における個に応じた感染予防対策

特別支援学級では、個に応じた感染予防対策を行った。例えば、人との距離の取り方がわかりにくく、近い距離でも大きな声を出して話しがちな児童や、指を口に入れる癖があり、その

まま身の回りの物に触れてしまうことがある児童のために、移動可能なパーテーションを製作した。授業中や給食等、飛沫感染が心配な場面で使用する。透明なアクリル板を通して互いの姿を見合うこともできるため、普段の生活と比べても大きな変化がないため、児童は安心感を持つことができ、受け入れやすい。また、持ち運び可能なため、他の教室でも同じものを使用することで、児童も安心する。



↑アクリル板を木片に挟んで製作したパーテーション

特別支援学級の子が、教員の行動を見て学べる工夫

特別支援学級の子ども達は特に、教員の身振り手振りや口の動き、表情で、コミュニケーションを取る必要がある。そこで、写真のようにアクリル板の仕切りを使い、授業を行っている。

マスクをして授業をするより、子ども達の反応がよく、教員の話が通りやすくなった。

写真は音読の練習をしている場面だが、教員の口元を見ながら、発音の仕方、抑揚のつけ方など、マスクをつけていてはできない練習ができるようになった。物語を読むのが上手になり、楽しく国語の学習をしている。



↑子どもとの間にアクリル板を置いて音読する様子

難聴学級の児童のためのマスク制作

今年度から入学してきた難聴学級の児童のために、口の見えるマスクを制作した。マスクを装着すると、教員の口元が見えず、話している内容を理解することが難しくなってしまう。そこで、口元が見えるマスクを装着し、話している内容を理解しやすくすることで、児童の不安が軽減され、安心して学習に取り組めるようになった。また、児童とのコミュニケーションの度にマスクを外す必要もなくなり、飛沫の飛散を抑えることで安心して会話をすることができるようになった。口形の練習をする際には、児童が教員の口元をしっかりと見ることができるようになるため、効率よく学習を進めることができるようになった。



マスクの口の部分を切り取り、透明のクリアファイルを表地と裏地の間に挟み込み、縫い込む。

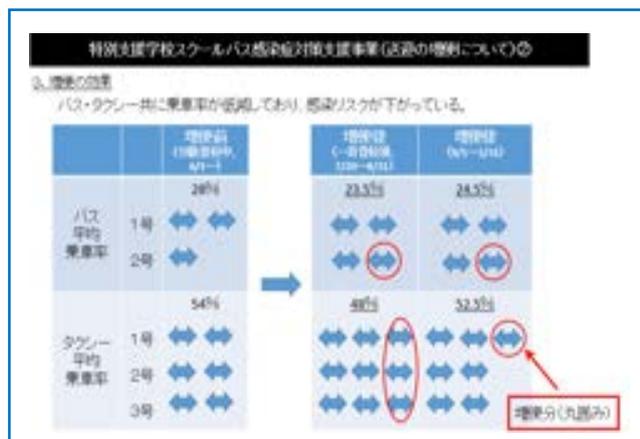
クリアファイルの上と下に切り込みを入れ重ね合わせることで立体的になる。



特別支援学校の登下校スクールバス・福祉タクシーにおける感染対策

伊丹特別支援学校の児童生徒の登下校送迎に使用しているスクールバスやリフト付福祉タクシーについて、学校再開後の感染対策として以下の取組を実施している。

児童生徒が触れる車内のあらゆる箇所をアルコール等で拭き取ることによってこまめに消毒している。換気については、発作を起こす児童生徒が多く十分に行うことが難しいこともあり、児童生徒の車内での密集を避けるため、国の補助金を活用し、往復回数の増加を行うことで、感染予防に努めている。



言葉によるリズムアンサンブルづくり(音楽)(小・中学校)

音楽の時間、4文字の言葉のリズムを組み合わせる言葉によるリズムアンサンブルを作る。

拍子やリズム、曲想との関わりに気づき、拍に乗って歌ったり演奏したりする技能や反復、変化などの音楽の仕組みを用いてリズムアンサンブルをつくる技能を身に付けることを目標としている。

言葉によるリズムアンサンブルであるため、楽器を扱う必要がなく、楽器の扱いが苦手な児童も取り組みやすい。またグループ学習で、友だちと協力して作り上げていく楽しさを味わえる。感染症対策として、マスクを着用しながら少人数での発表をリズムよくつなげる全体発表を行った。



↑「おまつり」で練習

←次は「食べ物」をテーマに発表

フェイスシールドを使った音楽(音楽)(小・中学校)

音楽科における合奏の学習では、リコーダーを演奏する児童にフェイスシールドを着用させて活動した。

本校は、学年の児童数が最大で20名であるため、全員でのリコーダー奏は難しいが、合奏ならばパート人数は限られるので可能と判断した。

可動式の個人専用フェイスシールドを着用して、間隔を空けて演奏し、毎回消毒を徹底することで、例年と同じように合奏を楽しむことができた。



↑ フェイスシールドを使った音楽

箏曲の授業(音楽)(小・中学校)

今年は、音楽科において箏曲の授業を行った。声を出さずに距離をとって練習が出来る点で感染予防対策を講じることになる内容である。

ゲストティーチャーを招き、座り方・爪のはめ方から調弦の仕方・楽譜の読み方・奏法まで丁寧に教えていただき、1時間ほどで「さくらさくら」を演奏できるようになった。また、「かえるの歌」については3グループによる輪奏を楽しんだ。

箏の準備や片付けも含めて、協力して行うことができ、充実した取組となった。



↑ 箏曲を練習しているところ

クラス合唱と全校合唱の実施(音楽)(小・中学校)

毎年文化発表会で発表している“クラス合唱”と“全校合唱”。“クラス合唱”は、部屋を分けてマスクを着用し、横との距離をあけてパート練習をした。発表は、担当学年の保護者のみが鑑賞する形にした。

“全校合唱”は、縦割り班で、3年生がリーダーとなり、1・2年生を指導していく伝統の行事。多くの行事が中止や変更を余儀なくされている3年生の活躍の場として、今年も実施することにした。例年より練習回数を大幅に削減し、また、人数を減らしてパート練習を行った。全校生で合わせて歌う時には、校舎のベランダを使って中庭に向かって歌った。例年とは違う形となったが、全校生で合わせて歌えたことで、感動を味わうことができた取組となった。



文化発表会練習の様子

鍵盤楽器の学習の工夫（音楽）（小・中学校）

コロナ禍での音楽の時間、合唱やリコーダーができず、音楽鑑賞や打楽器によるリズム学習を中心に行ってきた。

そのような中、鍵盤楽器の学習では、けんばんハーモニカの代替として電子キーボードを使用した。

音の鳴らない机に刻まれた鍵盤で学習するのとは違い、実際に音を聞きながら音の長さや、音階を確認でき、けんばんハーモニカ同様の学習効果を挙げる事ができた。



↑ 電子キーボードによる音楽の授業

楽しく表現活動を行う工夫（音楽）（小・中学校）

リコーダーを使用する際に歌口の部分を外し、筒先を耳に近づけて穴を指でふさいでみると、小さな音がかすかに聞こえる。ふさぐ穴を変えると音が変わること、とても驚いていた。

音を聞く活動を多く取り入れた。低学年では、トライアングルの音を鳴らし、音が聞こえている間は動きを止め、自分の好きなポーズをとることで、消えてしまいそうな小さい音もしっかりと聞くことができた。その後、トライアングルの音は、静かに耳を澄ます合図となった。

児童それぞれが、「ド」「レ」など音の役割を担い、曲の階名に合わせて自分の音の時に立ち上がる。曲に合わせて行くと、階名も覚えることができ、楽しく表現活動ができた。



↑ 耳にリコーダーを当てて聞く



↑ トライアングルの音でポーズ

マスクとフェイスシールドの併用（音楽）（小・中学校）

児童数は、多い学級で23名なので、比較的「密」を回避することは容易であるが、音楽の授業は全員で声を出したり、楽器を演奏したりする場面があるので、教室をいっぱい使って児童間の距離を十分にとり、飛沫による感染予防に努めて実施した。



↑ 音楽の授業の様子

音楽室に移動するときは、マスクをつけた上で、フェイスシールドを持って行く。基本的にはマスクとフェイスシールドを併用して学習するが、必要に応じてフェイスシールドを外す場面もある。楽器演奏の時は、フェイスシールドのみの着用となるが、距離を十分にとっているので、感染予防は行えていると考える。

教室外でのリコーダー練習（音楽）（小・中学校）

○ 音楽室外を活用した音楽授業

○ 風通しの良い屋根のある通路を利用

○ 短時間で実施

○ 指示は掲示物を活用

○ 椅子の間隔をあけ、ソーシャルディスタンスを確保



↑ 音楽の授業の様子

飛沫飛散対策ビニールシートを自作（音楽）（小・中学校）

音楽室の黒板前と生徒が座る場所の間に写真のような飛沫飛散対策のための仕切りの透明ビニールシートが設置してある。これは、音楽担当教員が学校にある幟旗を立てる台・ポールやホームセンターで購入したシートを使って自作したものである。

この透明の仕切りがあることで、教員はマスクを外して表情や口の動きを見せながら歌唱指導をすることができている。また、リコーダーの指導においても音を出しながら指の動きを見せることができる。教員だけでなく、生徒がこの仕切りの中に入って歌や器楽演奏の発表を他の生徒に見せることもできる。これまで通りと言うわけにはいかないが、この仕切りがあることで、今までと近い形での指導が行えている。



↑仕切りの中で、教員がリコーダーの演奏の指導を行っている

感染症対策を講じた音楽科の指導ガイドライン（音楽）（小・中学校）

小学校・中学校共に、新型コロナウイルス感染症対策を講じた音楽科の指導ガイドラインを3月末に作成し、各校での指導の参考にした。

授業前の手洗いと手指消毒に加え、教員による消毒作業を1日1回は実施していた。

地域の感染レベルが高い時期には、感染リスクが高い学習活動は見合わせ、鑑賞教材や楽典の学習を中心に年間指導計画を変更し進めていた。

また、鍵盤ハーモニカやリコーダーの使用を見合わせている時期には、簡易的なキーボードを購入し、練習をしていた。



↑キーボード



↑消毒作業

鍵盤ハーモニカやリコーダー演奏の実施（音楽）（小・中学校）

音楽科では、鍵盤ハーモニカやリコーダーの演奏について、次のような対策により授業を進めた。

鍵盤ハーモニカの代替楽器としてミニキーボードを40台購入し、授業で活用した。全校共用のため、授業

の始まりと終わりの手洗いを徹底するとともに、必要に応じて消毒を行った。息は吹けないが、指使いの技能は十分に高めることができた。また、音楽会の合奏では、リコーダーに代わる主旋律をリードする楽器として各学年の演奏に活躍した。

リコーダーにおいては、児童はマスクの上から吹口を口の下に当て、教諭の旋律伴奏に合わせて指使いの練習を行った。そして、実際に音を出す時間を必要最低限に抑えた。



←ミニキーボードによる演奏



リコーダーの指使い練習→

学習環境への配慮（音楽・技術）（小・中学校）

【音楽】：教室等では音楽の知識や音楽の鑑賞等を行い、合唱や楽器演奏等に関しては、語らいの広場(屋外)やスペースの取りやすい多目的ホールで授業を実施した。吹奏楽連盟等が出している合唱に関するマニュアルに沿って生徒の立つ位置に印をつけ「密」にならないように工夫を行った。



↑琴の演奏をしている様子

【技術】：ICTの活用は勿論のこと、木工室での作業は、固定されていた作業机等を取り払い、「密」にならないよう配慮しながら授業を実施している。授業の開始・終了時また用具を触る前後は手洗いや消毒を行っている。

コロナ禍での授業実施における工夫（音楽・体育）（小・中学校）

音楽の授業では、マスクを着けて小声での歌唱練習や楽器を使ってのリズム打ち等を行っている。また、リズムに合わせて体を動かす等の表現運動もしている。

体育のベースボール型の運動では、フラフープを使って、友達との距離をとる

ような工夫をしている。サッカー型の運動でもラインサッカーで、相手との距離を保ちながら行うようルール変更をしている。



↑ リズム打ちの様子

ソーシャルディスタンスを意識した授業（音楽・体育）（小・中学校）

音楽や体育については「感染リスクが高い」とされる内容が多いため、配慮への意識をより高めて授業を実施している。

音楽においては身体的な「密集」を避けつつ、合唱等の授業を実施できるよう、音楽室ではなく、ホールや体育館等で授業を実施するなどの工夫がなされた。

体育においては、ソーシャルディスタンスを意識するとともに、体育館で授業をする際には窓を開け、大型扇風機を使用するなどして換気に努めた。授業者が配慮することが、児童生徒の意識を高めることにつながった。



↑ ソーシャルディスタンスを意識した体育授業

特別教室における感染予防対策（音楽・図工）（小・中学校）

複数の児童生徒が使用する特別教室をなるべく使用せず、普通教室を使用した。特別教室を使用する場合は、机を寄せ合いグループ学習ができるようにしていた配置は、全て前向きに配置し直した。また大型テーブルの場合は、天井からビニールシートをつり下げたり、アクリル板で仕切り



←ビニールシートをつり下げた図工室

グループでの→
対面した座席
配置をやめ、
全て前向きに
した座席配置



を設けたりして、対面でも着席できるよう工夫した。

道具の共有や貸し借りをなるべくしないようにし、行った場合は消毒をするようにして、感染予防に努めた。

年間計画を見直したり、教材を変更したりすることで、学習内容を網羅できるようにした。

コロナ禍における造形活動（図工）（小・中学校）

収穫した野菜を描く授業では、一方向を向いて、前後左右の間隔を十分に空けて、描画活動を行った。

収穫したばかりの大根は、葉も生き生きと張りがあり、形も色も題材として優れている。自然の形そのままの大根は、太さも形も様々で、幾又にも分かれた大根は、描きたい気持ちをくすぐる逸材であった。



↑収穫しただいこんを描く

黒画用紙にクレパスで形を描き、間近で色の変化を見ながら水彩絵の具の色を作っていく。完成した作品は、隣に置いている大根の生鮮さが、絵にそのまま映し出されていた。コロナ禍にあっても、生きた題材と対話しながらの造形活動を展開している。

紙やすりで板を磨く作業（図工）（小・中学校）

図工の授業で、紙やすりで板を磨く作業を行った。

図工のような作業を伴う授業では、友だちとの会話を通じて様々な発想を獲得するとともに、苦手なことであっても、他者から学ぶことを通して身に付けていくことができるものである。

そこで、マスクに加え、職員の手づくりによるフェイスシールドを被らせ、感染予防対策を講じた安心感の中で、友だちとの会話を楽しみながら充実した授業を行うことができた。



↑フェイスシールドを活用して作業

制作場面での感染予防（幼稚園等）

幼稚園では、制作の際、テーブルを使用し、幼児同士が向かい合わせになる。その際の飛沫予防にと、地元企業がアクリル板のパーテーションを寄附、設置してくださった。幼児たちは「顔が見えるなあ」と嬉しそうに微笑み合い、互いに作業手順を確認しながら、意欲的に制作に取り組むことができた。給食時にもこのパーテーションを使用することで、互いの顔を見ながら食事を楽しむことができた。使用後は、教職員が消毒を行っている。

また、各自が持参したハンカチやタオルを共有のタオル掛けにつるしているが、タオル掛け衛生カバーを使用し、隣のタオルと触れないように工夫している。



↑パーテーションを挟んでの壁面制作



↑タオル掛け衛生カバーでタオル同士は触れていない

PCタブレットを活用した調理実習(家庭)(小・中学校)

6月より実施を見合わせていた調理実習を比較的感染が落ち着いている10～11月に集中して行った。5年生の家庭科「食べて元気!ご飯とみそ汁」の単元では事前に「NHK for school」の調理手順の動画を児童のPCタブレットに入れておき、調理中には教員の話が長くなならないよう工夫した。児童が事前に手順を確認しておくことで、短時間で活動を終わることができた。また、使用する鍋やまな板、包丁類の洗浄、調味料の準備などは教員が行った。当日は机を消毒、手指も消毒した後、児童には手袋を着用させた。ふきんはキッチンペーパーに変え、お皿、お椀も使い捨てを用い、使い終わったあとは廃棄した。実施時期、学習の進め方の工夫により、単元のめあてを達成することができた。家庭学習でもう一度自主学習することで学びが深まった。



↑感染対策を講じた調理実習

調理実習に向けた具体的な実施方法や留意点(家庭)(小・中学校)

家庭科の調理実習に向け、教科研究部会等で、課題と対応を検討し、具体的な実施方法や留意点をまとめ、各校で共有を図った。

以下がその一部である。

- ・調理台1台あたりの人数を2人程度として、1人調理(すべて自分で調理し、自分の調理したものだけを試食する)を基本とする。
- ・喫食についても、対面にならないよう心掛けるなど、感染予防に配慮する。
- ・常時換気、身体的距離の確保、教材教具の貸し借りはしないなどの感染症対策を徹底する。



←調理はすべて個人で行う



喫食の際も感染の予防に配慮する→

教員による調理実習の実演（家庭）（小・中学校）

学校での調理実習ではなく、家庭で実践することにした。そのために、まず、教員が授業の中で実演した。その際、ただ見るだけでなく、包丁の使い方、野菜の切り方、火加減等、工夫すべき点を事前に明示し、メモさせた。次に授業の中で作る物を自分で考えさせた。家庭でのサポートを得るため、時間の取れる冬休みを宿題の期間に選んだ。教科書通りのゆで卵、味噌汁だけでなく、お雑煮を作った児童もいた。ワークシートにまとめて、冬休み明けに交流した。

児童の感想では、「おいしかった」「火加減を工夫した」等、楽しみながら考えて取り組んだことが分かった。調理実習のねらいが達成できたと思う。



↑教員による実演



↑児童の調理例

タブレット端末を活用した授業（保健体育）（小・中学校）

タブレット端末をカメラの三脚にセットし、自分の動きを撮影したものが、一定時間後に再生されるアプリケーションを活用した。そのことにより、人との接触がなく、動きを確認することができた。特に、個人種目である走り高跳び、ハードル走、剣道などで自分の動きを視覚的に確認できるので、生徒も意欲的に授業に取り組むことができた。

また、生徒同士でアドバイスをおこなう場面では、画面を見ながら対話することで、対面を避け、コミュニケーションをとることもできた。

さらに、ダンスの授業において、参考動画を観る際にもタブレットを用いることにより、しっかりと距離をとりながら体を動かすことができていた。



タブレット端末を活用した授業の様子→



安全な授業実施の決まり（体育・保健体育）（小・中学校）

感染症対策と熱中症対策のため、マスク、タオル、水筒を入れることのできる袋を用意し、授業に持参することを推奨した。授業内だけでなく、更衣や移動時の密の回避、授業前後の手洗いの徹底などそれぞれの学校で決まりを作ったり、動線を決めたりして、安全な授業となるよう取組を行った。

市教委より、感染レベルごとに各領域において実施の可否を慎重に検討すべき活動例を示し、各校での判断や実施内容にばらつきが起きないように配慮した。

市を通じてトップアスリートを招聘し、感染症対策を踏まえた出前授業など子どもたちが興味を持って運動に取り組める工夫を行った。

西宮ストークスによる
出前授業



ソーシャル
ディスタンスを空けて
説明を
聞く

2 「学校再開後」の対応

(2) 指導の工夫

- ア ICT 及び教具の活用
- イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫
- ウ 「特別の教科 道徳」に関する取組



兵庫県マスコットはばタン

遠隔教育システムを活用した学習活動（小・中学校）

他校との交流授業や、学校内での感染リスクを低減させるため、遠隔教育システムを活用した学習活動を実施している。

小学校の外国語授業では、近隣小学校の教室と遠隔教育システムを通じて通信し、直接接触を避けつつ自己紹介を実施した。

医療的ケアを必要とする児童生徒の感染リスクを低減させるため、遠隔教育システムで教室とケアルームをつなぎ、学習の様子を見られるようにした。映像で学習活動を見ることで、別の場所で学習していても、児童生徒の学習への参加意識を高めることにつながった。



↑ 遠隔教育システムを活用した交流授業

校舎内における Zoom 活用授業（小・中学校）

目安の身体的距離「1メートル」を確保するため、1学級ずつの5、6年生をそれぞれ2グループに分け、半分の児童が隣の教室に移動し、オンラインで授業を受けた。

教員はA教室で授業をし、その様子を「Zoom」で隣のB教室に配信。B教室の児童は、スクリーンに映し出される動画を見ながら学習をした。B教室の隅に設置したカメラで

B教室の様子がA教室の教員の手元のパソコンと電子黒板に表示される。女子児童は「やりにくさはないけど、みんな授業を受ける方がいい」と話していた。



←電子黒板に B 教室の様子が映し出される。



←挙手すると、向こうの教員がパソコン上で B 教室の児童を見つけて指名する。

デジタルドリル (小・中学校)

ICT を活用した取組として、授業や学習タイムにデジタルドリルの活用を始めた。

習熟度により、課題を選択できるだけでなく、学校と家庭の両方で取り組むことができるため、今後も継続していきたいと考えている。

授業スタイルが一変したコロナ禍においては、児童間の距離を確保し、マスクを着用した状態で活動を行う。話し合い活動なども、これまでのようには行いにくくなっているため、意見交換や話し合いなども、ICT のコミュニケーション機能を有効的に活用し、対話的な学びを推進している。



↑ デジタルドリルにチャレンジ

オンライン授業実現への取組 (小・中学校)

再び休校措置が必要となる時に備えた対策として、1学期からオンラインでのクラス学活練習の取組を行ってきた。

2学期からは各教科でのオンライン授業実現への取組を始めた。

教室の生徒全員がタブレットを持ち、教員が別室から授業を行ったり、逆に生徒がい

くつかの場所に分散して、授業を受けたりするなど、様々な形の取組を行った。特に、中学校2年生の音楽では、音楽室、被服室、家庭(自宅待機の生徒)の3ヶ所に分かれての合奏を試みることで、オンライン授業の問題点を確認することができた。



↑ 音楽 3ヶ所中継合奏

体験する学習を可能にする様々な工夫（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、地域と連携した活動や社会見学などが軒並み中止や延期を余儀なくされた。しかし、子ども達にとって、本物に触れ、体験する学習の意義は大きい。そこで、次のような工夫をして実施した。

- ・教室ではなく広い体育館で実施
- ・バスの乗車人数や一度に参加する学年の人数を半分に分け、同じ内容で分散型の社会見学を実施
- ・社会見学に行く代わりに、タブレットで事前に教員が取材動画を作成し、教室で授業に活用
- ・社会見学に行く代わりに、漁協の方をゲストティーチャーとして招きプロジェクターを使って体育館で海苔の特別授業
- ・タブレットを使って体育館からのリモート中継による児童会の立会演説会。児童は各教室で視聴



↑ ゲストティーチャーと体育館での打合せ

1人1台タブレットの活用（小・中学校）

ペア学習やグループ学習において、意見や考えの交流・共有を図る際には、児童同士で直接会話をせず、1人1台所有しているタブレットを活用する。

ロイノートを使って、それぞれの意見や考えをタブレットの画面上に映し出すことで、すべての児童に見えるようにする。具体的には、算数では「図形の面積」「単位量あたりの大きさ」などの多様な意見を引き出す授業、国語では「話す」領域や討論を取り入れた授業等で有効である。

また、社会見学に行く代わりに、「バーチャル自動車工場見学」「新聞ができるまで」などのVR動画等を活用した授業を展開している。



←タブレットを活用している様子

クラス全員の意見を →
タブレットで交流・共有できる



プログラミング教材「WeDo」を使った学習 (小・中学校)

6年生理科「発電と電気の利用」の単元でプログラミング教材「WeDo」を使った学習に取り組んだ。

個人やペアで話し合った意見をホワイトボード上で操作することにした。従来の話し合い活動と同様の効果を得ることができた。お互いの意見の相違に気づき、友だちの良い意見を受容しながらより良いプログラムに近づけようとする姿勢が見られ、班としての一体感も芽生えた。また、学習活動をミッション形式で提示し、ゲーム性のある活動に主体的に取り組ませる時に、感染予防対策としてソーシャルディスタンスを保ちながら、授業を展開した。

↓ ホワイトボードを使っての話し合い



グループ活動を可能にする取組 (小・中学校)

学校再開後は、マスクの着用や手洗いの徹底、アルコール消毒といった対策はもちろんのこと、授業においても可能な限り密を避けながら学習を進めた。

グループ学習を行う際には、これまで4人グループを基本としていたが、正対することを避けるために3人グループで行い、

互いの顔が見えるようにしながら、距離を確保するようにした。そして簡易ホワイトボードを活用し、伝えたいことの要旨を記入させてから短い言葉で交流するよう工夫した。

また、中学校区内の特別支援学級の交流会では、実際に集まることを避け、4校でオンライン交流を行った。画面を通してクイズやゲームを楽しみ、心に残る交流ができた。



グループでの話し合いの様子

オンライン交流の様子



Meet を使ったオンラインライブ授業 (小・中学校)

緊急事態宣言下の臨時休業中に、児童1人ずつに Google アカウントが発行された。これを受け、本校では一刻も早く学校と家庭をつなぐことを想定して、保護者向けに分散形式での Google Chrome 説明会を開催した。

その後、各担任が Classroom に児童たちへのメッセージを書き込んだり Meet を使ったりして、つながりを持った。

さらに分散登校が始まってから、6年生は Meet を活用して自宅にいる児童とオンラインでつなぎ、登校している児童と同時進行で授業を受けることができるようにした。

この取組により、オンライン接続できない家庭があっても、登校時にもう一度同じ授業を受けることができ、学びを保障することができた。



↑ Meet を使ったオンラインライブ授業

既存のTV放送システムの活用 (小・中学校)

当町で最も児童数が多い小学校では、全校児童が480名を数え、体育館に全校児童が集うと「密」を防げない。そこで、古いTV放送システムを改修した。デジタル化する機器、パソコンとカメラ等を切り替える機器、照明機器などを整えるとともに、バックパネルも手作りした。

朝会や始業式・終業式だけでなく、児童が自主的に企画・運営する児童集会もTV放送で実施している。今では、カメラワークや画面の切り替え操作も児童が行うようになり、3択クイズ、リズム体操、絵本の読み聞かせなど、内容も充実してきている。

タブレット端末を利用する方法もあるが、TV放送は大画面を見ながら、学級の児童全員で活動できる点で優れている。



↑ TV放送スタジオの様子

Zoom を活用したスキー教室事前授業 (小・中学校)

スキー教室を実施するにあたり、体育担当が中心となって全校生に Zoom を活用した事前授業を実施した。

密を避け、各教室に習熟度別の班に分かれたが、Zoom を活用することで効果的な指導ができた。

具体的には、スキー教室における感染対策などは、パワーポイントなどを使い全員に指導した。その後に、習熟度別に担当の教員から班における注意点などの事前指導を行った。

Zoom を活用したことで、互いに顔を見ながら共通の疑問点を解決できた。また、パワーポイントやビデオなどの資料も大変分かりやすいと好評であった。



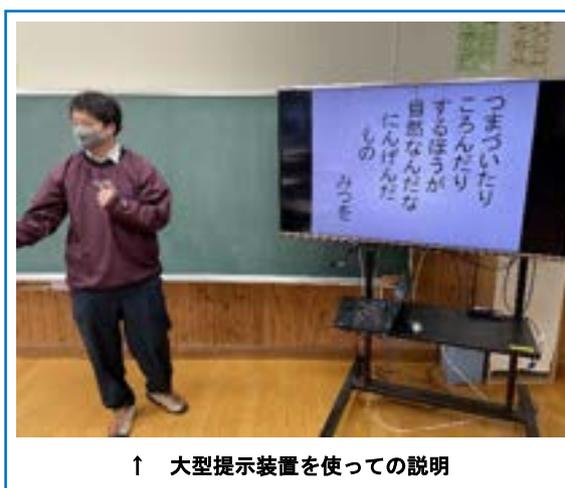
Zoom 配信を見ながらの事前学習

大型提示装置を活用した時間割編成と負担軽減 (小・中学校)

学校再開当初、分室による分割授業を実施するにあたり、教員の授業時間が単純に2倍となり、時間割編成が課題となった。

この課題解決に向け、大型提示装置を介しての授業を実施した。提示装置による授業を行う教室では、複数の教員が関わった。

長期にわたる臨時休業により、学習に不安を感じている生徒が多かったが、多くの教職員が関わることにより、生徒に寄り添った指導となり、学習も含めた学校の教育活動全体に対する不安解消につなげることができた。



↑ 大型提示装置を使っでの説明

小小連携における ICT の活用 (小・中学校)

小規模校では、かねてより自然学校や修学旅行を連合で行うなど小小連携に力を入れている。昨年までは自然学校を見据え、4年生が近隣の小学校に出向いて合同学習を行い、連合で活動することへの不安を和らげてきた。

今年は感染症予防対策として、リモートを活用した交流会を12月に実施した。2校をオンラインで繋ぎ、大型モニター越しに互いに顔を見たり声を聞いたりしながら交流を行った。自己紹介をする、互いの校歌を歌う、学校を紹介するクイズを出し合うといった内容で、互いの学校や児童の様子を知ることができた。クリスマスが近い時期であったので、交流の最後は一緒にクリスマスソングを歌いながら踊って楽しんだ。子どもたちからは「自然学校で出会うのが楽しみ。」という声が聞かれるなど、よい交流となった。



↑モニター越しに一緒に歌う様子

小小連携でオンライン授業 (小・中学校)

○ 小野南中学校区の市場小学校・来住小学校5・6年生を対象にオンライン授業を実施した。

○ 明石高専の教員をゲストティーチャーにオンラインでプログラミング教育の授業を実施。同時に両校の児童が受講した。



↑受講している様子

○ 児童は、今までに体験したことのない「学び方」に対して、「とても楽しかった。また体験したい」と新しい授業スタイルを、好感を持って受け入れた。

学習したことをリモート交流で発表（小・中学校）

例年は、同じ中学校区ユニットの小学校と、芸術鑑賞や自然学校で直接交流しているが、今年度は、リモート交流を実施した。

2年 生活科で行った「町たんけん」で学習したことを、リモートで発表した。

子ども達は、いつにも増して真剣な顔つきで緊張している様子であったが、自分たちが「町たんけん」で学んだことを、クイズや寸劇、実演などを取り入れて、楽しく聞いてもらえる工夫を凝らしながら発表することができた。

発表の後には、質問や感想を伝える時間を設け、画面越しではあったが、充実した交流活動となった。



↑リモート交流の様子

オンラインによる全校集会（小・中学校）

Microsoft Teams のビデオ会議のシステムを利用し、各教室の大型モニターに、映像をライブ配信することで、実際に児童が集まることなく、オンラインで全校集会を実施した。

全校児童で同じ体験を共有することで、集団への所属感や連帯感を深めることができた。

発信する側にとっては、受信する側の反応をリアルタイムで確認することが難しいというデメリットがあったが、受信する側の反応を想像し、伝える内容や伝え方の工夫について、学習するきっかけとなった。



↑各教室の大型モニターを使用した全校集会

歌唱テストの中継（小・中学校）

歌唱時のマスクの着用は、息苦しいだけでなく、口の動き等の歌唱表現の評価も難しい。歌唱テストの適正な評価をするために受験者だけが第2音楽室で歌唱テストを行い受験者以外は別教室で中継を鑑賞する形式で実施した。

受験した生徒の感想では、「テストの形式はいつもと同じであるけれど目の前に生徒がいないので緊張することなく歌うことができた。」や「カメラと先生だけなので思い切って声をだすことができた。」などが多くあった。



↑ 歌のテストに臨む生徒

↓ 中継を鑑賞し評価する生徒



リモートでの食育講演会（小・中学校）

例年は体育館で、対面式の講演会を実施していたが、今年度は、リモートでの実施に切り替え、食育に係る講演会を行った。

講師は、生徒の表情や反応を見ることができない上、一方的な配信になることを心配していたが、カメラの向こう側にいる生徒を意識

しながら、語りかけたり、質問を投げかけたり、ジェスチャーを織り交ぜたりしながら、話をしてくれた。

生徒からは「リモートではあったが話に惹き込まれた。」「心と身体の健康を大事にしていきたい。」などの感想が寄せられ、充実した取組となった。



↑ 「食と健康」をテーマにしたリモート講演会

ゲストティーチャーと Zoom による交流 (小・中学校)

今年度はゲストティーチャーを招いての学習の実施が困難であった。しかし、児童は学校外の方に教えていただくことが大好きであり、意欲的に取り組むことができる。そこで、Zoom を活用して講師からの課題を共有し、グループで考えを交流して意見をまとめたり、他の学級や講師に伝えたりすることに挑戦した。リモートでのやり取りもスムーズで、対話的で深い学びが実現できた。

各校で ICT を活用した学習が進んでいる。パワーポイントで学習のまとめを発表したり、意見を交流するコミュニケーションの手段として利用したりもしている。また、特別な支援を必要とする児童生徒にも有効な学習ツールであり、今後、様々な活用方法が考えられる。



同じ内容の授業を複数の教室で受けることを可能に (小・中学校)

学校再開までに情報担当の教員を中心にオンライン授業の取組を始めた。感染リスクを下げるために、同じ内容の授業をいくつかの教室に分かれて学習できるように準備を進めた。

はじめはうまくつながらず、授業者がパワーポイントで作った授業内容を各教室で説明したこともあったが、回数を重ねるごとに安定して行えるようになった。子どもたちも興味津々で、他のクラスの様子が映ったり、友だちの声が流れたりすると、集中して画面を見ることができた。

新型コロナウイルス感染症の感染予防だけではなく、児童生徒の体調に合わせて別室で学習することができるなど、メリットも多く、今後も活用を増やしていきたい。

↓授業者は別室で全体指導



前の画面を見ながら学習↑

電子黒板や WEB カメラの活用 (小・中学校)

電子黒板や WEB カメラなどを用いて配信による授業や行事を実施した。

- ① 生徒会長選挙による立ち会い演説会を、各教室に WEB 配信で実施した。
- ② 進路説明会では、保護者は体育館で教員の説明を聞き、3年生徒はその内容を教室で視聴した。
- ③ 謡曲高砂において、講師による実演や指導を配信で実施した。



その他、学年集会や防災学習などにおいても配信による活動を実施している。生徒が同じ場所に多数、長時間集まることを避けるために有効な手段でもある。

プログラミング学習におけるロボットの製作 (小・中学校)

本校の6年生の児童が、プログラミング学習において、チーム毎に、学校の課題を見つけ、ロボットというテクノロジーを活用して課題を解決するロボットの製作に取り組んだ。

一つのグループが「学校で手指消毒が徹底できていないから、消毒を呼びかけるロボットを作ろう！」とテーマを設定し、試行錯誤を繰り返しながら製作に取り組んだ。

最初は、呼びかけだけだったものの「実際に消毒をして欲しい」という下級生や教員の要望を受けて、「自動消毒ロボット」という課題にアップグレードした。このロボットは、校内で他の児童に試験的に使ってもらい、何度も改良を加えながら完成した。



← 消毒ロボット
アルコール消毒液を出すロボット

ようちゆうロボット →
教室に入るように呼びかけるロボット



全員の考えをスクリーンに映して共通理解 (小・中学校)

算数科の「三角形と四角形」の図形の仲間分けの学習では、タブレットを使って学習を行った。タブレット上で、図形を動かしながら考えられるので、考えの変更も簡単に行うことができる。

また、全員の考えを前のスクリーンに映して見ることができるので、自分の席から移動しなくても友だちの考えを知ることができる。

今年度は、コロナ禍で密を避けるため、机の間隔を広くとって学習している。タブレットを使った学習は、効率よく学習を展開できるだけでなく、密を避ける意味でも効果的である。



↑全員の考えをスクリーンに

統合する園同士のリモート交流 (幼稚園等)

今年度末で閉園し、来年度より保育所と統合して新しくこども園となる。4歳児は、来年度同じ園で同級生となる保育所の子どもたちと交流を行いながら、来年度を迎えようと思っていた。

しかし、実際に、互いの園を訪れて交流することが難しい状況のため、リモートで交流することにした。まず、あらかじめ、絵や手紙のやり取りをした。そして、その受け取った絵を保育室に掲示し、リモートで交流を行った。クラス名の紹介や互いの園歌の紹介、遊んでいる体操等を見せ合ったり、質問をし合ったりした。次の交流まで、共通の歌を歌ったり、体操をしたりするなど、共通の遊びがあることで、来年度の生活が楽しみとなった。

リモートで対面→
しているところ



←わずかな時間でも
親しみを感じるよう
になった

社会科におけるオクリンクの活用 (小・中学校)

6年生社会科「江戸幕府と政治の安定」の単元で、オクリンクを活用し、資料の読み取りと意見交流を行った。オクリンクで意見を送信し合うペア学習や意見交流は、感染予防の対策をしながら、少しでも主体的な学習を行うために大変有効な手立てであった。児童の発表において、タブレットは提示資料へ、直接記号や文字が記入できる。このことは、言葉で表現が苦手な児童も、表現方法を工夫でき、より主体的に発表しようという意欲が高まる様子が見てとれた。班で話し合うような学習形態がとれない中、ICT機器を積極的に活用することで、児童の主体性を高められる取組となった。



↑オクリンクで意見交流をしている様子

一人一台のタブレット端末の活用 (小・中学校)

主体的・対話的で深い学びの実現に欠かせない話し合い活動が密を避けるために制限される状況で、自分の考えを発信したり、友達の意見を受け取ったりしながら考えの幅を広げる機会を確保することが困難になっていた。

中学3年の理科で「環境問題」をテーマとした授業において、一人一台のタブレット端末を活用して、調べ学習を行った。調べた内容をGoogleスライドにまとめさせ、Googleクラスのストリームに添付することで、誰でも他の人が調べている内容をリアルタイムに閲覧することができるように工夫した。また、友だちへの質問やコメントを伝えるのにチャット機能を活用させた。それによって、友だちの意見を取り入れたり、新しい視点を得たりしながら自分の考えをまとめていくことができ、深い学びへとつなげる取組となった。



Googleスライドをつくっている様子

リモート生徒会選挙 (小・中学校)

今年度は、GoogleのMeetを利用しての生徒総会や生徒会選挙を行った。生徒総会では、パソコンを複数使用して、司会を行う者、演説を行う者などを分けることで、配信先の学級に伝わりやすい内容に工夫した。全校生を目の前にすることはできなかったが、ライブ配信の中で良い緊張感をもってリーダー達が臨むことができていた。生徒会選挙ではGoogleのFormsを使用し、一人一人がタブレットを使用した投票を行った。初めての試みであったが、生徒が意欲的に機器を使用する姿が見られ、これからの3密を避ける良い手立ての1つとなった。



↑生徒総会：各学級への動画配信

リモートによる集会活動 (小・中学校)

感染症拡大防止から、リモートで全校朝会や児童集会などを実施した。

会議室にカメラを設置し、その様子を各クラスに配信。これまでの集会活動同様に、教員が司会進行する全校朝会、児童生徒が主体となって進めていく児童集会を通して、学校全体で共有したいことなど、大切なことはコロナ禍でも手段や方法を変えて、実施することができている。



↑リモートで児童集会を実施

Zoom を活用した酪農家と学校をつなぐ体験学習（小・中学校）

ふれあい酪農体験事業の学習を Zoom を活用して実施した。酪農家の仕事の様子、牧場や牛舎をスクリーンを通して見学できるようにした。通常の社会科見学のように移動時間や交通手段の確保が必要ない分、児童や教員の負担は少なくてすんだ。しかし、現地見学での五感を使った学習はできないため、事前に牛の飼料等の実物を学校に送付してもらうことで、児童は、牛が食べているスクリーン映像とあわせて、手に取った飼料の感触やおい等を感じながら、酪農家の話を聞くことができた。オンラインで現地と学校をつなぐ学習形態は、実物準備などの工夫を行うことで、効果を上げることができた。



↑スクリーンに映された牛舎前の酪農家の方



↑画面を通じて、酪農家の方に質問する児童

Zoom を活用した生徒会選挙（小・中学校）

これまでのような全校生が一堂に会しての生徒会選挙は、感染症対策のため取りやめた。そこで、Zoom と大型モニターを活用して教室で立候補者の演説を視聴する学級、体育館で直接聞く学級に分けることで、密を防ぐ工夫を行った。放送による音声だけでは、どのような生徒が立候補しているかは把握できないが、画面を通して立候補者の表情や語りぶりを視聴することで、誰に投票しようか考えることができる環境を確保できた。また、Zoom を活用することにより、なぜ通常の形態で生徒会選挙を行わないのか生徒自身が考える機会となり、より一層の感染症対策への意識の向上につながった。



↑生徒会役員に立候補する生徒たち



↑画面に向かって演説をする生徒

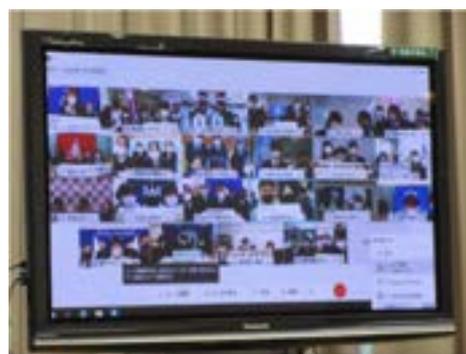
市立高等学校サミット（生徒会活動）（高等学校）

2020年12月19日、市立高等学校サミットを行った。

今年は新型コロナウイルスの影響もあり、リモートでの開催とし、半年前から市立3校の合同生徒会で準備を進めてきた。

当日は全国から22校が参加してのサミット開催となった。今年のテーマ「メディアで地域活性化～高校生にできること～」について、各校がそれぞれの地域で抱えている問題を出し合い、高校生ならではの様々なアイデアを出して、各地域の活性化について話し合った。

今回のサミットで、全国さまざまな高校の生徒会がどのような活動を行っているかについても、知ることができた。



↑ サミットをリモートで開催

すべての集会的行事をリモートで実施（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、体育館での集会をリモートに代えて実施した。始業式や全校朝会、児童会選挙等。本校で集会的行事をすべてリモートで実施できたのは、ICT環境が整備されているためである。タブレット、天井吊り下げ式液晶プロジェクター、吊り下げ式スクリーンが各1台教室に設置されている。ICT機器に不慣れでも簡単に操作できることが大切である。児童は、リモート集会を経験し、カメラ前での位置取り、話す声の大きさ等を身に付けている。リモート集会等新しい学校の生活様式に、児童たちが柔軟に対応できたことがよかった。



↑ リモート始業式の様子

検温等の実施の工夫 (小・中学校)

休校中より健康状態把握のため、生徒・教職員ともに、「健康観察カード」を用いた健康観察を実施していた。学校再開に当たり、健康観察を Forms を利用して実施したいと考え、まず教職員へ先行実施した。

Forms による健康観察の利点は、その日の教職員の健康状態が一覧で把握できるという点である。また、教職員は、自宅からスマホで送信できるため、管理職等は、出勤前に健康状態を把握できる。部活動においても顧問が Forms を利用して早朝練習前に健康状態を把握している部もある。今後は、全校生へ広めていき、さらに健康観察の徹底を図っていきたい。



「サンタさんきてね！」(幼稚園等)

園庭のシンボルツリー「ポプラ」を剪定することになり、切った木の枝や葉っぱで遊ぶ姿が見られたことから、ポプラの木で何かできないかと幼児たちが考え始めた。クリスマスの飾りを作っていた時期と重なり、大きなクリスマスツリーを作ることになった。今までの経験や絵本等を見ながら「飾りがいる」「星とかリースもかわいいかも・・・」とアイデアを出し合った。

今年は、3密を回避するため園庭に組み立てた。広い空を見上げながら、サンタさんに思いを馳せイメージを広げて遊んだり、未就園児も一緒に飾りつけをしたりしながら、楽しむことが出来た。幼児たちには、大きなツリーに感動し、達成感を味わえた遊びとなった。



飾り付けをしているところ



主体的に遊び込むための教員の援助と環境構成「虫マップを作ろう」(幼)

6月、幼児は園庭に飛んでくるアゲハ蝶や卵、セミ等に興味をもった。例年であれば降園時に保護者に向けて幼児の遊びの様子や学びについて詳しく伝えていたが、密を避けるためにより分かりやすいドキュメンテーションを作成し、見えやすいところに掲示した。写真を多く使っていることから、幼児にとっても自分達の遊びを振り返りやすくなり、「虫研究所作り」や「虫マップ作り」など主体的に遊び込む姿につながった。

また、夢中で虫マップを作ろうとする幼児に保護者も心動かされ、近くの公園や通園路の虫やセミの抜け殻集め等にも協力してくれた。その結果地域の自然にも興味が広がり、物事をじっくり見る力、違いに気付く力、命を大切にしたい気持ちにもつながった。



友だちと虫マップを作っているところ



少人数による意見交換時の工夫（小・中学校）

主体的に考えを深め、認め合い、響き合い、高め合う児童の育成を目指して、対話を通して「分かる喜び」「できる楽しさ」が実感できる授業づくりに取り組んでいる。中でも国語科では、「話す・聞く」領域を中心に、対話を取り入れた授業を進めようとしており、そのためには十分な感染症対策を行う必要がある。



↑6年生国語「みんなで楽しく過ごすために」

そこで、少人数で意見交換を行う時は机上にアクリル板を設置したり、グループでの意見を全体に広げる時は大きな声を出さずに済むようにホワイトボードやICT機器を活用したりするなど工夫した結果、児童一人一人が自身の考えを深め、意欲的に学びに向かう姿が見られた。

子ども達が自ら発話したいと思う授業づくり（小・中学校）

今年から外国語が教科となり、本格的に教科書を用いた学習がスタートした。外国語科・外国語活動を研修のテーマとして4年目になる。その研修の場として研究授業を行った。



↑ ペアトークの様子

やり取りをメインとした授業であったが、全体でのドリル学習や個人での練習を繰り返し、自信を持ってコミュニケーションができるように心がけた。ペアを限定し、マスクをつけて、距離を保ちながら会話を楽しんだ。やり取りの回数は少なかったが、子ども達は自信を持って発表できた。

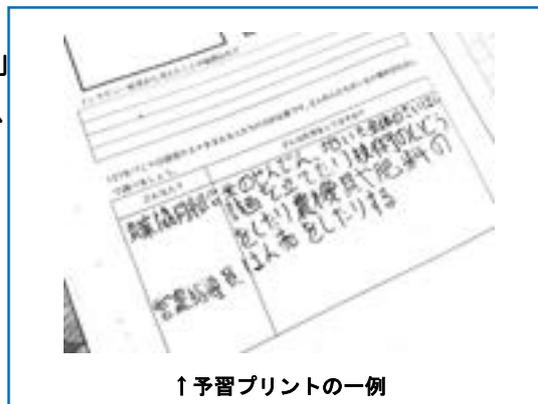
子ども達が自ら発話したいと思う授業づくりについて、学校全体で考える良い機会となった。今後は、タブレットを用いた発表活動やその評価等、withコロナ時代の新しい外国語科・外国語活動を目指して取組を続けたい。

臨時休業中の家庭学習を継続して「習慣化」(小・中学校)

社会科において「稲の品種改良」について学ぶ授業では、いきなり、「教科書にはどのように書いていましたか?」という教員の問いで始まった。

「農家の人々を支えている人には、どんな人たちがいるのだろうか」という問いに対し、子ども達は、「農業協同組合」「営農指導員」と、あらかじめ教科書で調べてきた内容を発表していた。

臨時休業中に作成・配付した予習プリントによる家庭学習を、学校再開後の通常の授業でも「習慣化」したという担任の先生は「予習プリントに取り組みせると、授業の中で考える時間を多くとることができ、子ども達の『主体的な学び』を促すことができる。『深い学び』に導けるような発問を考え、今後も続けていきたい」と話していた。



↑予習プリントの一例

カリキュラム・マネジメントによる教科横断的な単元構想(小・中)

感染症対策を講じながらも、学びの質を高めるために、カリキュラム・マネジメントをもとに教科横断的な単元を構想し、児童の目的意識の高揚、既習内容の活用を図った。

1年生では、「まとあて(体育)」の「まと」を題材に「ひろさくらべ(算数)」を行った。そこでは、既習の「わけをはなそう(国語)」の話し方を意識的に活用する構成とした。「一目で判断しづらい具体物を比較する」など、話し合いがたくなるように仕組み、非接触でのペアや全体の話し合い活動を設定した。友だちの考えと自分の考えを比較し、より良い比べ方を吟味したり、広さが正確に比べられる喜びを感じたりできるように働きかけた。そして、「ふりかえりの視点」を提示し、ふりかえりの充実を図った。



対話を取り入れた授業の工夫（小・中学校）

令和2年度高砂市教育委員会指定の人権教育研究発表会は、感染症対策を講じた上で実施した。特に、重要なテーマである「対話を取り入れた授業の工夫」においては、パーテーションを活用して行った。また、教科によってはホワイトボードを使用して意見交換を行った。生徒からは「対話を通して考えを深めることが出来た」という意見も多数出ている。今後導入されるタブレットなどのICT機器の活用など、さらなる工夫が必要である。

↓パーテーションを活用



文章作成を中心とする形態の学び合い（小・中学校）

中学校社会科で「学び合い」による学習を進めていたが、口頭による意見交流から文章作成を中心とする形態に変更した。

生徒は提示された「本時の問い」に対して、資料を読み解き、個人で熟考しながら文章を作成する。考えがまとまった生徒は教員から助言を受け、他の生徒に「学ぶことのサポート」を行う。活動に制約はあるものの、生徒全員が学習に没頭し、思考の輪が広がった。

生徒同士の対話的な「学び合い」と、主体的な個人学習が実践され、生徒の思考力と記述力は格段に向上した。教員は、安全に配慮しながら、生徒が学ぶ機会の工夫を継続して重ねている。



新型コロナウイルス感染症を取り上げた総合的な学習の時間(小・中)

「コロナと共存しながら幸せにくらすために～自分たちにできること～」と題した単元を設定した。市の新型コロナウイルス感染症対応の取組を調べ、関係部署にインタビュー活動等をした。

市の取組は人々の生活を支えるためのものであることを知り、調べた情報をさらに深く理解するため、何度も聞き取りをしたり、それらをもとに自らの考えを形成したりしながら、話し合い活動をすることで、児童から「全校生に伝えたい、届けたい」との思いが生まれることになった。下級生に伝えるための言葉や元気を与えられる行動とは何だろうと何度も議論する等、感染症というタイムリーであり身近なものをテーマに設定したことで「自分たちにできること」を考える学習活動になった。



↑コロナに負けるなプロジェクトと題し、全校生に発表するようす

自分の意見を他者に伝えられる工夫(小・中学校)

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童の自主的な活動を充実させることを目的とする授業を計画した。

児童が自分の意見を他者に伝えることのできる力を育成することをねらいとして授業を行った。

そこで、グループ討議や個人の発表の際には、職員手づくりのパーテーションを活用し、話す児童も聞く児童も、安心しながら活動できる場を設けた。



↑パーテーションを工夫して発表

高校生との交流による食育（小・中学校）

食育については、昨年度も社高校生との交流で毎月1回実施していた。しかし、本年度は、開始時期が遅れたことや調理実習ができないなど計画の変更を行った。

社高校生には、各学年2名程度で授業に参加してもらうように依頼した。学年毎に入るメンバーを決めて、当日検温をして、風邪症状がある場合はメンバーを変更してもらいながら実施した。

感染対策をとっての実施となったが、その中で高校生が回数を重ねるごとに、指導方法や手順を工夫し、児童も楽しく学習することができた。



↑高校生指導のもと1年生が献立作成をしている様子

コロナ禍における言葉による関わり合いの重要性（小・中学校）

授業公開や講師招聘の規模を縮小して、研究に取り組んだ。授業研究では、関わり合いに注目して、グループトークやペアトークを取り入れてきた。自分の考えを述べることはできるが、他者の意見につなげて発信することが弱いので、意見の深まりがない。

そこで、授業中にトークで聞いた他者の意見を青字でノートに書き足したり、自分の意見と比較したりするよう取り組んだ。

感染拡大防止のため、授業中もマスク着用、一定距離の確保は必須で、他者の表情や感情が分かりづらく、意思疎通が難しい。こんなときこそ、言葉による関わり合いが重要である。丁寧に表現した言葉が、日常生活を豊かにするよう研究を継続した。



↑グループ討議

偏見や差別を許さない道徳的実践意欲と態度を育む取組(道徳)

<教材名>

わたしのせいじゃない(6年生)

<内容項目>

公正、公平、社会正義 C-(13)

<ねらい>

登場人物の様々な言動から、なぜいじめが起きるのか、さみしくつらい思いをする子に何ができるのかを考えることを通して、身近な差別や偏見を見逃さず、自分にできることを考え、誰もがよりよく生きる、安心して暮らすことのできる社会を願い、進んでその実現に努めようとする道徳的実践意欲と態度を育む。

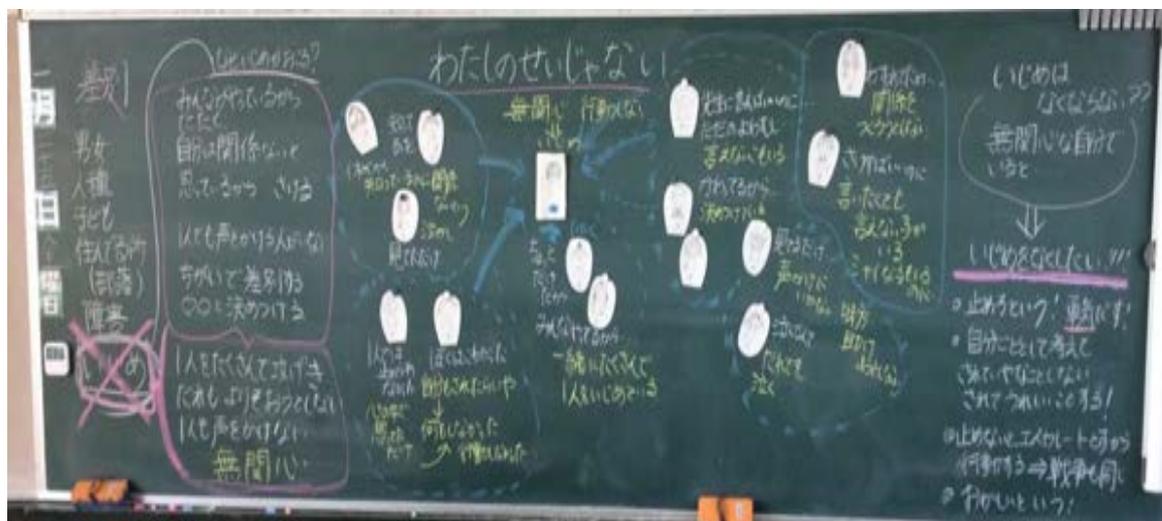


授業の様子

<指導にあたって>

「いじめや差別はいけないことだ。」と分かっているにもかかわらず、いざ身近なところで人権にかかわる問題に接したとき、周囲の雰囲気や多数の意見、人間関係に流され、傍観的な立場をとったり、無関心を装ったり、問題から目を背けようとしたりすることも少なくはない。そうした自分の心の弱さにも向き合いつつ、誰に対しても公平、公正であるためにはどうすればよいのか考えたり、周囲に助けを求めたりすることに躊躇しないなどの態度を身につけたりし、社会的な問題についても自覚を深めていくことができるよう授業を行った。

<板書の様子>

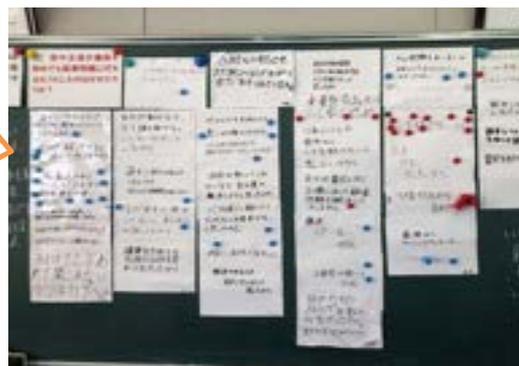


ホワイトボードとマグネットを活用した対話づくり(道徳)

道徳科の対話の場面において、感染リスクを減らすため、ホワイトボード(個人用)とマグネット(青・赤)を活用し、対話を深めた。ホワイトボードには個々の意見、青マグネットは共感、赤マグネットは疑問のサインとし、交流した。

工夫したポイント

- 感染症対策として個人のホワイトボード、マーカー、マグネットを使用。
- 密にならないように、列ごとにホワイトボードを貼る、マグネットを置く。
- 前を向いたままでも、ホワイトボードをもとに対話ができる。



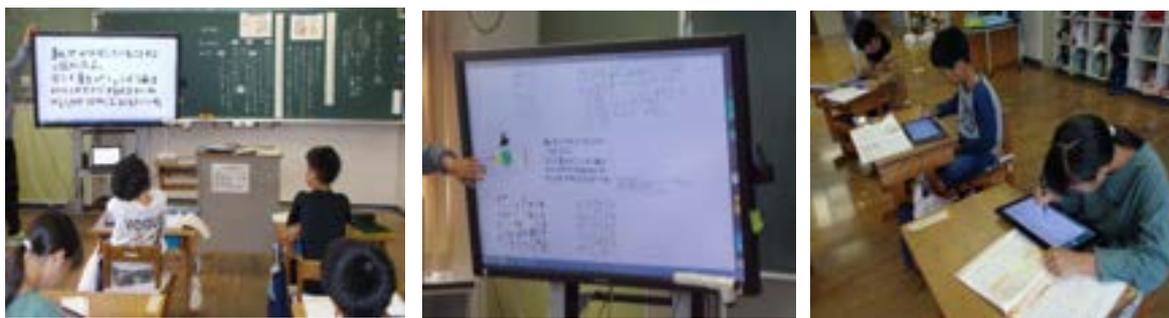
↑ホワイトボードとマグネットを活用した板書

タブレットを活用した考えを深める授業づくり(道徳)

研修テーマは「対話を通して自己を見つめ、考えを深める授業づくり」としている。中心発問で考えを深めさせた後、一人一人が『ぼく』になってしょうたに手紙を書く活動に取り組んだ。児童が一人ずつタブレットで手紙を書いて、それを電子黒板に写し、意見を交流した。

同じ考えや視点の違う内容に注目させることで、多様な意見や考え方に気づき、さらに考えを深めることができた。

教材名「友のしょうぞう画」 内容項目 友情・信頼 B-(10)



↑タブレットを活用した道徳科における対話の工夫

※子どもの書いた考えを提示する際、文字の丁寧さや誤字・脱字等により、からかい等が生じないような学級づくりや、発表前に個別指導をするなど、教員による配慮が必要である。

2 「学校再開後」の対応

(3) 学校園の生活及び行事の実施

- | | | |
|---------------|-----------------|---------|
| ア 兵庫型「体験教育」 | イ 儀式的行事 | ウ 文化的行事 |
| エ 健康安全・体育的行事 | オ 旅行・宿泊的行事（ア除く） | |
| カ 夏季休業日短縮への対応 | キ その他 | |



兵庫県マスコットはばタン

外部講師の活用(環境体験学習)

ほとんどの行事が中止や縮小となる中で、感染状況の落ち着いた時に、「メダカのコタロー」劇団による自然環境学校を実施することができた。本当は全校生参加の予定だったが、密を避けるため低学年だけで実施した。

今年は学校の畑にイノシシの侵入が相次ぎ、子ども達の育てた野菜も被害を受けた。しかし、野生鳥獣が増えている背景を学習し、「命」について学んだ子ども達は、共生について考えたり、命をいただく「食」について考え直したりすることができた。小学校3年生は体験学習と共に理解を深めるよい機会となった。

また、後日、学習の様子がテレビ放映されたことにより、体験や学びを保護者と共有することができた。参観の機会が少なかった今年度、貴重な取組と発信ができた。



↑ ジビエマンに協力し、
教員も子どもも全員がヒーローに！

森林浴や自然の美しさを感じられた活動(環境体験)

宍粟が森林王国であることから、校区にある東山の森林セラピーコースで、「木育教室」を行った。爽やかな秋晴れの下、セラピーガイドの方から、樹木、野草、キノコ等の説明を聞き、森林セラピーを体験した。生徒は、森林浴のすがすがしさや自然の美しさを感じることができた。登山時はマスクを着用したが、途中、マスクを外して深呼吸をし、「フィトンチッド」をたくさん吸い込んで、身も心もリフレッシュした。また、寝転がり空を仰いだり、自分たちの暮らす波賀の里を見下ろしたり、こだまが返ってくるのを楽しんだりした。コロナ禍の不安な状況にありながら、それを忘れさせてくれる爽やかなひと時の体験だった。



←寝転がり、風を感じ、
耳を澄ませ空を仰いでいる様子



←秋の木漏れ日を感じている様子

校区内での体験活動(自然学校)

新型コロナウイルス感染症の影響の為、今年、自然学校は泊を伴わない日帰りの実施となった。小学校では、私たちのふるさとの『安乎の海』に着目し、地元のホテル及び企業の協力で、日頃体験できないマリンスポーツ(パラセイリング、バナナボート、パドルボート等)の非日常的な体験をさせてもらうことができた。私たちの住むふるさとの魅力を再発見するとともに、感動的な体験ができた自然学校となった。事後学習として、ホテルのCMづくりに取り組んだ。



パラセイリングで空から
安乎の海を一望



バナナボートに挑戦!

「国立淡路青少年交流の家」での取組(自然学校)

期間を2泊3日に短縮し、国立淡路青少交流の家で実施した。バスは密を避けるため、2倍の台数を確保し、宿舎も宿泊を取りやめる団体が多かったため、2倍のスペースを確保することができた。

バイキング形式を配膳形式にし、全員窓側を向いての食事としたが、例年ならあまり気にすることのない外の景色を楽しんで食べることができた。

午後からはカッター訓練を実施したが、前日まで荒れていた海も穏やかで全員大海原を満喫して無事生還することができた。アドベンチャーラリーや瓦工作づくり、キャンドルのつどいなど様々なプログラムに子ども達は満足であり、中身の濃い2泊3日であった。

全員窓側を向いての食事 景色は最高! ↓



↓マスク着用のカッターも楽しく



感染対策を講じた民宿の利用（自然学校）

今年度は、実施期間を4泊5日から2泊3日に短縮して自然学校を実施した。宿泊した民宿では、可能な限り密を避けるため、一部屋の定数の半分の人数で部屋を割り当てた。

食事では、対面にならぬよう座席を配慮したり、風呂では、使用後に消毒を行ったりと、民宿の方にお世話になりながら徹底した感染対策のもと、2泊3日を過ごすことができた。

実施期間を短縮したことで、活動を精選して実施することとなったが、竹野スノーケルセンターでの磯観察や円山川公苑でのカヌー・カヤック体験等、丹波篠山では経験することのできない体験ができ、充実した活動を行うことができた。



↑ 竹野スノーケルセンター 磯観察

泊を伴わない自然学校の実施（自然学校）

新型コロナウイルス感染症対策として、泊を伴わない3日間の開催とした。

第1日目は、校内にて、開校式・ネイチャーゲーム・勾玉作りを実施した。密を避けるため、活動班の編成を7人班から5人班に変更した。また活動の際には、十分な間隔を保って活動させた。

第2日目は、当初から予定していた鉢伏高原にて活動した。貸し切りバスを通常の4台から6台へ増やし、高原へ向かった。現地での活動（ツリーイング・焼き板作り）についてもマスクの着用、アルコール消毒を励行したが、特に共用物については入念に消毒をした。

第3日目は、宍粟市の施設、音水湖でカヌー体験を、フォレストステーション波賀では、ネイチャーゲームに挑戦した。3日間のプログラムであったが、ゆとりをもち充実した体験活動を実施することができた。



↑ ツリーイングの様子

フォレストアドベンチャーでの体験(自然学校)

今年度は、宿泊なしの自然学校を実施した。朝来市にある「フォレストアドベンチャー」に出かけ、ZIPなどを楽しんだ。高さ10mからの「ターザンロープ」は、足がすくんでしまう児童もいたが、「大丈夫だよ。」と友だちの励ましがあリチャレンジできた児童もおり、協力や仲間の大切さに気づかされる機会にもなった。また、体験前には、自分でにぎってきた「おむすび」を食べる活動も行った。飯ごう炊飯の代わりとして取り組んだ活動であったが、米を炊き、どんな具材や形にするかなどの工夫をして、意欲的に取り組んだ。

様々な「制限」のあった自然学校ではあったが、児童にとっては最高の思い出となる取組となった。感染対策として間隔をあけての活動内容・場所を事前に精選し、手洗いと消毒を徹底しながら行った。

↓フォレストアドベンチャーにてツリー体験



感染予防策に努めながらの実施(自然学校)

今年度は、2泊3日に短縮し11月に実施した。マスク着用の活動や手洗い・手指消毒を徹底した。また、ジェルタイプのアルコール消毒液を持たせた。

朝夕検温をし、児童の健康状態に留意した。食事は対面ではなく同一方向に座り、入浴は少人数とし、就寝時は、十分に間隔をとった。児童が触れた箇所は、必ずアルコール消毒を行った。

プログラムも接触の少ないゲームへ変更し、11月という時期であったがキャンドルサービスではなく、キャンプファイヤーを実施した。野外炊事はゴム手袋で調理し、間隔をとって食事をした。感染予防策に努めながら、計画通りに終わることができた。



←マスクをしてキャンプファイヤー

接触の少ないゲーム →



県立南但馬自然学校での充実した取組（自然学校）

今年度は、県立南但馬自然学校を利用し、期間を2泊3日に短縮して自然学校を実施した。例年、生活棟を3棟使用するところを6棟に増やし、1部屋に生活する児童数を半数にし、密接を避けた。

活動においても全体を二班に分けて、隠れ家づくりと与布土川散策ゲームラリーに取り組んだ。隠れ家づくりでは、出前授業で学んだロープワークを生かし、滑り台やブランコなどの遊具を組み立て、実際に遊んで楽しんだ。広々とした空間での活動であったため、密を避けるだけでなく、危険も回避された。ゲームラリーでは、時間をかけて各ポイントを回り、それぞれのポイントでは各班で協力してゲームクリアを目指して取り組んだ。

期間は短縮されたが、他校の児童との交流が深まり、例年同様充実した取組となった。



↑ 隠れ家づくり



与布土川散策→

「西はりま天文台」を利用した泊なし2日間自然学校（自然学校）

今年度は「西はりま天文台」で泊なし2日間の自然学校を実施した。活動内容は主に、あそび場づくりと野外炊飯であった。

野外炊飯では、一斗缶で作ったかまどを人数分(19)用意して、一人一人がかまどの火を扱い調理に関わった。自分用のかまどに焚き付けやマキの準備をして着火するところから、ごはんやカレーの仕上がりまで、それぞれが責任を持った。戸惑いや失敗もあったが、それを認め合う活動となった。



↑ 自分のかまどでご飯を炊く

プログラムを精選、工夫して実施（自然学校）

今年度は、2泊3日に短縮して実施した。香住区の小規模校5校の連合自然学校であり学校交流を大事にしながらも消毒、換気等感染対策を徹底して行った。

従来の宿泊施設が改修工事で使用できず、日数も少ないなか、プログラムを精選、工夫して行

った。とりわけ、標高1074.4mの蘇武岳チャレンジ登山が、子ども達の心に深く刻まれた。励まし合いながら頂上を目指し登り切った達成感や友だちの温かさを感じられた。また、秋晴れの下、ふるさと香美の集落、スキー場、川、そして、日本海まで展望でき、自然の雄大さを堪能することができた。貴重な体験、充実した自然学校となった。



ヤッホー！

ファイトー！

蘇武岳チャレンジ登山の様子



工夫により、充実した取組となった3日間（自然学校）

今年度は、宿泊なし3日間の自然学校を実施した。初日は香美町香住区で香住高校の生徒に講師を依頼し、磯観察やサバ缶詰作りの海体験と2日目からは地元「西宮市立山東自然の家」での山体験を行った。火起こし、飯ごう炊飯、キャンドルサービス等マスク着用、消毒を欠かさず感染対策を徹底した。最終日は、市内名所の竹田城跡の登山を行い、お互い声を掛け合い、班のメンバー同士の絆が深まった。そして、最後に「アマゴづかみ」を行った。

感染予防の面から、児童は一人で一匹のアマゴを炭火で焼き、残すことなく食べきった。後片付けでは、早く終わった者が手伝うなど、体験を通して心の成長も感じられる充実した取組となった。



←竹田城跡への登山
道中も班の友達と楽しんだ。

アマゴつかみ→
勢いのあるアマゴの泳ぎに大苦戦。自分で串に刺して調理していただいた。



一人用テントを使用（自然学校）

1泊2日で自然学校を実施

- 宿泊施設での3密（密閉・密集・密接）を避けるために、一人用テントを使用した。
- 一人用テントを使用することにより、新型コロナウイルス感染症に関する不安をある程度払拭することができた。
- 例年より期間が短い自然学校だったが、一人用テントを使用することで、自然を身近に感じ、野外活動の楽しさを体験させることができた。



↑1人用テントの設営・宿泊

高御座山登山と加古川市立少年自然の家での活動（自然学校）

自然学校当日は、地元の名所の高御座登山と加古川市立少年自然の家での飯ごう炊さん（カレー作り）を行った。

また、自然学校の事後体験活動として、ピザ作りとテント設営体験（防災教育の一環）も行った。国立淡路青少年交流の家のピザ作り出前授業では、オリジナルのピザを手作りし、一斗缶を重ねた特製窯で焼いた。

また、県立南但馬自然学校から一人用テントを借りて、一人で一つのテントを張る体験をした。強風のため体育館でのテント設営となったが、子ども達は、テント設営の体験とともに、テントの中でのマイテント生活も楽しめたようで、終始笑顔があふれる体験となった。



←手作りピザを特製窯で焼きました

一人用テント設営の様子
→



甲山での多様な体験活動（自然学校）

宿泊はせず日帰りの自然学校を実施した。西宮市内にある甲山に登り、甲山森林公園の散策や川遊び、秘密基地づくり等、多様な体験活動を行った。近くにある山だが、普段訪れる機会が少なく、児童にとって、自然と触れ合うことができる良い機会となった。

また、甲山キャンプ場でNPO法人こども環境活動支援協会の方々に指導を仰ぎ、火起こし体験や焼き芋作り等を行った。初めは戸惑っている児童も見受けられたが、徐々に慣れ、最後にはみんなで焼き芋をおいしく食べることができた。1日の活動を通して、生き生きと満足した表情の児童が多く見受けられた。宿泊は、できなかったが充実した体験活動ができたと考えている。



防災についての学び（自然学校）

コロナ禍に実施された令和2年度の自然学校。

例年とは違った取組として、防災について学びを深めた。災害用トイレや段ボールパーテーションの組み立て、新型コロナウイルス感染症に対応した避難所での区割りなど実際の活動を通して、防災意識を高めることができた。食事面においても、レトルト食品を食べ、本番同様の活動を体験することができた。

災害時の行動や避難所での生活を学ぶにあたって、播磨町危機管理グループの協力を得て、地域と一体となった意義深い自然学校となった。



↑協力して段ボールパーテーションを組み立てる

子ども達の実情に応じた体験活動（自然学校）

令和2年度の自然学校は市の方針で泊なし2日間の実施となった。例年とは違う自然学校となったが、各学校がコロナ禍で体験できる活動を考え全校で実施することができた。内容としては、ロープワークや隠れ家づくり等の出前講座を校内で実施したり、カヌーや焼杉等の体験活動プログラムを校外で実施したりと、各校の子ども達の実情に応じた活動を実施した。例年であれば宿泊活動を通して自主性の育成や絆づくりをさらに目指すところであるが、感染拡大防止の観点から実施できなかったことが残念である。



↑自然学校でのカヌー体験

従来の実施に近づく工夫（自然学校）

今年度は、従来丹波で実施してきた自然学校の内容に近づくよう工夫して5日間の日程で、「自然体験活動」を行った。

不登校傾向の児童も含め、日頃体験できない活動に積極的に参加し、楽しむことができた。

藍染で作ったTシャツは、とても気に入っていて、活動が終わってからも着用している児童が多かった。キャンプファイヤーは、近隣住民のご理解を得て、愛護の保護者等の見守り協力も得て運動場で行った。スタンプやゲームを行い、思い出に残る夜になった。取組内容は、後日学習発表会等で保護者にも発信した。



↑藍染



↑キャンプファイヤー

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
プログラム	自然散策	藍染 焼き板 (講師を招聘)	陶芸 (講師を招聘)	海洋体験 (県立海洋体育館)	火起こし (講師を招聘) キャンプファイヤー

ねらいに沿った体験活動ができる施設での取組（自然学校）

今年は、宿泊無しの自然学校を実施した。各校が、ねらいに沿った体験活動ができる施設で行い、1日ではあるものの非日常体験活動を行った。

「神戸市立自然の家」では、カヌー体験を行った。ほとんどの児童がカヌーに乗ることは初めてであったが、仲間と協力して、体験活動を行った。

また、「尼崎市立美方高原自然の家」の職員のサポートもあり、事前事後活動を含めた体験活動をより充実させることができた。

感染対策として、バスの増便を行った。例年、1学級につき1台としているところ、今年度は1学級につき2台までとした。例年とは、異なる自然学校ではあったものの、内容は充実した自然学校となった。



↑カヌーに乗って、湖の奥を目指そう！

子ども達が本気になって協力しなければできない活動（自然学校）

日程が6月終わりから10月に変わり、場所も南あわじ市から養父市へと変えた。2泊3日となったため、プログラムも大幅に変更した。

そこで、今年度は4校の子ども達が本気になって協力しなければできないようなプログラムがたくさん組



↑班員で協力して火おこしをしているところ

まれた。その中の一つが、写真にある火おこしである。穴をくりぬいた板に棒を通し、弓形のひもと棒で摩擦が起こるくらい回転させる。4人が知恵と力を合わせなければ、火は点かないが、どの班も見事に火をおこすことに成功した。それ以外にも、段ボールハウスづくりなど感染症対策をしながら、ダイナミックな体験を行った。

1日だけの「トライやる・デイ」(トライやる・ウィーク)

今年度は、1日だけの「トライやる・デイ」を実施した。地域の子ども園に出向いて芋掘り等の手伝いをしたグループ、小学校で活動したグループ、播磨中央公園で清掃活動をしたグループなど、新たな取組を行った。午前中は校内で「飛び出し坊やパネル」を作成した。午後は地域でクリーン活動を行いながら、危険箇所をチェックし、作成した飛び出し坊やパネルを設置する場所を調べた。例年のような企業や店での職業体験は叶わなかったが、自分達が暮らす地域に密着した活動を行うことで、クリーン活動中には地域の方からねぎらいの声をかけてもらい、生徒にとって充実した取組となった。

地域でのクリーン活動→



←飛び出し坊や作成中

里山整備活動(トライやる・ウィーク)

2年生「トライやる・ウィーク」として里山整備活動を実施した。兵庫県丹波農林振興事務所の方から、土砂災害の防止や水源の涵養、自然から受ける恩恵、人と動物との共生など「里山整備の意義」について講話を受けた。

その後、森林組合市島支所の方の指導を受けながら、くい打ちや丸太運び等の実地作業の活動を行った。

20名の自治振興会の方々には、移動の際の交通見守りとして協力いただくなど、地域の良さを感じた貴重な体験ができた。



←開始前の注意事項を熱心に聞く。

里山整備体験→
を行う。



事業所へペーパーウェイトの贈呈（「トライやる」アクション）

今年、11月にPTA主催の資源回収に参加する「トライやる」アクションを行った。また、事業所での活動ができなくなったため、学校で各事業所の方々に思いを込めて、ペーパーウェイトを作成した。代表の生徒が各事業所を訪問し作品と共に日頃の感謝を伝えた。子ども達が角材から大きさを整え、丁寧に磨き作品を仕上げた。「感謝」の横断幕を掲げた写真入りメッセージと共に、事業所の方々に手渡した。

例年通りの実施ができなかったことは、生徒達にとって、とても残念な出来事ではあったが、作品を通して、事業所の方々との絆はより強くなったように思われる。作品は事業所の方々にも大変好評で喜ばれ、受付などで活用されている。



←ペーパーウェイト



←事業所訪問の様子

中学校区の通学路を中心とした清掃活動（トライやる・ウィーク）

6月実施予定のトライやる・ウィークを11月に延期したが、事業所の確保が難しく、中学校区の通学路を中心に清掃活動を3日間に縮小して実施した。

1日目は学校周辺、2日目からは4方向に分かれて通学路の草刈りやゴミ拾いを実施

した。交通安全の意味合いもあり、全員オレンジの帽子をかぶり、1列に並んでの活動になった。一人一人が意識を持って取り組み、予想以上の雑草やゴミを回収することができた。また、一人一人が地域社会の一員であることを自覚して活動を行った。初めての試みだったが、事故なく無事に終わることができた。



↑ 通学路での清掃活動

学校内でのキャリア教育活動（トライやる・ウィーク）

学校内でキャリア教育活動を行った。

調理専門学校や消防署、上郡高校など7事業所に協力いただき、校内で密にならないよう少人数で体験学習を実施した。消火訓練体験や測量機器・ドローンを使った土木実習、調理実習など、調理室や美術室、木工室など学校の施設を使って活動した。

体験活動の選択肢や時間は例年より限られたが、町内の事業所の協力により中身の濃い活動を行うことができた。

調理専門学校の講師を招いての調理実習 ↓



← 上郡高校による測定実習

寄せ植え鉢の事業所への贈呈（「トライやる」アクション）

本年度は例年通りの体験実施が困難になった。

そこで、地域の農園に協力を仰ぎ、トライやる・ウィークでお世話になる予定だった事業所へ贈る寄せ植え鉢を作製した。

寄せ植えの体験が初めての生徒たちも多かったが、農園の方に親切に教えていただき、全員完成することができた。持ち帰った寄せ植え鉢には生徒からのメッセージを書いたタグを差し、後日、各事業所へ贈呈した。



↑ 「寄せ植え」の様子

人との交流を生み出す活動（「トライやる」アクション）

コロナ禍の中でも人と人との交流を生み出そうと、1年生では一人一人の手紙をつけた風船を飛ばした。後日、各地域から心温まる返事が数多く寄せられ、人々の支えあいの大切さを学ぶ機会となった。

また、「トライやる」アクションでは、「感染が確認された方々、私たちの暮らしを守り支えてくれる方々が、『ただいま』『おかえり』と言いあえるまちでありますように」との趣旨の「シトラスリボンプロジェクト」に取り組んだ。そして、作成したリボンを、太子町役場や今までお世話になった事業所等に配り、暮らしやすい社会づくりについて発信した。



↑ 願いを込めて風船を飛ばす様子



↑ シトラスリボンプロジェクト

収納ボックス・フラワースタンドの贈呈（「トライやる」アクション）

今年は、地域貢献活動として毎年トライやる・ウィークでお世話になっている方々へ「何かお礼をしよう」と、地域の福祉施設や幼稚園、保育園に収納ボックスとフラワースタンドを自分たちの力で作成し、プレゼントすることにした。

いつものトライやる・ウィークがなくなったのはとても残念だったが、友達と協力して作ることが楽しく、地域の方に自分達で作ったものを喜んでくれたことがとても良かった。幼稚園児からのお礼のお手紙をもらうことができ、生徒達は本当に喜んでいた。

地域の一員であることを感じる事ができた体験となった。



←作品作成中



↑ 園児からのお礼の手紙

←完成した作品

地域での清掃ボランティア活動（トライやる・ウィーク）

事業所での活動を12月に延期したが、それも中止となり、地域でボランティア活動を1日実施することとなった。

感染対策として、密を避け数班に分かれて清掃を行った。

町内の観光スポットとなっている辻川山公園では、妖怪像の蜘蛛の巣取りや公園内の清掃を行った。さらに郷土の偉人である

柳田國男生家や大庄屋三木家住宅の掃除、研修センター周辺の溝掃除や草ひきに汗を流した。指導いただいたボランティアの方や地域の方々とコミュニケーションを取りながら、地域の観光地をきれいにすることで、社会に貢献する喜びを味わう活動となった。



←柳田國男生家を掃除しているところ

妖怪の像の蜘蛛の巣取り→



←地域の溝掃除

地域と連携した活動（トライやる・ウィーク）

今年度、本市においては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から事業所体験は実施せず、各校で1日、地域と連携したトライやる・ウィークを実施した。

観光協会と連携した海岸清掃や、地域のコミュニティと連携した乳幼児の夏祭りの企画運営、校区の河川清掃とともにミズアオイの保護活動等、各校の実情にあわせ、創意工夫した活動となった。

感染予防策を講じる中での取組ではあったが、丁寧な打ち合わせや、活動のねらいを明確にすることで、地域のよさや自分自身を見つめ直す機会となった。

短期間ではあったが、充実感や達成感が味わえる活動となった。



←海岸清掃



河川清掃→

地域人材等を講師に招聘して実施（トライやる・ウィーク）

今年度の「トライやる・ウィーク」は期間を1日に短縮して実施した。

例年の事業所での職業体験活動を中止し、地域人材等を講師に招聘し、学校での体験活動や、学校や校区内の清掃活動等を行った。

体験活動を実施した学校では、箏

（写真）、落語、俳句、韓国語等の文化芸術体験や革小物、キャンドル、万華鏡の製作などの複数の講座を準備し、活動した。それぞれ講師から指導を受けて、校内で感染症対策を講じながら充実した活動を行うことができた。

また、清掃活動等を行った学校では、地域の塗装業の方に指導を受け、学校の正門のペンキ塗り等の営繕活動や、PTA、自治会と学校周辺、地域公園の落ち葉の清掃や除草作業を行った。

例年とは違った新たな経験や地域との関わりを感じる充実した取組となった。



↑ 箏の体験



正門のペンキ塗り→

トライやる・デイの実施（トライやる・ウィーク）

○ 今年度は、5日から1日に期間を短縮し実施した。

○ 地域を学ぶ目的で「かわい歴史ウォーク」を実施した。

○ 好古館の学芸員のアドバイスをもとに4つのルートを設定した。

○ 当日は、学芸員とともに散策し、地域の歴史について理解を深めた。

○ 生徒たちは、自分たちの住んでいる街にこんな歴史があることを知って、ふるさとを見直すきっかけとなり、満足していた。



校区の清掃活動やふるさと里山整備（トライやる・ウィーク）

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、町立中学校はトライやる・ウィークを1日に短縮して実施した。日数は短くなったが、生徒が主体的に計画、実行し、地域の方とのつながりを深めながら校区の清掃活動やふるさと里山整備を行った。生徒達は、改めて地域の中で育つことの大切さを感じることができ、貴重な時間となった。今回の活動では、生徒がチラシの配布やポスターの設置などを積極的に行い、町立3中学校で計165名の保護者・地域住民が参加し、生徒達とコミュニケーションをとりながら、コロナ禍での新たな取組として有意義であった。



↑里山整備



↑地域のクリーンアップ

地域とのつながりを実感できた体験活動（トライやる・ウィーク）

今年は、トライやる・ウィークの事業所訪問活動ではなく、感染予防に努めながら屋外での体験活動を実施した。

地域区長会をはじめ、町づくり協議会、商店会の方々に指導ボランティアとして参加いただきながら体験活動を行った。

特に、「トライやる」アクションで参加していた地元商店街の店主の方々の賛同を受け、営業時間帯にもかかわらず生徒の活動場面に足を運んでくださり、長年培ってきた地域と学校のつながりを実感することができた。

新型コロナウイルス感染対策により従来のトライやるとは違った活動になったが、生徒が居住地において活動することで、地域の方々との交流につなげることができた。



↑屋外での奉仕体験活動

寄せ植えて地域に関わる（トライやる・ウィーク）

今年度は、実施期間を短縮し1日で実施した。「地域」と関わる活動として、班ごとに寄せ植えをつくり、お世話になる予定だった事業所へ届けた。これまでお世話になったお礼と来年度の受入れを依頼するメッセージを添えた。多くの事業所から感謝の気持ちが寄せられた。また、鉢植えをみた地域の方からは「コロナ禍の中、とても癒されました。」とメールも頂いた。生徒達は、感染予防策を講じながら緊張しながらも、丁寧なあいさつ、気持ちのこもった言葉を伝えることができ、地域との結び付きを大切にしたいと感じた活動になった。

生徒が作った寄せ植え↓



地域清掃や雑巾を作成・寄付する活動（トライやる・ウィーク）

今年のトライやる・ウィークは、例年のような1週間の市内の事業所に訪問する形式はできず、地域清掃や雑巾を作成して施設等に寄付するボランティア活動に置き換えて実施した。

例年との違いがあり、残念に思う生徒もいたが、清掃活動中に通行する地域の方から「ありがとう」「きれいになっているね」等の感謝の声をいただき、生徒もやりがいを感じる事ができた。また、雑巾を作成し施設等に寄付するときに、生徒それぞれが学校紹介カードを作成して雑巾と一緒に持っていった。福祉施設からは感謝の手紙を、また、幼稚園からは幼児手作りのメッセージカードをいただき生徒は達成感を感じることができた。例年と違う形であったが、心が育つ充実した体験となった。



地域清掃
←の様子

11月に変更して、3日間実施（トライやる・ウィーク）

今年度のトライやる・ウィークは時期を6月から11月に変更し、3日間実施した。

実施に当たり、ガイドラインを作成し、事業所・保護者・学校(職員)に周知した。また、健康観察カードの点検を事業所にお願ひし、除菌グッズを持って行き、感染予防を心がけた。

そして、学校では実施前後の2週間は特に生徒の健康状態の把握に努めた。今年度は、受け入れができない事業所もあったが、保護者や推進委員会の協力で、新規に登録の事業所があったり、受け入れ人数を増やしていただいたりし、地域の皆さんの協力のもと、無事に活動を終えることができた。生徒は貴重な体験ができ、多くの学びを得ることができた。



↑フェイスガードを用いてのプールの監視

ペッパーを活用して小学生に新型コロナウイルス感染症対策についてのプレゼンテーション ↓



駅前イルミネーションの設置（トライやる・ウィーク）

今年のトライやる・ウィークは、1日で実施し、毎年12月から2月末にかけて駅前に飾られるイルミネーションの一部分を2班に分かれて設置した。これは川西市中心市街地イルミネーション実行委員会から提案を受け実現したものである。



↑植え込みに入っている取り付け作業



生徒は、実行委員会の方々の指導を受け、駅周辺の植木一面にLEDライトを結束ワイヤーで固定していく作業を行った。ライトの向きを考えながら、3人一組となって協力しながら設置することができた。いつもは眺めて楽しんでいる立場であるが、自分達が設置したイルミネーションで、多くの地域の方に喜んでもらえるという地域貢献の体験ができたことは、生徒にとって貴重な経験となった。

自分達の街がきれいになっていく活動（トライやる・ウィーク）

今年度のトライやる・ウィークは規模を縮小し、1日のみの実施となった。不特定多数の人との接触を避けるためにも、例年のように受け入れ先に活動をお願いするのは難しいため、今年は校区内の公園清掃を行った。め、学校へ集合の後はクラス毎に担当する公園へ散らばった。例年のような活動ができない事を残念に思っていた生徒たちだったが、自分たちの街がきれいになり、日頃から清掃を行ってくれている地域の方々への感謝の気持ちが芽生えていた。今年は例年と違った形で、生徒たちの成長を見ることができたトライやる・ウィークとなった。



↑清掃活動の様子

園庭での入園式（幼稚園等）

2か月の休園期間を経て、6月2日行った入園式は、初めて屋外(園庭)で開催した。例年は園児席と保護者席は別であるが、家族で座ってもらい、隣の家族とは1m以上離して配置した。

話は短く、分かりやすくなるよう工夫した。保護者向けの話も短縮するため、配布物を開始前に渡し、予め読んでもらい、質問は終了後に受けた。記念写真撮影は、保護者はマスクを着用したまま並んでもらい、シャッターを切る瞬間のみ外してもらった。時間短縮の短い式であったため、終了後園庭開放し、自由に遊んでもらう時間をつくった。幼稚園に親しみをもて、スムーズなスタートが切れた。



↑家族と家族は十分なスペースをとって

新入生と保護者の出席による入学式（小・中学校）

入学式は、在校生の参加を控え、新入生とその保護者で挙行された。

密を避けるため、受付も運動場で実施し、ゆったりとしたなかで、入学式を迎えた。

新しい制服を着た新入生の顔は終始にこやかだった。

また、来賓も臨席の無い中ではあったが、メッセージを読み上げるとあたたかな空気に包まれた。

コロナ禍ではあるが、今しかできない入学式となったのはいままでのない。



↑コロナ禍での入学式の様子

感染症対策を講じた入学式の実施（小・中学校）

入学式は、新入児12名、保護者12名、在校生代表1名、職員6名のみで行った。在校生は出席できなかったが、児童会長が代表で歓迎した。校歌を歌えないので、メロディーを演奏し、出席者全員でそれを聞いた。



↑会場でも教室でもソーシャルディスタンス

教室に戻ると、保護者はソーシャルディスタンスを保ち、廊下から担任の話聞いた。このスタイルは学校再開後の授業参観でも続いた。

記念撮影は黙って行い、撮影の瞬間のみマスクを外した。例年と違うことで、保護者や職員が寂しい想いをしたのとは裏腹に、子ども達はマスク姿でもとびきりの笑顔、張り切った返事だったことが印象的だった。そして、2ヶ月の休業中も6月の再開後も明るく、前向きに過ごすことができた。

Zoom 配信による始業式（小・中学校）

3学期の始業式をコロナ対策、寒さ対策のため、Zoom 配信による始業式とした。

大雪警報発令後の寒さと、児童を1か所に集める感染リスクを避けるため、各教室でZoom視聴の形で始業式を行った。

放送だけではなく映像もあることで、低学年も集中して話を聞くことができた。また、相互に返事や礼の様子が確認できるので、全校生がよい緊張感を保ちながら参加をすることができた。



Zoom 配信による
始業式の様子ー

Zoom を活用した始業式・終業式 (小・中学校)

全校生が一堂に会しての式等を行えないため、Zoom と大型モニターを活用して始業式や終業式を行っている。放送だけとは違い、画面を通してではあるが話している人物の表情が見られることの意味は大きい。生徒らの話を聞く姿勢は、話し手の真剣な表情を受け取り、背筋を伸ばしていた。

また、Zoom を活用することによって、なぜ通常の始業式ではないのか、どうしてこのような方法で行っているのか、生徒に考えさせることにつながり、より一層感染症対策への意識が向上するといった効果もあった。



↑別室でモニターを介して、全校生徒へ話をしている学校長



↑教室にて、大型モニターに映る学校長の顔を見ながら、話を聞いている生徒

感染症対策を講じた入学式 (小・中学校)

4月8日は、小学校・義務教育学校の入学式が予定されていた。前日、会場となる体育館では、座席の間隔を十分に空けた座席配置や出入り口に消毒液を設置するなどの感染症対策を講じた式の準備を整えていた。しかし、7日より緊急事態



↑屋外でも座席間隔を十分に空けた入学式

宣言対象区域に指定されたことを踏まえ、一層の感染症対策として、急遽、全ての学校の入学式を屋外で行うこととした。幸い、当日は、温かな春の日差しに恵まれ、屋外で入学式を無事に行うことができた。短い時間であったが、新しい友だちや教員と出会い、1年生としての学校生活が始まった。

運動場での入学式（小・中学校）

本年度は感染症対策のため、例年体育館で行っていた入学式を運動場で実施することにした。

入学式当日、新入生が座る椅子を縦横1.5m離して運動場に並べ、椅子の上に教科書などの配布物をセッティングし、クラス分けの名簿や受付のコーナーも、運動場の一角につくる。受付を終えた保護者から自分の子どもを、椅子まで誘導し、入学式がスタートした。保護者と教職員は、子ども達から少し離れた位置で新1年生の新たな門出を祝福する。

6年生のお兄さん、お姉さんといっしょに入場することや来賓の皆さまからのあたたかいメッセージなどはないものの、当日は天候にも恵まれ、三密を避けながら開放感のある気持ちのいい式を行うことができた。



↑入学式当日朝の様子

卒業生と在校生のスクリーンを使った交流（小・中学校）

式場内は、ソーシャルディスタンスを保って座席を配置した。

例年、「卒業生と在校生の掛け合い」をしている。

しかし、新型コロナウイルス感染予防のため、在校生の出席が無い中での卒業式となった。そこで、事前に在校生の言葉を収録し、当日はスクリーンで映し出した。

その場での対面交流はできなかったが、在校生の生の声での呼びかけに応えることができ、思い出深い卒業式となった。校歌についても、事前収録した在校生と式場内の卒業生・教職員・保護者の歌声が一体となって式場内に響き、門出に花を添えることができた。



↑在校生の言葉をスクリーンに映し出す

運動場で実施した卒業式 (小・中学校)

令和元年度の卒業式については、感染症拡大防止の観点から換気の徹底、時間短縮、来賓の参列は遠慮してもらい実施した。

また、体育館で実施の場合は保護者の参列は各家庭1名に限定したため、体育館ではなく運動場で実施し、より多くの保護者が式に参加できるよう工夫をした学校もあった。

令和2年度の入学式についても、卒業式と同様の対策で実施したが、入学前ということで、連絡先が不確定な家庭もあり、実施状況の連絡が困難であった。



↑運動場での卒業式

1. 17集会 (小・中学校)

例年、全校集会を開いて実施している「1. 17集会」であるが、今年度は密を避けるためにも、導入された電子黒板を使って「ZOOM」上で行った。

開会后、阪神・淡路大震災の映像を流し、校長講話、黙祷、と続き、被災者(中学生)作文の朗読を行った。電子黒板に映し出された震災の映像の後ということもあり、聞いている生徒たちの目は真剣で、大きな集会の形はとれなかったものの、短時間で生徒の心に残る集会になったと思う。最後は生徒会長の「1.17宣言文」で締めくくり、閉会した。



↑ZOOMによる集会に参加

子ども夏祭り（幼稚園等）

毎年、園と保護者会で計画を立て、取り組んできた夏祭りであったが、今年度は園内でできる範囲で“おたのしみ”を工夫することとなった。

友だちとの間隔を空け、七夕の由来を聞いたり、お面やさん、くじ引きやさん、お菓子やさんなどの模擬店を楽しんだ。例年の

にぎやかさはなかったが、キラキラと目を輝かせて参加する子ども達の姿を見ることができ、教職員で喜び合った。

新型コロナウイルス感染症についての正しい知識を身に付け、子ども達の楽しみを全て排除するのではなく、できることを教職員で考えながら、体験活動を大切にしていきたい。



秋まつり（幼稚園等）

例年は7月に「夏祭り（七夕会）」として行っている行事であるが8月末までは園内行事ができないこともありPTAとの話し合いの結果9月に延期して行った。

コロナ禍で活動が制限されるが、少しでも『子ども達の心に残る楽しい経験を！』というPTAと教職員の思いから様々な工夫をした。①平日開催とし、保護者の参加は各家庭1人にし人数を減らす。②密を避けるため並ぶ場所、並んでいい人数を決める。また、時間を決め交代制にした。③飲食の模擬店は一切なし。④行事にかかる時間を短縮して行う。⑤各模擬店入室前に必ず消毒を行う。⑥検温しての登園、行事中のマスク着用は必須とする等。

子どものみの開催も考えたが、普段仕事で忙しくされている保護者が子どもと一緒に参加できる数少ない機会であり、子どもの笑顔を見ることができたことを喜んでいた。



規模を縮小しての運動会・音楽会の実施（幼稚園等）

規模縮小ではあったが、運動会、音楽会を実施した。

運動会では、持ち物の共有や肌の接触を避けるような内容を検討した。カラーガードは、常に適切な距離を保つ必要があり自分の持ち物であることが示しやすいので、カラーガードを取り入れた。運動会としても華やかであった。

音楽会では、例年鍵盤ハーモニカを行っていたが、ハンドベルに変更した。友だちの音色を聞きながら、心を一つにして行い美しい演奏となった。



←運動会でカラーガードを行っている様子

音楽会で →
ハンドベル演奏
を行っている様子



感染予防対策を講じた「音楽会」（幼稚園等）

当園遊戯室において、保護者の人数制限、消毒・検温・マスク着用の徹底、客席の間隔確保を行ったうえで音楽会を開催した。

練習時より、2WAY仕様のマウスガードを個々に配布し、ガード部分を鍵盤ハーモニカ演奏時は下向きにし、歌唱・合奏時は上向きにして使用した。

飛沫防止はもちろん、子ども達の口元を確認しながら指導できたので、例年と同レベルの発表ができた。また、教員もフェイスガードを使用することで、口の動きや表情等の指導が可能となった。



2WAY 仕様のマウスガードを使用し、個々の距離を十分確保。



園児のみの参加とした夕涼み会（幼稚園等）

例年は、保護者会主催で行っている夕涼み会を本年度は、感染予防のため、園児のみの参加で開催した。

年長児の遊びから発展したお祭りごっこが、年下の年齢の子どもたちへも広がり、屋台やゲームコーナー等ができ、看板や提灯も

子ども達のアイデアが活かされた手作り感いっぱい夕涼み会となった。お店番も子ども達で行い、ごっこ遊びが展開した。調理員が、かき氷を会場で作り、お祭り気分も盛り上がった。また、地元の傘踊り保存会の方に来ていただき、伝統文化に触れることができた。迫力ある踊りに、0歳児から5歳児までが集中して見ていた。園児主体の夕涼み会となった。



←魚釣りゲーム
↓たこ焼き屋さん



←伝統の傘踊り

「親子でキラッとなつまつり」（幼稚園等）

今年のなつまつりは、中止も考えたが、園児や保護者の強い要望等もあり、規模、開催時間を縮小して実施した。保護者の人数制限や、午前・午後の入替え制などの工夫も行った。

テーマを「親子でキラッとなつまつり」と題して、園児自らが主体的にアイデアを出し合うとともに、準備段階から積極的に参画した。「めざせ★ストライク」、「ポン・デ ◎わなげ」等ゲーム性の高いコーナーの人気が高かった。また、園児や教職員が「ウォーターショー」を楽しむ様子を事前に撮影し、遊戯室で映像を放映した。規模、時間、保護者数など、例年とは異なる内容の開催であったが、園児たちは満面の笑顔で満足そうにしていた。



←距離を保って
わなげゲームを
楽しんでいる様
子



フェイスシールドを装着してウォーターショー

2日間午前中に実施した「夕涼み会」(幼稚園等)

例年の夕涼み会は、地域の方も参加し夜に実施していた。園児が楽しみにしている保護者と一緒に行う行事のため、工夫しながら実施した。

3密を防ぐため、2日間に分け、午前中に実施した。また、お店では、並ぶ位置をラインで示すなどの工夫をした。

園児が楽しめる夕涼み会になるよう、内容は、保護者会、園児、教職員と一緒になって考えた。園児の手作りのおみこしがオープニングをかざった。いつもよりお店の数は少なかったが、親子がゆったりと話をしながら、家庭的な夕涼み会となった。園児、保護者、教職員がアイデアを出しながら、協力して取り組めたことがよかった。



←チケットでおみやげと交換している様子



さかな釣りをしている様子 →

青空音楽会(幼稚園等)

新園舎のテラスを舞台にして青空音楽会も楽しいのではないかと、教員間で意見を出し合い、戸外での音楽会を実施することになった。保護者には実施場所の急な変更のお知らせとなったが、ステージの準備やドキュメンテーションを見ていただくことで楽しんでもらえた。ステージは園児同士が十分な間隔がとれるようにひな壇を設置し、保護者席も演奏する園児との距離を十分にとり、かつ保護者同士の間隔も十分にとって設置した。当日は天気も良く、お日様の光がスポットライトになり、とても気持ちの良い音楽会となった。青空を見上げながらの演奏はまさに今年ならではの取組であったと思う。



↑ゆったりと一人一人の子ども達の姿や演奏を見ていただけた。

ミニコンサート (小・中学校)

全校での音楽会の実施が難しい中、小学校生活最後の音楽会で学習の成果を発表したい、という6年生児童と担任の強い願いのもと、ミニコンサートを企画した。マスクを着けたままの歌唱は、表情や口形が伝わりにくく、表現が難しい場面もあった。また、特別時間割を組んでいないため、休み時間も自主的に音楽室に通い合奏の練習を重ねた。



←本番さながらのプログラム



音楽室へ→
続く階段や廊下



6年生児童の演出によるミニコンサート →

ミニコンサートは、授業時間を割くことが無いよう、業間休みを利用して、お世話になった教員や希望する保護者にも披露する予定であったが、県内中学校の合唱コンクール等でのクラスター発生事案を受け、ミニコンサートの様子をビデオに収め、DVDを回覧する形で保護者に公開することとした。

当日は、音楽室や廊下を飾り付け、めぐりプログラムも作成し、雰囲気盛り上げた。観客役の管理職や用務員、スクールアシスタントが、6年生の入場を拍手で迎え、初めのあいさつ、曲紹介、演奏終わりのあいさつ、観客の送り出しまで、6年生自ら考え演出した。全校生も給食の時間に鑑賞し、コロナ禍でも工夫してできることがあるということを示すことができた。

東京混声合唱団の公演 (小・中学校)

- 学校側の対策として合唱団と児童との間にパーテーション11台を設置した。
- 合唱団側の対策としてマスクの着用で公演を実施。
- 3密を防ぐための距離の確保と非接触を心がけて公演を実施。



↑公演を聞いている様子

- コロナ禍ではあったが、本物に触れる体験は何ものにもかえがたい学びになった。

「ピアノデュオとの音楽共演会」(小・中学校)

本来は、学校オープンで、「ピアノデュオとの音楽共演会」を行い、保護者にも見てもらう予定だった。しかし、感染拡大防止の観点から、全体で行うのをやめ、各クラスの教室等からリモートでの開催とした。

当日演奏家の方に近くのホールから映像を送っていただき、共演した。子ども達は、最近流行した曲などのピアノ演奏を楽しみ、終盤にはピアノデュオによる伴奏で合唱も行った。遠く離れていても、十分に楽しめる、良い共演会となった。

また、この模様はケーブルテレビやYouTubeで公開し、保護者にも様子を見てもらうことができた。



↑ピアノデュオとの音楽共演の様子

町連合音楽会(小・中学校)

今年は、室内で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏を制限しながらの音楽授業となった。そのため町内の6年生が音楽を通じて交流しあう機会である連合音楽会は、リコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器を使わない、学級単位による合奏のみという形で実施した。

各校音楽担当は、選曲や楽器の構成などを工夫し、また練習においても密を生まないようにして行った。コロナ禍で制限が多い生活の中、学級の仲間とともに一生懸命練習してきた曲を披露しあい、お互いの頑張りを認め合うことができた。なお、演奏の様子はケーブルテレビを通じて町内に放送され、ウイルスに負けない児童の元気を発信でき、明るい話題となった。またそのことは、人数制限を設けて鑑賞できなかった方への配慮にもなった。



↑ 佐用町連合音楽祭

発表を合奏に限って実施した音楽発表会（小・中学校）

音楽発表会について、例年は合唱と合奏を披露しているが、今年度は学年ごとに1曲合奏のみとした。保護者については各家庭1名のみでの参加とし、その代わりにビデオ撮影を許可した。また、保護者は斜交いになるように床に座るようにし、距離をとるようにした。さらに学年ごとに保護者を全員入替した。入場の際に、体育館入り口では、保護者の体温測定を行った。

各学年の発表を合奏に限ったので、曲の完成度は高く、児童の表情も非常によかった。



↑音楽発表会のようす

「おん☆かつ」（小・中学校）

10月1日、加東市文化振興財団主催のプロの本格的な演奏を体験する「おん☆かつ」が行われた。毎年、4年生対象に行われている。

演奏者は、バイオリニスト早稲田桜子さんと姉で、ピアニストの真理さん。

新型コロナウイルス感染対策を徹底し、マスクの着用、手指消毒、座席間隔を空けたソーシャルディスタンス、エアコンを付けるが窓を開けての換気、講演時間の短縮等の中での開催となった。例年、楽器の体験コーナーも行っているが、今年は、体験は行わなかった。それでも、子ども達は、プロの奏でる音楽にうっとり聞き入り、楽しい時間を過ごした。



↑プロの演奏を楽しむ「おん☆かつ」

会場内の密集を避けて実施した学習発表会（小・中学校）

今年は、観覧者の人数を制限し発表する学年に合わせて会場内入替制とすることで、観覧者の座席間の距離をとり会場内が密集状態にならないよう配慮した。

授業公開の機会がとりにくい状況の中、普段の学習の一端を発表することを目的とし、授業中に録画した児童一人一人の音読の音声にあわせた劇を発表したり、合唱

の代わりに音楽に合わせた手話や、打楽器を中心としたリズムカルな合奏をしたりと、発表内容はこれまで以上に創意工夫をこらしたものとなり、事後アンケートでも好評だった。

また、観覧者の検温チェックを事前に行うことで観覧者の入替に伴う人の移動も、スムーズに行うことができた。



← 手話を
使った発表

映像の音読
に合わせた
劇 →



地域内全小学校による人権交流集会の実施（小・中学校）

地域内全小学校の6年生全員を対象とした人権交流集会を、Zoomを活用したオンラインで実施した。同和教育、人権尊重の理念に対する理解を深め、人権感覚を高めるとともに、児童自身が、自他の価値を尊重しようとする意欲や態度をはぐくみ、実践的な人権文化の創造に向けた気付きを学ぶ良い機会となった。

また、中学校生活への展望とその自覚を育むことができ、中学校入学への期待も高まった。

地域小学校の人権交
流会で発表



← 他校の発表の様
子をの画面に映す
(Zoom 活用)



ICT を活用した修学旅行報告会（小・中学校）

文化的行事として平素の学習活動の成果を発表した。具体的には、自他のよさを見つけるとともに、高学年へのあこがれや自己の向上意欲を高めるための機会として、Zoom を活用した修学旅行の報告会を行った。

6年教室から配信し、1～5年生がそれぞれの教室で視聴することで、密を避けながら報告を聞くことができた。これまでは、保護者、5年生に向けての報告会を行ってきたが、感染対策のため Zoom を活用したことで全校生への報告会とすることができた。全校生にわかるように工夫された6年生の発表は、他学年の児童に対して、最高学年へのあこがれや高学年に向けての見通しをもたせることにつながった。



↑ 6年生が報告会で提示した資料

リモート人権集会（小・中学校）

全校生が人権について考え、思いやりの心を育む人権集会を放送委員会の進行のもとリモートで実施した。

最初に、優しさや思いやりを持つことの大切さについて校長が講話を行った。続いて、代表児童による差別をなくする輪を広げよう」市民運動のポスター・標語・作文の紹介、教員による詩の朗読を行った。

人権作文では、各学年の代表児童が、身の回りの生活から問題に感じたことや体験したことを発表した。全校児童は、教室からモニター越しに作文発表等をしっかり聞くことができた。集会後に感想を書き、人権について自分の考えを深めることができた。



↑ リモート人権集会

密回避を講じた「ふれあい発表会」(小・中学校)

例年は「ふれあい発表会」と称し、全校生・保護者・地域の方が一堂に会して催すのだが、今年は密回避のため、「観覧は保護者のみ」「発表学年ごとに保護者、児童とも入れ替え制」「学習発表の様子はYouTubeでのライブ配信」として開催した。



↑ YouTube でのライブ配信用にセッティング

配信に必要なアカウントの取得や機材の準備、システムの構築など市教育委員会にも助けていただいで開催できた。「祖父母にも見てもらえた」「海外の赴任先でも見る事ができた」「じっくり集中して見る事ができた」という声をいただき、今年ならではの取組となった。その一方で、集音マイクの準備や個人情報の保護など新たな課題への対応も必要である。

参加者の消毒作業、動画配信の音楽会(小・中学校)

学校から感染症の予防対策の徹底のためのお願いの依頼文書を配布することで、保護者の理解を得ながらの音楽会を実施した。演目終了ごとに、保護者の入れ替え、会場の換気を徹底して行った。座席の消毒については、アルコールウェットティッシュとゴミ箱を座席近くに複数設置するとともに事前に協力依頼していたことで、参加者の消毒作業の協力を得られた。



↑参加者みずから消毒作業を行えるようアルコール消毒剤とゴミ箱の複数設置

参観カードを事前配布、移動経路を一方通行としたことで、100人単位の受付、入れ替えの移動はスムーズに行えた。またYouTubeを活用して、演奏中継の動画配信を行ったことも、混雑の緩和や感染不安のある方への配慮となった。



↑ YouTube による演奏の中継動画の配信

屋外での「文化発表会」(小・中学校)

毎年、多くの保護者・地域の方々に本校の文化発表会を楽しみにして頂いており、生徒のためにも何とか開催する方法はないかと検討した結果、「学びの庭」と名付けられた中庭で、マウスシールドを着用して感染リスクをできるだけ回避して開催することとした。開催が決定すると生徒の感染予防の意識も更に高まり、順調に練習を積み重ねた。

当日、最大の目玉は吹奏楽部の伴奏による全校合唱だった。心地よく響く太鼓のリズムに乗って力強く歌った「木遣節(きやりぶし)」、命の大切さを訴えるナレーションの後に生徒会長の指揮で熱唱した「いのちの歌」など、全員の魂を震わせる感動の発表だった。全校生が一つとなり、大きな花束をプレゼントしてくれた、そんな文化発表会となった。



↑ 「いのちの歌」を熱唱する全校生

感染対策を徹底した「文化祭」(小・中学校)

文化祭について、中止も検討されたが、感染対策を徹底し、文化部の発表と学年合唱でプログラムを構成し実施した。特に、学年合唱については、歌いやすいように立体的なマスクを練習、本番ごとに配布した。



↑ マスクを着用したまま合唱する生徒

文化祭当日は、生徒のみの参加として、十分に間隔を取り、観客席を設置した。また、入口等を開放し、サーキュレーターで空気を循環させた。合唱はすばらしく、生徒たちも、この環境で「できることをやりきった」という思いで文化祭を終えることができた。

後日、オープンスクールで学年ごとに保護者にも、見ていただく機会を設定し、生徒のすばらしい歌声を届けることができた。

文化祭ウィーク“絆” (小・中学校)

今年は、体育館での合唱、劇、ステージ発表を避け、中庭やテラスをステージとして使用する屋外型文化祭の実施を考えた。また、昼休みを使って絆タイムとし、文化祭ウィークという形で1週間かけて実施した。



3年生は、屋外での合唱発表と震災学習を通して学んだことの作文、2年生はトライやる講演会で学んだことの新聞製作、1年生はクイリングアートの製作を行った。

少ない準備期間で、制限された練習環境の中であったが、感染症対策を行い、「今を生きる私たち」をテーマに生徒、教職員一丸となり、精一杯取り組んだ。屋外での合唱の難しさ、昼休みという時間の中で実施する不安の中でも、学校のあたたかさ、やさしさの溢れる新しい形の文化祭となった。

合唱コンクールにおける感染予防対策 (小・中学校)

文化的行事である合唱コンクールにおいて、演奏者と客席の距離を保つとともに、透明シートを設置して感染予防を行った。また、例年よりも演奏者の間隔を広げた隊形を組み、歌唱時のみマスクを外し、それ以外の場面では着用しながら実施した。

歌唱領域の平素の授業においては、向かい合わせにならない隊形の確保ができる体育館で行い、通常は密集して行うパート別練習を取りやめ、教員がマイクを使用しながら指導した。

また、授業時間数の確保の観点から、取り扱う楽曲の難易度を下げるとともに、ICT機器を活用した学習によって感染予防の一助とした。



↑客席との間に透明シートを設置

ビールケースとコンパネを活用し、広いスペースを生み出す(小・中)

これまでは地域の文化会館で文化祭を開催してきた。ところが、収容人数が制限されるため、学校の体育館で行った。

合唱をするには体育館の舞台ではかなり狭くなるため、ビールケースとコンパネを使用して舞台を広げ、合唱の際のスペースが広くとれるよう配慮した。

また、生徒全員が座ると体育館が一杯になるため、保護者の参観に制限をかけざるを得なくなった。

そこで、YouTube を使用して、文化祭をパスワードの必要な限定でのストリーミング配信で観覧していただけるようにした。これまでの文化会館では見られなかった祖父母等の家族も一緒に自宅で見ることができ、ありがたかったとの感想をいただいた。



↑ 合唱の様子
1 段目がビールケースの舞台

能楽(能・狂言)の鑑賞・体験プログラム(中|文化芸術体験)

青少年芸術体験事業「わくわくオーケストラ教室」は、本校のように都市部から離れている学校の生徒にとっては、日常では触れることの少ない貴重な芸術体験の一つである。しかしながら、今年度はコロナ感染症予防のため参加を見合わせた。

その代替行事として、文化庁主催の「子どものための文化芸術体験機会の創出事業」を活用し、能楽(能・狂言)の鑑賞・体験プログラムを行った。演目は、国語の授業でも学習する「附子」と「敦盛(典拠『平家物語』)」。当日は体育館に能舞台が設置され、「かぶりつき」でプロの能楽師による迫力の舞台を解説付きで鑑賞した。本格的な日本の伝統芸能に触れる機会となったとともに、「わくわくオーケストラ教室」同様、教科の学習にもつながる貴重な体験となった。



↑ 「敦盛(典拠『平家物語』)」の一場面

親子マラソン大会（幼稚園等）

体力づくりの一環として10月後半から駆け足を始め、11月に親子マラソン大会を開催した。本格的なサッカーもできる近隣のグラウンドを借りて、初めて行ったときは、「わあ、広いな〜！」と子どもたちも思わず声が出るほど驚いていた。

当日は、検温や手指消毒など、感染症対策を講じながら、年齢に応じた距離を走った。特に3・4・5歳児は、1周目は子どもたちだけで、2周目以降は親子で一緒にゴールを目指した。途中くじけそうになってもみんなの応援でやる気を出し、ゴールした時は、親子の笑顔が輝いていた。

親子マラソン大会を通して、「最後までやりきること」と「共に頑張る親子の絆」を感じたひとときであった。



↑ 元気いっぱいスタートダッシュ

2部制にして密集を避けた運動会（幼稚園等）

今年の運動会は、第1部0～3歳児、第2部4・5歳児として、2部制にして密集を避けるようにした。参加保護者は2名までとし人数の徹底を図るため、受付では引換券をもらうようにした。

演技内容は、感染予防対策のために、密集する綱引きや玉入れは省き、また、時間短縮のために、保護者競技を無くした。親子競技はスタート地点に消毒液を置き、親子共に消毒をしてから競技を始めるようにした。人数が少ない分、園児がよく見えてゆったり応援できて良かったという意見が多い運動会となった。

第1部と第2部の入れ替えは、入り口を別にし、参加者が一方通行となるようにしたことで、混雑せずにスムーズに入れ替えができた。



↑ 親子で消毒をしてからスタートです！

例年の実施方法を変更して実施した運動会（幼稚園等）

例年、3・4・5歳児70名程度と一緒に運動会を行っていたが、今年は学年別に運動会を行った。（10月）参観者は各家庭2名までとし、参観される方には、園庭の入り口で、検温、消毒、マスクの着用、氏名・連絡先の記入をお願いした。また、これまで暑さ対策のためのテントを設けていたが、密を避けるため、必要と思われる方は日傘などの準備をお願いし、テントは設置せず、間隔をあけて参観していただくようにした。運動会の内容も、例年では保護者と触れ合う種目を入れていたが、今年度はしないこととした。

1学期から積み上げていた縄跳びやフラフープ、鉄棒などの日頃の運動遊びの成果を披露でき、園児たちも達成感を味わうことができた運動会となった。



←フラフープで演技している様子



鉄棒に挑戦している様子→

運動会ごっこ（幼稚園等）

今年は、感染症予防対策を講じ、密にならないよう、例年の「運動会」ではなく、参観日に「運動会ごっこ」として開催し、学年ごとに保護者に披露した。

年少組は、クラスで並ぶのも友だちと一緒に走ったり、踊ったりするのも全て初めての経験だったが、運動遊びを通して、体を動かす心地よさや友だちと一緒に走ったり踊ったりする楽しさを感じることができた。また、年長組は、昨年の経験もあり、リレーや玉入れなどで勝敗がつく面白さを感じたり、目的を共有し、皆で力を合わせてやり遂げた満足感を味わったりすることができた。「運動会ごっこ」を通して、幼児が自信をもち、運動遊びに意欲的に取り組むようになった。



←年少組の演技「パワフル☆キッズ」

年長組の演技「団結ソイヤ！」→



1日1クラス実施した「スポーツウィーク」(幼稚園等)

今年は、運動会を10月第2週に「スポーツウィーク」として5日間にわたり1日1クラスで開催した。また、保護者の参加は2名までと限定した。

各クラス、入場行進から閉会式まで担任と園児が内容を考えるなど様々な工夫を凝らした。

保護者からは、「同学年の2クラス一緒に実施してほしい」などの意見もあったが、「子どもが出ている時間が多くてよかった」「子どもの様子を近くで見ることができてよかった」という感想が多数であった。新型コロナウイルス感染症対策を最大限配慮した中での開催であったが、今までとはひと味違う素晴らしい運動会となった。

パラバルーンの演技をしている様子
→



保護者が、子どもたちの近くで応援している様子
←

幼児の大きな育ちにつながった運動会(幼稚園等)

今年は、競技や演技の数を例年より減らし運動会を実施した。また、競技、演技については、密になるものは避け幼児同士の間隔が十分に取れるような内容や方法を工夫した。

競技間には幼児が消毒する時間を設けたり、競技、演技の数も例年より減らし、安全に、短時間で終了するように配慮した。

参観者についても、保護者2名まで、座席指定とし、十分な間隔をとった観覧席を整えた。当初運動会実施の有無も検討されたが、運動会での経験、保護者の励ましや支えは、幼児の大きな育ちにつながった。



↑ 幼児同士の間隔を十分にとって

日常の運動遊びの様子を発表（幼稚園等）

今年は、保育参観日として日常の運動遊び等の様子を保護者に見てもらった。雨天のためホールで行ったが、年少児・年長児合同で、体操、竹馬、ヤットコ、かけっこ、玉入れ等を参観してもらった。参観者は保護者のみとし、来園までに検温の上、熱のある方や体調の悪い方は、遠慮していただくようにした。また、マスク着用、2メートルのソーシャルディスタンスをとり、大声での声援は控えていただいた。園児たちは、力いっぱい走ったり、跳んだり、全ての運動遊びに全力を出し切り、立派にやり遂げた。この保育参観日で観てもらうことを通して、園児達は、心も体も大きく成長することができた。



↑ 運動遊び（フラフープ）

規模を縮小し、十分な感染予防対策をとりながらの運動会（幼稚園等）

今年は、コロナ禍のため、教職員、園児及び保護者含めて十分な感染予防対策をとりながら運動会を実施した。今年は屋外で実施でき、密を防ぐという意味でも大変良かった。

教職員、園児とも慣れないフェイスシールドを装着しての練習を行った。当日は、飛沫防止のため、ホイッスルを電子ホイッスルに変更した。また、保護者の観覧人数の制限も行った。効率良く進行するためのタイムキーパーの配置も新たに工夫した。規模を縮小した運動会だったが、天候にも恵まれ、園児、保護者、教職員全員が達成感に満ちた運動会にすることができた。



↑ フェイスシールドを装着して運動会練習に取り組んでいる様子

感染対策を講じた「体育発表会」(小・中学校)

例年、春開催の運動会を中止、秋に体育発表会を行った。

学校再開直後の体育の授業は距離を保つためにマスクを活用し、体力維持とストレス解消を重視して基本の運動、リズムダンス、縄跳び等、個人の運動を行った。その後状況に応じ、徐々に道具を使う運動や競技を取り入れた。

体育発表会では、授業時数を確保し、日々の取組を保護者に伝えることを目的として、マスクを使ったダンスや縄跳び、個人技のマット運動、バトンに配慮したリレー等を披露した。また、小学校生活最後となる6年生のみ、教員との綱引き対決を行い、密を避けて校舎の窓から下級生たちが応援をした。保護者に1家庭1名の参加証を配布し、学年ごとの観覧とした。



↑ ソーシャルディスタンスを保ちながら運動

保護者の参観を可能にした「小運動会」(小・中学校)

例年初夏に実施してきたが、緊急事態宣言による中止。地域でも様々な行事が中止となり、児童に思いっきり体を動かさせてやりたい、活躍する姿を保護者に見てもらいたい、という教職員の思いが「小運動会」の計画に至った。

授業時数確保のため、普段の体育の授業の延長として実施する企画準備をすすめ、10月中旬に3密を回避した「走」「競遊」「交流」「リレー」の4部構成で実施した。児童の躍動は鬱積を洗い流すかのように生き生きとして、保護者には8ヶ月ぶり、1年生には初めての参観となった。児童と保護者の喜びの声に、教職員は一層の教育への意欲がわいてきた。

観覧は家庭1名とし、マスクと手指消毒の徹底を図った。保護者も趣旨を理解の上、快く応じてくれた。



↑ 「交流の部」
高学年のリードで「南中ソーラン」を踊る

皆で工夫を考え、実施した「くましろ祭」(小・中学校)

コロナ禍でも工夫し行事をしたい、という児童たちの思いから生まれたのが体育会に代わる行事、『くましろ祭』である。

保護者や児童、教員にもアンケートを行い、どのようなことに気をつければこの行事が成功するのか考えていった。

そして、6年生の実行委員会が中心となって新型コロナウイルス感染症への対策や競技プログラムの内容を考えた。用具や競技方法を工夫したり、児童だけでなく観覧者へも消毒や密を避けるようにとの声かけを行ったりと、まさしく主体的な学びの場となった。



↑新型コロナウイルス感染症対策の係が作業内容を考え計画から実施まで主体的に行った。写真は、手指や用具の消毒を行っている様子

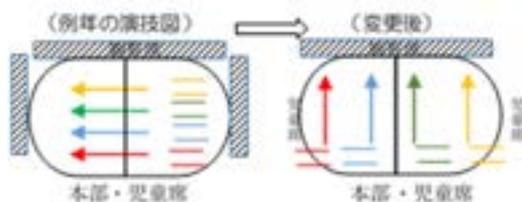
運動場のレイアウトを工夫した運動会(小・中学校)

観客は、事前に来校証を配布した人のみに制限して、半日で開催した。観覧場所は、トラックの1方向のみで、テントを設けず全て立見とし、PTAの協力の下、各演技ごとに該当学年の保護者が最前列で観られるよう、場所を替わり合っていた。

演技では、フラフープや布を使って児童同士が一定の間隔を保てるようにしたり、観覧席から全ての児童が見えるように演技の向きを90度回転させたりして工夫した。様々な制約がある中、児童の生き生きとした姿が観られ、保護者から多くの喜びの声が寄せられた。



←演技内容と演技図の工夫↓



「げんきだまとばせ」(小・中学校)

今年度、観客は家族限定で来賓なし、検温・手指消毒・マスク着用での参加を徹底した。

プログラムは演技数を減らし、全員参加の体操は間隔を十分にとり、親子演技は親子とも手袋を着用して他人や競技道具(大玉)に直接接触ることがないように工夫した。

子ども達で考えた「げんきだまとばせ」のスローガンのもと、「何度も練習をすることでできる」ことを信じて一つ一つの演技に丁寧に取り組み、友達の頑張る姿には自ら声援を送り自信や満足感を感じられた運動会となった。

運動会后、「競技数も観客数も少なかったが、子ども達が生き生きと輝き、元気をもらい幸せな時間を過ごせた。」など保護者のアンケートからも開催に満足していることがわかった。



↑ 間隔をとっての体操



↑ 手袋着用の親子演技 園児作成運動会スローガン↑

種目変更を行い実施した「ふれあい運動会」(小・中学校)

10月の幼稚園のふれあい運動会は来賓、地域の方に案内は出さずに、園児家族、未就園児家族で行った。

密になることが予想される綱引きは競技に入れず、玉入れは本来の方法では実施しなかった。

玉入れ競技は自分の玉の色を決め、その玉を入れる競技と、背負いかごの中に入れる競技を楽しんだ。並ぶ時も隣りとの間隔をあけて並ぶようにし、大人の方には手指の消毒・マスク着用をお願いした。

平日に行ったので、参観者は少なかったように思う。保護者からは、コロナ禍で、運動会が開催できたことだけでも嬉しいという意見をもらった。



密にならないように間隔をあけて

「自分の限界に挑戦！一生懸命がかっこいい 鶴居っ子」(小・中)

今年度は例年6月の運動会を9月に開催した。実施に当たり、①種目数減の午前中開催、②観覧場所の拡充、③テント内のマスク着用、④各所にアルコール消毒液の設置など感染予防対策を講じた。

『自分の限界に挑戦！一生懸命がかっこいい 鶴居っ子』のローガンの下、例年通り紅白対抗の縦割り対決で、6年生を中心に全校生が全力の演技を展開した。接触する種目はないが、徒競走、玉入れ、紅白対抗リレーで盛り上がり、「キラリ☆にっこり☆おさかなパレード(低学年創作ダンス)」で心を和ませ、最後は「鶴居の華よ、咲き誇れ(高学年の創作ダンス)」で締めくくった。

コロナ禍の行事であったが、子ども達は練習から一生懸命取り組み、充実した時間を過ごすことができた。また、保護者の感想も肯定的・好意的な意見がほとんどであった。



臨時休業中の取組を運動会の演技種目に活用(小・中学校)

運動会は、演技種目数を大幅に見直し、午前中開催とした。参加者を限定し、事前に配布した名簿用紙を当日会場入口にてPTA役員と教員が回収した。また、検温にも対応した。

各自治会テント後方に手指消毒用アルコールを設置し、感染症対策への協力を呼びかけた。

臨時休業中にリズム体操の校内研修を実施し、運動会の演技種目に生かせるよう毎時間の体育の準備体操に取り入れた。運動会では短時間で練習したリズムダンスを全校生で披露し、拍手喝采を浴び、全児童が達成感や充実感を味わうことができた。



↑入口にて参加者名簿提出と検温を実施



↑各自治会テントに手指消毒用アルコールの設置

感染症対策のため、大胆な実施の見直しを図った運動会(小・中学校)

感染症対策のため、大胆な見直しを図って実施した。こども園や地域との合同実施とせず小学校のみで行い、プログラムは午前中のみとし、参加者は児童とその家族に制限するなど、密を避ける工夫を行った。



また、授業時数を確保するため、演技や競技の内容を工夫し、練習時間を縮小することにも取り組んだ。

様々な制限がある中においても、児童一人一人が自分なりの目標を持って取り組めるよう、練習前後にミーティングを行い、6年生が中心となって、子どもたち同士が互いに声をかけ合いながら、前向きに準備や練習に取り組んだ。

本番では、児童一人一人の運動会を成功させようとする思いが会場全体に拡がり、児童と観客が一体となったとても見応えのある運動会となった。

人との接触をできるだけ避ける演技を取り入れた運動会(小・中学校)

9月開催の運動会を午前中開催とした。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会場には所々に消毒液を設置し、自由に利用できるようにした。

また、残暑厳しい時期の開催であったため、熱中症対策としてテントを設置したが、間隔を広くとった。



演技種目においては、地域の方々の出演をなくし、児童中心となるプログラム編成にした。児童の演技内容もできる限り人との距離をとり、接触を避けたものとなるような、工夫も行った。具体的には、「行進では縦と横の間隔をとる」、「ダンスは個々だけ」、「組み体操をやめて、一人演技とフラッグによるパフォーマンス」などの工夫を行った。

新型コロナウイルス感染症に負けない運動会(小・中学校)

今年は、演技種目を徒競走・競争演技・表現演技の3種目に限定し、時間短縮をして運動会を実施した。また、観覧数を1家族3名と制限したり、児童の待機場所を校舎内としたりして3密回避対策を行った。

様々な制約がある中、教員は、児童のやりがいのある演技を創っていった。また、児童の思いやアイデアを生かし、開会式や閉会式を行った。6年児童が行うオープニングセレモニーや紅白応援団によるエール交歓は、これまでの既成概念にとられない新しい形を生み出し、子ども達の成長の機会となった。安全対策も含め、保護者からも高評価であった。閉会式、挨拶をする6年児童の後方に思いを込めた垂れ幕が落とされ、新型コロナウイルス感染症に負けない運動会は幕を閉じた。



↑ 運動会の様子

体育学習発表会(小・中学校)

新型コロナウイルス感染症対策として、全校を3つのグループ(1・2年 3・4年 5・6年)に分け開催した。また保護者の参観は一家庭につき一人と限定をした。さらに、受付では、名簿の記入、検温の実施を行うとともに児童の名札を着用し、参観者の把握を行った。

時間や内容の制限された体育学習発表会であったがどのグループも工夫を凝らした素晴らしい発表となった。特に1年生の競争遊戯はフラフープをつなぎ、そのフラフープの中に一人ずつ入り、コーンを回ってくる競技で、距離を取りながら楽しく活動できた。また、どのグループも実施した綱引きは綱に1mごとに印をつけ間隔をとって行った。

これまでの運動会と違った形だったが、児童も自分たちの持てる力を発揮することができた体育学習発表会となった。

↓競争遊戯(1年生)

↓綱引き(全校が実施)



コロナ禍だからこそできることを模索した運動会(小・中学校)

今年度は、5月に予定した運動会の形を変え、10月に体育学習発表会(オープンスクール)として実施した。開催日を2日に分け、学年毎に、45分で開閉会式・ラジオ体操・学級対抗リレー・表現運動を披露した。

約3週間の練習期間で、分散練習や児童同士の接近・接触を減らした表現運動の工夫など、練習計画や演技構成は学年毎に工夫を凝らした。発表会の運営・進行は6年生が分担して携わり、5クラスが1~5年生の発表会をそれぞれ運営した。これにより、例年より一人一人の仕事が増え、活躍する機会が多くなった。また、保護者の方々は子どもの頑張る姿を間近でゆったりと観ることができた。

コロナ禍だからこそできることを教職員で模索し、感染症対策を工夫しながら、児童の成長を保護者と共有できる機会が得られたことは大きな成果である。



↑ 6年生185人による表現運動

密集、密着となる競技をやめ、運動会をフェスティバル化(小・中学校)

感染拡大防止のため、運動会を縮小して午前中に実施した。コロナ禍において通常の運動会と違うことを意識させるために、行事名を「温小フェスティバル」とした。

また、密集・密着となる組体操・騎馬戦をなくし、代わりに「温小ヨサコイ爽爛」(よさこいソーラン)を取り入れた。

その他にも祖父母やPTAとの演技をなくすことで、時間短縮を図った。

演技種目が減ることで、子どもの活躍の場が若干減ったが、演技の内容を充実させ、係活動や応援の指導をすることで、子どもたちも達成感を得られる行事とすることができた。



↑ 4・5・6年生よる「温小ヨサコイ爽爛」

三密や、熱中症対策を十分に講じ、高評価の運動会(小・中学校)

運動会の実施にあたり、「三密」を避けること、熱中症を防ぐことなどを考慮して対策を講じた。

- ①プログラム：各学年、「走る」「学年演技」「表現運動」の3種目のみとし、時間は概ね30分程度とする。
- ②種目内容：児童間の距離が十分取れる種目とし、接触は避ける。
- ③参観者：各家庭2名以内、来校時の検温と来校者名簿の記入を依頼する。隣接学年毎の開催にすることで、人数を制限した。参観場所は2m四方の枠を設け、子どもが引いたくじにより、予め場所も指定する。



↑ 児童間の距離を空けて



↑ 2m枠の観覧席

「迫力に欠けた」「他の学年も見なかった」などの声も聞かれたが、「感染対策が十分取られていて安心した」「子どもの演技を最前列でゆっくり見られた」など、高評価であった。

ミニ運動会(小・中学校)

今年度は、例年どおりの運動会が実施できなかったため、学年ごとのミニ運動会を実施した。

各学年、リレーと表現運動を実施し、ソーシャルディスタンスをとるなど、感染症対策を講じた内容とした。練習の際にも、体育館での練習は最大2クラスまでとするなど、密にならないように配慮した。

保護者の参観についても、ソーシャルディスタンスをとって観覧できるか、運動場にマス目を作ってシミュレーションをした上で、学年の保護者の参観を可能とした。

例年とは違う形での実施となったが、子どもが達成感を感じることができている内容とすることができた。



←自分たちで染めた藍染めTシャツを着てのソーラン

練習の成果を発揮したリレー→



学年ごとの「体育発表会」(小・中学校)

今年度は、学年ごとの「体育発表会」を行った。各学年、リレーと表現運動に取り組み、保護者も観覧した。

リレーでは、待機場所での密を避けるため、回戦ごとに待機場所を変える工夫を取り入れた。

また、表現運動では、演技中の隊形移動を極力避けて感染予防対策を講じながら行った。ソーシャル・ディスタンスを保てることで、一人一人の演技の表現を大きくすることができた。保護者にとっては、一人一人の演技がよく見えることが好評であった。



↑クラスごとに運動場を広く使ったリズム体操

学年ごとや複数学年ごとの「体育参観」(小・中学校)

例年は全校生で行っている運動会を、学校の規模に合わせて、学年ごとや学団(複数学年)ごとに「体育参観」として1コマの授業時間内で実施した。例年よりも演技・競技内容を簡素化し、練習時間も大幅に削減した。

それにより、練習期間中も体育以外の教科の授業時数を十分に確保することができた。学年、学団ごとの実施にしたことで参観する保護者の人数は例年より少ないが、さらに参観場所を指定して分散することにより、できる限り密にならないよう工夫した。



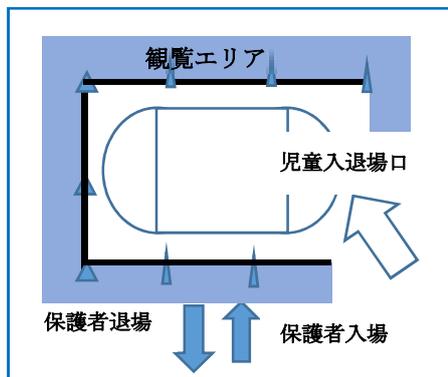
↑1学年だけの「体育参観」

「学年発表会」形式による運動会(小・中学校)

運動会は「学年発表会」形式で実施した。1校時は2年生、2校時は1年生というように、6校時まで時間割を組み、各学年の児童が体育の授業で学んだ走競技や表現運動に取り組んだ。

密を避けるため、「子どもの在籍する学年のみ」観覧できる入場制限を設けた。また、受付前が混雑しないよう、体育館を待機場所に指定した。

図のように観覧エリアを広く設け、保護者の入退場を一方通行とすることで、来場者の交錯を防ぐ対策も講じた。受付や誘導の係は、PTAの協力を得られた。規模を縮小して実施したものの、発表児童の表情は生き生きとしており、保護者からも感謝の声が多く寄せられた。



ソーシャルディスタンス玉入れ(小・中学校)

今年度は感染対策を行い、規模を縮小して運動会を実施した。保護者の観覧はなかったが、子ども達は一生懸命種目に取り組んだ。

ソーシャルディスタンス玉入れでは、密を避けるため、かごに玉を投げる役と集める役を分け、玉を投げる人は、フープの中から玉を投げるようにし、玉入れを行った。練習では、かごに玉が入りにくく苦労したが、本番では、作戦を工夫し、多くの玉を入れることができた。

また、他の学年が競技している時は、大きな声を出さずに拍手で応援するよう、6年生児童が呼びかける等、全校生が協力し、運動会を成功させることができた。



↑ソーシャルディスタンス玉入れ

3部制によるミニ運動会(小・中学校)

3部制によるミニ運動会！
6年生に活躍の場を！

- 低・中・高学年の3部制にして実施した。(参観の保護者も入れ替わり。)
- 演技種目は、「走」「表現」「競争的演技」のバランスがとれるよう厳選し実施した。
- 6年生には、例年と同様に役割を与え、最高学年として活躍し成長させる行事となるよう、感染症予防に配慮しながら、実施した。
- コロナ禍で特別な運動会となったが、今までと同じように創り上げる喜びや達成感を味わえた運動会となった。

↓一生懸命に演技している様子



運営・競技方法を工夫した「体育大会」(小・中学校)

今年の体育大会は、練習及び開催時間を短縮して行った。観覧は生徒1名に対して最大2名までとした。

リレー種目では、トラックを完全セパレートにして実施した。生徒が交錯する場面は解消され、実際の接触はバトンパス時のチーム内だけと限定できるため感染対策としてはよかった。また、チーム編成を1クラス単位としていたが、練習や相談の機会が密になるため、できる限り小集団(クラス半分)での編成を行った。

来場者に関しては、入場から観覧場所までの動線を指定し、生徒と接触がないように工夫をした。

↓ 完全セパレートコースでのリレー



半日に短縮して実施した体育大会(小・中学校)

本年度の体育大会は、消毒、生徒テントの増設など新型コロナウイルス感染症予防の対策をとり、9月12日、半日に短縮して行った。予防対策の中にはPTAと協力し保護者の入場について工夫した。入場券をあらかじめ配り、入場者の氏名や検温等の情報を把握することにした。また、発熱等の症状が出た場合には速やかに関係機関と連絡が取れるように連携し、入場者にも周知徹底を行った。入場に際しては、人数制限し手指の消毒を行い、入場許可証を発行した。

半日開催ではあったが、保護者が見守る中、PTAとの連携のもと、感動を呼ぶ感謝の体育大会を行うことができた。



↑ 受付での消毒の様子



↑ 体育大会の様子

生徒会主催のスポーツフェスティバル(小・中学校)

今年は、感染予防対策を講じるため、体育祭は中止となった。その代替行事として、生徒会主催のスポーツフェスティバルを開催した。

特別な練習時間をとらず、当日に生徒会役員が演技種目について説明し競技を行った。保護者や来賓の参観がないため、見せるための演技ではなく、生徒たちが楽しむための演技となり、ほのぼのとした内容でゆったり時間が流れた。

密を避けた内容中心となり、例年の体育祭と同じような充実した取組となった。



↑ スポーツフェスティバルでの全力疾走

高原スポーツフェスティバル(小・中学校)

毎年、近隣のこども園・中学校と連携して運動会を開催しているが、今年は中止となり代替策として、体育委員が中心となって「高原スポーツフェスティバル」を開催した。

感染予防対策として、「競技中、密にならない」「マスクを着用してできる競技」というルールのもと、担当の委員会が4つの種目を考え、「空飛ぶ長靴」「なわとびリレー」「障害物リレー」「スマイル班対抗リレー」を縦割り班ごとに分かれて行った。高学年は練習中、低学年に競技のアドバイスをしたり、思いやりあふれる声かけをしたりと交流を深めていくことができた。また、当日に手洗いの励行やマスクの着用を班内の児童に指示する、軍手をはめて手をつなぐ、間隔を広くあけて縄跳びをするなど感染予防に対する意識を高めながら競技を行うことができた。



高原スポーツフェスティバル

感染症・熱中症の予防の工夫を凝らした体育祭(小・中学校)

新型コロナウイルス感染症および熱中症の予防に工夫を凝らし、充実した体育祭が実施できた。

○日程：半日開催とし、途中に15分間の休憩を入れた。

○演技種目の精選：接触のある種目（ムカデ競走、綱引き等）を除外した。また、練習時間を短縮するために「ソーラン節」を取りやめた。

○感染予防：来賓を断り、応援は家族のみとした。応援テントを例年より多く設置し、アルコール消毒液を配置した。集合時と応援席ではマスクを着用し、大声での応援を控えるよう指導した。演技後には、使用したビブスやタスキにアルコール消毒液をスプレーした。



←集合時にはマスクを着用



←使用したビブスやタスキをアルコール消毒

3年生の実行委員が「密を避ける競技」を考案(小・中学校)

今年の体育大会は、中止にするのではなく、以下のような感染拡大防止対策をとって実施した。

- ・練習時間の短縮。
- ・午前中開催。
- ・密を避ける競技を工夫。
- ・来賓なし、保護者は3年生の保護者のみ。



↑ デカバトンリレー

3年生の実行委員を中心に、密を避ける競技を考え、生徒が練習の指示を出し、生徒が主体となる体育大会になるようにした。団体種目を減らしてリレー種目を主にし、例年とは違う体育大会になったが、生徒達は達成感を味わうことができ、充実した体育大会を行うことができた。

「仲間を信じて走り抜け、離れていても心は一つ」(小・中学校)

今年度の体育大会は例年と形を変えて、「スポーツフェスティバル」として開催した。「仲間を信じて走り抜け、離れていても心は一つ」のスローガンのもと、生徒主体の楽しめる行事にしようと計画した。練習時間は1日1時間以内で合計7時間以内とした。

プログラムは、トラック競技の他に、吹奏楽部の生演奏にあわせて全校生徒で踊る「校歌ダンス」や全校生徒からの公募で決まった「ソーシャルディスタンスを意識した玉入れ」など、人と人の距離は離れていても心のつながりを大切にされた内容構成で行った。玉入れはルール作りから当日運営までを生徒会が行った。

当日は全学年を縦割りにして競い合ったため、学年を超えて応援し、心のつながりを意識することができた。

↓ ソーシャルディスタンス玉入れ



自分たちが創る新たな体育大会(小・中学校)

平日・無観客・午前中での開催となったため、今年の体育大会はプログラムから検討することとなった。まずは、感染対策を優先するなかで考えた内容を校長・教頭・生徒会担当と何度か相談し、種目やルールを考え、プログラムをつくった。自分たちが創るという意識を全校生にも伝え、限られた練習時間の中で当日を迎えた。

観客は無く、例年とは違う体育大会であったが、自分たちが創る新たな体育大会として行われ、感動的な行事となった。無観客であったが市のCATVが撮影し、例年より、長い時間放送され、多くの保護者や市民に見ていただくことができた。



↑ 生徒が考え出した種目の様子

競技における感染対策と人数制限・来場者対策(小・中学校)

[競技における感染対策]

例年より競技数を縮減し、午前に競技、午後に部活パレードと閉会式を実施した。体操やダンスではグラウンドに2m間隔のマス目を描き、生徒たちが最低限の間隔を確保できるようにした。また、綱引きにおいても2m間隔のテープを綱に貼るなど工夫を行った。他の競技においても人数制限を行い、生徒同士が同じ道具を使用する際には、消毒を徹底し軍手を使用した。

[人数制限および来場者対策]

保護者は各家庭2名以内の最少人数で参加、来賓の方は人数制限を行った。運動場の入口にテントを設置し、検温と消毒の実施を行った。熱中症予防に配慮し、十分な距離を確保できる場合以外は、マスクの着用をお願いした。



↑ 2m間隔の綱引き

↓ 軍手を使用



午前中半日開催の運動会・体育大会(小・中学校)

今年度の小中学校の運動会、体育大会は、いずれも午前中半日で開催した。

演技種目は、児童生徒が密集する運動や近距離で組み合ったり接触したりする運動を避けるよう、各校とも工夫して指導し、練習に取り組んだ。児童生徒は、演技中には互いの距離をとりながらも心はひとつにして、運動できる喜びを全身で表現することができた。

また、保護者には、運動場の広さと児童数によっては、低・中・高学年の入替制に協力いただいたり、5日前からの体温測定や距離をとっての受付に協力いただいたりして、児童生徒の活動を支えていただいた。



← 小学校運動会

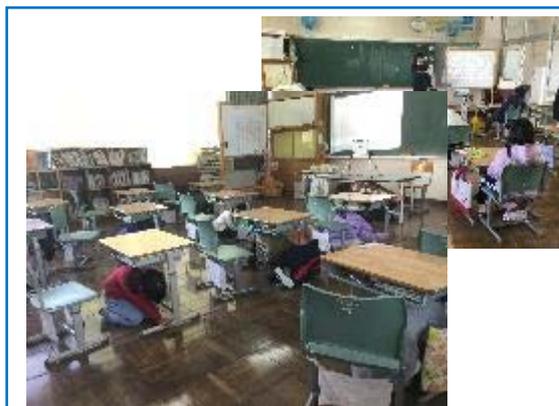


← 中学校体育大会

バーチャル体験を組み合わせた「避難訓練」(小・中学校)

地域防災訓練や避難訓練は、実際に行うと密になり易い。そこで、学校再開後、児童朝会で活用しているタブレットのリモート会議機能を利用した。

11月5日の津波防災の日に関連した避難訓練では、実際の経路を避難する様子を、教員が事前に撮影し、当日各教室に動画配信して、全校生でバーチャル体験した。また、1・17



↑ 教室で行うけれど、全校生が一つになって

関連の防災学習では、事前に「しあわせ運べるように」を動画で練習したり、当日 EARTH 隊員の講話をリモート配信したりして、分散しながらも全体行事として行えるよう工夫した。更に、実際にシェイクアウトを行ったり、各教室や階段から「しあわせ運べるように」を歌って合唱したりするなどして、バーチャルのみで終わらせないよう、可能な体験を並行して行った。

実際に想定して実施した避難訓練(小・中学校)

毎月、避難訓練(火災訓練・地震訓練・津波訓練・不審者対応等)をしている。

7月には津波訓練(避難訓練)を行い全園児(0歳児から5歳児)・教職員が第1避難所まで避難した。

避難途中では、年齢が低い園児にとっては歩きにくい箇所もあり、今後に向けてどうすればよいかを教職員で話し合った。また、消防署の方に来ていただいて避難訓練をする際は、例年なら「煙体験」を保育室でし、煙の中での避難を経験していたが、今年は密室を避け中止した。しかし、運動場で感染予防対策を講じて行った避難訓練・消火訓練等は例年と同じように取り組み、園児たちも避難の仕方が分かるようになった。今後も、自分で生命を守るため、どのような行動を取ればよいかを伝えていきたい。



津波訓練



消火訓練

阪神・淡路大震災の教訓を活かす避難訓練(小・中学校)

阪神・淡路大震災から26年。1月17日は、私たち兵庫県民にとって忘れられない日である。

あれから26年。震災を体験した子ども達もいつしか大人になり、いつの頃からか、小学校も中学校もその大地震を知らない子ども達ばかりになった。

だからこそ、あの大地震を風化させることなく、次の世代に語り伝えなければならないという思いだ。そのために、学校は、コロナ禍であってもできる避難訓練を工夫し、実施した。また、いつどんな時でも災害が起こるという意識での取組は重要である。



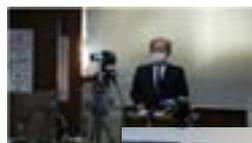
↑ 避難訓練の様子

分散した避難訓練の実施(小・中学校)

全校同時に避難訓練を行うことが困難なため、時間を分散せて学年ごとに実施するなど工夫して実施した。また、全校で行う場合も、屋外を中心として密を避けるように形態を工夫して実施した。

例年実施している1.17阪神・淡路大震災追悼行事等の

全校児童生徒が参集して行う集会も実施が困難なため、各教室と講師(EARTH員の講話、防災コンサート、地域の方や教職員による震災当時の話等)をオンラインで各教室とつないで行ったり、校内放送やICTを活用した全校一斉防災学習などを行ったりした。



←地域の方やEARTH員を招いて講話をしていただく



その様子を各教室で視聴し、学びを深めるようにした→



歯科健診の様子(幼稚園等)

今年度の健康診断等は事前に園医と相談し、感染症対策を十分に行ったうえでの実施となった。特に歯科健診は感染力が高い唾液が飛沫しないよう、細心の注意を払った。

園児たちも新型コロナウイルス感染症対策のために間隔を空け、おしゃべりもしないということを理解し、自分の番がくるまで、上手に待つことができた。

緊急事態宣言中、家庭にいる時間が長く、家庭でスナック菓子やジュースを摂取し、歯磨きが疎かになった子が多かったのか今年度は虫歯が増えていると歯科医師からの話があった。食生活や健康について改めて家庭に啓発する良い機会となった。



友達と1.5メートルの間隔を空け、上手に待っている

フェイスシールドを付け、ダブルミラーで診察していただいた



混雑を避けた定期健康診断の実施(小・中学校)

6月、学校再開後より順次定期健康診断を実施した。市全体で健康診断の実施方法について検討し、医師会にも協力を依頼した。検診日数や1回あたりの医師数を増やすことで、1日の受診人数を例年より少なくし、混雑を避けた。各学校では児童生徒が列に並ぶ際に密を避けるため、足型やビニールテープを床に貼るなど、検診がスムーズに流れるよう表示の工夫をした。検診会場の換気、温度管理にも留意するほか、会場の入り口にはアルコール消毒液を置き、入退室の際に手指の消毒、手洗いを行った。また、検診医はフェイスシールドを着用するなど、感染対策を徹底した。



↑健康診断 会場の様子

ミニ交通安全教室（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、講師を迎え全校生が集まって行う交通安全教室ができなくなったため、1、2年生がミニ交通安全教室を実施した。

運動場にミニ交差点を作り、車を配置し、教員が信号役になって合図を送り、横断歩道を安全に渡る練習をした。

移動や集合の際は、三密を避けるため、間隔を空け会話を控えるよう心がけた。

6月5日という休業明けの早い時期に、通学を始めたばかりの1年生を含む低学年が、交通安全の意識を高める良い機会となった。



↑手を挙げて、横断歩道を渡ります

「修学旅行実施基本方針」に基づいた実施（修学旅行）（小・中学校）

今年度は、1学期に予定していた修学旅行を2学期に延期し、各校が市の定めた「修学旅行実施基本指針」に基づき、旅行先や宿泊日数等を変更の上、実施することになった。

中学校では、実際に旅行先を県内に、或いは行程を日帰りに変更した学校もあったが、小学校では、全校が予定通りプログラムを実施することができた。

状況によっては中止も視野に入れ判断を迫られる場面もあったが、児童生徒や保護者からは、実施できたことへの感謝の意も多く寄せられた。

教育的意義を踏まえつつ、感染対策を行いながら、安全に実施できたことは、大きな成果といえる。



↑ 吉野川 ラフティング体験

「密」を避けた実施（修学旅行）（小・中学校）

修学旅行では、密を避けるためバスを4台から6台に増やして実施した。乗降車の度に運転手さんが手指消毒をして下さった。宿舎は大きなホテルであったため、食事の間隔をあけてとることができた。

大仏殿や法隆寺は観光客が少なく密を避けて見学することができた。定番の、大仏の鼻の穴、金閣寺、音羽の滝などは行けなかったが、大仏の大きさや豪華なホテルから見える琵琶湖の広さに感動したり、地域クーポンを使っての買い物も十分楽しむことができたりと、充実した修学旅行であった。増車のために節約したガイドがわりの教員は大変だったが、子どもたちからは好評であった。

↓ 記念写真もゆったりと



↓ 食事也十分間隔を取って



訪問先を東京から広島・山口方面へ変更（修学旅行）（小・中学校）

本校では、11月24日(火)から26日(木)まで、修学旅行を実施した。

感染の状況が落ち着くのを待って、実施時期を春から秋に変更した。しかし、状況は変わらず、再度、旅行先を東京方面から広島・山口方面に変更することを検討し、最終的な実施に至った。

感染対策については、養護教諭が中心となって、細かなマニュアルを作成し、終始、それに基づいた行動を心がけた。万が一、感染したときの対応については、看護師の帯同等の手立てを取るなど、旅行会社にも対応を依頼した。

旅行中は、生徒たちも終始決まりを守り、しっかりとした行動が出来た。新型コロナウイルス感染症の対策をとり実施し、楽しい思い出ができ、安堵している。



↑ 平和記念公園にて

児童、保護者が安心できる対策を講じる（修学旅行）（小・中学校）

例年、小学校では町内連合で修学旅行を実施しており、今年も1泊2日で京都・奈良方面への修学旅行を実施した。

児童、保護者が安心して参加できるようにバス、見学地、旅館での感染症対策を講じた上、緊急時に備えて公用車を2台準備して行った。見学地は、混雑を避けることができる場所を学校ごとに工夫した。

ある小学校では、「におい袋づくり体験」を取り入れた。一人一人が気に入った模様の布を使って、京都のお土産を作ることができた。また、どの学校も夜に外出をしなかったため、レクリエーションをしたり、部屋でゆっくり過ごしたりと思いきいの活動で楽しめた。コロナ禍ではあったが、小学校生活の思い出となる充実した旅行となった。



↑ におい袋作り



↑ 前を向いての食事

「今しかできない、今だからこそできる」（修学旅行）（小・中学校）

これまで行ってきた1泊2日の広島での平和学習を取りやめ、県内で日帰りの修学旅行へと変更するにあたり、「今しかできない、今だからこそできる」修学旅行として「防災学習」で淡路を選んだ。

事前学習では、阪神・淡路大震災について、総合的な学習の時間を中心にテーマを分担し、ICTを活用して調べた。

旅行では、北淡震災記念公園を訪れ、語り部の話を聞き、活断層を目の前に説明を受け、地震の疑似体験や遺構を見学するなど、事前学習の深化を行った。

事後学習では、現地で学んだことをさらに調べるとともに、まとめとして、1.17追悼集会で全校児童に向けて修学旅行での学習成果を発表した。



↑ガイドより活断層の説明を受ける

地元・但馬をバスで周回する日帰りの小旅行（修学旅行）（小・中学校）

東京方面への2泊3日の修学旅行が中止となったが、中学校生活の思い出となる体験をさせたいと、但馬をバスで周回する日帰りの小旅行を計画した。

当日は、朝から雨模様であったが、3年生全員で竹田城址に登り、ヨーデルの森では、小動物と触れ合い、オカリナづくりを楽しんだ。

そして、夕食では、地元湯村温泉のホテルのご厚意もあり、大広間で懐石料理をいただいた。ホテルの社長からは、ふるさとに寄せる思いや生徒達への励ましの言葉をいただいた。食後に温泉の入浴体験をした生徒達の風呂上りの表情は、満ち足りた笑顔になっていた。

この小旅行の実現のために尽力してくださった皆さんに対する感謝の気持ちも、生徒の心にしっかりと刻まれている。



↑地元温泉ホテルでの夕食

伊勢志摩方面2泊3日の修学旅行（修学旅行）（小・中学校）

8月～2月に、宿泊・日帰りの修学旅行を実施した。一例を紹介する。8月下旬に、行き先を変更して、「伊勢志摩方面」に2泊3日の旅程で実施した。感染症対策として、バス乗車前をはじめ、ホテルや施設利用の際には、教職員・業者・バス乗務員・ホテルや施設の方々の協力のもと、こまめに手指消毒させるようにした。また食事の時や、屋内での集合のときは、人との距離を開けて集まるようにした。食事も、バイキング形式ではなく、一人ずつお膳に配膳されたものを静かに食べるようにした。例年とは違った修学旅行であったが、生徒は、楽しく充実して過ごすことができたようであり、貴重な学びの場ともなった。



←距離を取り、全員前向きに食事を取っている様子

カヌーをしている様子 →



日帰りで、バスを利用した修学旅行（修学旅行）（小・中学校）

例年、修学旅行は一泊二日で広島・宮島方面に新幹線と貸し切りバスを使って実施しているが、感染拡大防止の視点から、今年は日帰りで往復バスを使って実施した。密を避けるため、バスの座席はできるだけ二人掛けの席に1人の児童となるようにした。広島平和記念資料館での被爆体験講話も座席の間隔を広くとるなどの対策を講じた。また、感染の疑いが発生した時の対策として、養護教諭に加え、看護師を手配し随行させるとともに、体調不良児童隔離のため、随行車も手配した。費用については、GO TO トラベルを利用したため、保護者負担の増加はない。



↑
乗車時手指消毒



↑
「密」を避けた座席

感染対策が整備されていた広島を訪問（修学旅行）（小・中学校）

当初は東京の予定であったが、広島に変更した。何かあった場合に保護者が迎えに来れるようにという配慮である。広島は県をあげて感染対策に取り組み、対策が早くから整備されていたのも選定理由となった。

旅行中は、マスク着用、朝夕の検温、ホテルに入る前のマスク交換、バスに乗る前の消毒、消毒用シートを持たせての消毒、手洗いや間隔をとることを励行するなどの対策を行った。いつもとは違う旅行となったが、みんなで旅行できたことに感謝しながら行程を楽しんだ。Go To トラベルによる割引があったりクーポンをもらったりして、お得な面もあり、いろいろな面で充実した取組となった。



↑ホテルでの食事風景
全員前を向いて、距離をとって食べた。



↑バスの乗車風景
隣の席を空席にして座った。

日帰り修学旅行におけるバスの増便（修学旅行）（小・中学校）

今年度、小・中・特別支援学校（小学部・中学部）における泊を伴う修学旅行の実施を中止した。それに伴い、各校には、代替で行う日帰りの修学旅行を再計画し、実施できるように支援を行った。

修学旅行を実施する際の尼崎市の支援としては、感染症対策としてバスの増便（児童生徒30人につき、バス1台になるように増便をする。）、行程の変更に伴うキャンセル料の公費負担、行程の変更に伴う引率教員等の入場料の公費負担を行った。

市立高等学校における修学旅行実施の可否は、県立学校に準ずるが、支援は市立小中学校と同様に行っている。



↑密を避けるために、間隔を空けて座り、乗車人数を減らしている。

貸し切りバスと国の補助を利用（修学旅行）（小・中学校）

本校の6年生は7名の少人数である。例年は公共交通機関の電車やバスを利用して、京都・奈良方面へ修学旅行で訪れていた。ところが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、人混みを避けバスを貸し切った。バスの入口付近には消毒液を置き、乗降時には必ず使用させた。また、マスクの着用も徹底させた。さらに、旅館での食事は飛沫感染対策として、横一列で実施した。GO TO トラベルの時期であったため、費用は例年より多少の増額で済んだ。



↑貸し切りバス



↑バスの中の様子

全校キャンプ（学校独自行事）（小・中学校）

学校独自の行事である「全校キャンプ」は、中止も検討したが、子どもたちの熱い希望により、5月から11月に時期を変更し、感染対策を行い実施した。

午後から縦割り班活動で、用具をすべて熱湯消毒し、飯ごう炊さんでのカレー作りを行った。

1・2年は、米を研ぎご飯作りの用意を、3・4年は、野菜を切りカレー作りの用意を、5・6年は、火おこしから火の番、調理を担当した。それぞれの班が工夫を凝らして、さまざまな隠し味を使ったカレーを仕上げた。また、夜は学年毎にお店を出す夜店集会を開き、その後はそれぞれの教室に分かれて、夜具を使って宿泊した。

消毒、換気、部屋人数を少なくするなどの対策で実施することができ、例年のない良い思い出となった。



↑飯ごう炊さんでのカレー作り

日傘の使用と中学校教室の借用(小・中学校)

夏期休業日が短縮になり炎天下で登下校を行うため熱中症が心配された。

少しでも直射日光を防ぐため全校生に「日傘」を用意した。通学路には日陰も少ないために、日傘の使用でたいへん安全に登校することができた。



また、特別教室に空調が整備されていないため、隣の中学校の教室を借りて一部の授業を実施した。複式学級のため、3教室しか空調が効かないため、他の教室については熱中症指数が「嚴重警戒」を示していた時もあった。中学校の教室を借りることで、安全・安心な授業を行うことができた。

日傘差し登下校(小・中学校)

朝から厳しい直射日光が差し、気温はすでに30度を超える中での登校となった。

午前中の授業を終えて、今度は炎天下の中下校することになった。暑さ指数(WBGT)は31℃以上(危険)という状況もしばしば発生する。

そこで、登下校時は、各自の判断で傘を使用し、直射日光を避けることで、熱中症リスクの軽減を図った。

また、傘を差すことで児童同士が自然に距離を保つ効果も期待され、その場合、マスクを外すことを促した。



↑6年生平和資料館見学
徒歩での移動の様子
2020.8.19(水)

日傘の貸与とスクールバスの運行(小・中学校)

今年度は、小中学校の夏期休業期間を短縮し、8月8日(土)から16日(日)とした。そのため、児童の登下校時の暑さ対策として、以下の対応を行った。

- ・日傘(晴雨兼用)の貸与
- ・スクールバスの運行

日傘を使用することで、強い日射をさえぎり熱中症を予防するとともに、集団登下校の際に一定の距離が保たれるといった効果も見られた。また、スクールバスは、通学距離が2km以上の児童を対象として、気温が高くなる下校時に運行した。これまでにない盛夏の登下校であったが、他にも各家庭の細やかな健康観察等の配慮もあって、安全に通学することができた。



真夏の登下校への対応(小・中学校)

学習の遅れを取り戻すために夏期休業日を9日間に短縮した。そこで、真夏の登下校への対応として、以下の4点に取り組んだ。

- ①スクールバスを分散運行し、3密を避けるとともに、冷房の効いたバスによる登下校とした。
- ②PTAと協議し、児童一人一人に冷感タオルを配布した。
- ③徒歩通学の児童は、直射日光を避けるために、日傘をさして体操服による登下校とした。
- ④ランチルームでの全校給食をやめ、冷房の効いた各教室で静かに前を向いて給食を食べるようにした。食器もワンプレート方式を取り、マイ箸を持参しての給食とした。



↑ 日傘をさして登校する子どもたち

熱中症対策(小・中学校)

- 登下校時の熱中症対策・ソーシャルディスタンスの確保を目的に日傘使用を推奨した。
- 遠距離徒歩児童のためのスクールバス(下校時のみ)が配備された。
- 教室のエアコンやスポットクーラー、大型扇風機を有効活用し、暑さを少しでも和らげ、集中して学習に取り組むことができるよう環境整備を行った。



↑日傘をさして登校



↑登校後スポットクーラー前で涼む児童たち

熱中症対策のための折りたたみ傘(小・中学校)

登下校時の熱中症対策のため、市より折りたたみ日傘が全児童に支給された。当初は梅雨明け頃からの使用を見込んでいたが、朝の時間帯にも容赦なく太陽が照りつけていたため、予定を前倒しにして使用するようになった。



↑日傘をさして登校する児童

児童は、初め慣れない日傘に戸惑っていたが、やがて、日傘での登下校が日常となってきた。日傘をさすことは、熱中症対策だけでなく、通学班の中でソーシャルディスタンスを保つことにもつながった。

また、蒸れを防ぐために、日傘をさしているときは帽子を脱いだり、下校途中で給水タイムを設けたりして安全に登下校する取組ができた。

学校生活の様々な場面で活用できた冷感タオルの配布(小・中学校)

授業時間確保のために、夏季休業日を短縮した。そのような中、7月～8月は、気温が上昇し、熱中症が最も懸念される時期であることから、熱中症対策の一環として、市内の公立小・中学生に冷感タオルを配布した。

このタオルは、水に濡らせばすぐに冷たくなり、何度も使用できるタイプのものであったことから、登校時だけでなく、下校時を含めた学校生活の様々な場面で活用することができた。

各校教職員や児童生徒が使用方法や使用する場面を工夫するといった姿が見られた。



↑ 冷感タオルを使っでの屋外での作業

待避所の設置と冷感タオルの活用(小・中学校)

今年は夏季休業日の短縮により、猛暑の中での登下校となった時期があった。そのため各自治会の協力を得て、通学路に待避所となるテントを設置した。

また、冷感タオルも活用し、熱中症対策を行った。教員がそれぞれの担当地区を回り、安全に子どもたちが下校できるよう配慮した。交通班長や高学年の子が、低学年の子を気遣い、ゆっくり待避所で休憩したり、荷物を持ってあげたりする姿が見られた。

例年とは全く違う条件下での登下校であったが、子どもたち同士の絆や学校と地域の連携が深まった取組となった。



←待避所のテント

冷感タオルを冷水で冷やす児童



安心して通学できたスクールバス運行(小・中学校)

夏季休業期間の短縮に伴う下校時の熱中症対策として、原則、自宅から学校までの通学距離が2 km以上の小学校児童が居住する町の児童全員を対象としてスクールバスを運行した。

運行期間は、令和2年7月22日(水)から8月4日(火)、8月17日(月)から8月31日(月)のうち、土日祝日を除く19日間とし、安全確保のため学校とPTAが現場確認を行い、主に集団登校時の集合場所を降車場所とするとともに、車内の感染予防についても文科省の基準により、乗車前の検温や、可能な範囲での密集乗車をさけることに留意し取り組んだ。

保護者からは、安心して通学させることができたとの評価をいただいた。



↑下校バスに乗車する児童

スクールバスの運行とネッククーラーの配布(小・中学校)

本市においては、夏季休業日短縮に伴い、熱中症予防として、登下校時にスクールバスを運行した。遠方から通学している児童は、指定された集合場所から学校までスクールバスを利用した。特に今年度は、暑い日が続き、熱中症対策として、とても効果があった。

また、すべての児童生徒に冷感タオル(ネッククーラー)を配付した。ネッククーラーは、水に濡らし首に巻くことにより、熱中症予防に効果があり、繰り返し使用することができた。登下校時だけでなく、体育や部活等の際にも使用することで、快適に活動することができた。



↑スクールバスの利用

観光バス会社の協力による登下校の実施(小・中学校)

新型コロナウイルスの影響で夏休みが短縮され、猛暑の中を通学することになった。登下校での熱中症を心配していたところ、観光バス会社3社が、「どうせバスは動かない。地域のお役に立ててもらえたら」と、市の小学校区の遠距離通学児童を、夏休み期間を除く延べ13日間、無償でバスによる送迎をしてくださった。「バスの人たちに応援してもらっているので、私たちも暑さに負けず頑張ります。」という児童の声を聞くことができた。

熱中症対策に気をもんでいた矢先の話であり、地域との繋がりに感謝する事例であった。

送迎開始を控え、試走に向かう関係者→



←登下校で実際に利用する児童たち

夏期限定スクールバス(小・中学校)

今年度は、夏休み短縮に伴う熱中症対策として、スクールバスを運行した。バスの運行は、7月27日から8月28日の20日間実施した。対象通学班は、集合場所が学校から半径2km以上にある通学班に限定した。本校においては、8地区が対象になり、2方向に向けての運行が行われた。

バスに乗る前に消毒を行い、バスの中では、私語厳禁を徹底し、新型コロナウイルス感染拡大防止に努めた。毎日、教員が交代でバスに乗車し、バスの降車場所から通常の通学路まで引率を行った。

日傘の活用、スクールバスの運行等対策のおかげで、熱中症になる児童はいなかった。



↑乗車前の消毒

スクールバスの実施(小・中学校)

今年は例年の夏休み期間の7月21日(火)から8月28日(金)に授業を行うことになり、熱中症対策としてバスによる遠方児童の下校を行うことになった。町教委から中型バス1台の配車があり、通学で片道約2km以上の地区を割り当て、停車場所を決め、曜日ごとの乗車児童を決めた。1台で高、低学年を南北地区に分けたので、多いときは4往復したが、待ち時間にはエアコンの効いた図書室で宿題に取り組むことができ、児童も喜んでいた。

児童の指導はSAやがんばりタイムの指導員を当て、下校指導と並行して教員がバスに乗って下校させた。勤務時間内に収めるため、会議などをバス下校と並行して行い、バス内で職員が会議内容をオンラインで確認することもあった。猛暑の中、バスで下校できたことで、児童が下校後に各家庭でストレスが少なく過ごせ、スムーズに2学期に臨めた。

↓バス下校の様子



↓待機児童の様子



麦わら帽子の活用(小・中学校)

春先の臨時休業で失われた授業時数を回復するため、1学期の終業式が8月7日、2学期の始業式が8月17日となり、9日間の短い夏季休業となった。

例年なら、夏季休業中であるはずの7月下旬や8月上旬・下旬に児童は登下校をしなければ

らなくなり、熱中症から子ども達の身を守るための対策について、養護教諭を中心にして教職員間で意見を交わした。そして風通しがよく、陰を多くつくり出せる麦わら帽子をかぶらせるのが適切だという考えでまとまった。児童は帽子に絵を描いたり、飾ったりして楽しんでいた。また、麦わら帽をかぶった姿は地域の方からの評判もよく、児童の安全な登下校に役立てることができた。



↑ 前後・左右の間隔を取り、麦わら帽子をかぶっての全校集会

自動販売機の設置 (小・中学校)

臨時休校により、夏季休業日が短縮され、暑い中での学校生活が余儀なくされることを念頭におき、熱中症対策として自動販売機を設置した。

生徒会役員が中心となり自動販売機を設置する運びとなり、運用の仕方は各クラスで話し合い、その意見を生徒会役員が集約し、ルール作りを行った。生徒たちはそのルールに則って自動販売機を使用している。

昨年の夏は酷暑が続いたが、自動販売機設置により、水筒を忘れても水分補給ができ、重度の熱中症にかかる生徒はいなかった。



↑設置された自動販売機

ウォーターサーバーの設置 (小・中学校)

授業時間数を確保するため、本来、夏期休業である期間に登校し、授業を行うこととなった。そのため、暑い中での登校や体育などの教育活動時に、熱中症のリスクが高まることが想定された。

熱中症予防はこまめな水分補給が有効だが、持参した水分が足りなくなる場合や水筒を持参し忘れる場合が考えられたため、各校に1台ずつのウォーターサーバーを設置し、児童生徒への飲用水の提供を行った。各学校での積極的な水分補給により、未然に熱中症を防ぐことができた。また、ウォーターサーバーは冷たい水での水分提供ができるという点で、有効な取組となった。

サーバーを利用する様子 ↓→



夏期休業中の預かり保育における休息（幼稚園等）

夏期休業中の預かり保育では、園児は午前も午後もゆったりとした雰囲気の中で過ごしていた。しかし、今年度は夏期休業日が短くなり、午前は通常保育のクラスで活動、午後からは預かり保育を利用する子どもが、全園児56名中約24名いた。8月以降には暑さも重なり、例年になく疲れた子どもの表情が見られた。



昼食後に遊戯室を暗くし、個人のタオルを掛け布団や敷き布団の代わりにし、密を避けるため園児同士の間隔をあけ、休息が取れるようにした。また、熱中症を予防するため、預かり保育中のおやつにも、塩分が摂れるおやつを用意したり、少しでも体を冷やすことができるように、凍らせたゼリーを準備したりと配慮した。

活動の合間に水分を補給するようこまめに呼びかけ、園でもお茶を多めに用意した。

水に触れて遊ぶ（小・中学校）

年度は感染症対策のため、プール遊びの実施を見合わせた。その中で、7月31日までの1学期、8月24日からの2学期で、とても暑い日が多かったので、船作りや水鉄砲、砂場遊び、ボールすくい等、水に触れて遊ぶことができるような遊びを考え、環境を整えた。プールで泳ぐことはできなかったが、暑さに負けず過ごすことができた。



登下校を中心とする熱中症対策(小・中学校)

登下校を中心とする熱中症対策

- 下校時には児童の持参する水分が不足するため、ウォータージャグを3つ設置し水分補給を行った。
- 下校途中の通学路にも水分補給の場所を設置した。
- 外での活動時には、体温上昇を抑えるため、冷感タオルを使用した。

↓水分補給を行っている様子



登校前の教室室温管理と「暑さ指数」の視覚化(小・中学校)

夏季休業日短縮により、児童の熱中症対策は大きな課題となった。学校生活における児童の安全確保のため、以下に取り組んだ。

1 登校前における教室の室温管理

児童の登校前に、冷房設備・機器を用いて、教員が教室の室温管理を行った。登校してきた児童が高温環境下において体調を崩すことがないように、環境調整に努めた。

2 「暑さ指数」の視覚化

一日の中で「暑さ指数」を複数回確認し、状態に応じて教育活動への配慮を行った。その際に、指数の状態を図示化したもの(養護教諭による作成)を用いて教職員が状態を視覚的に把握しやすい工夫を行った。これらの取組により、夏季休業日短縮による影響で体調を崩す児童が皆無であったことは、大きな成果である。



↑暑さ指数の視覚化の工夫

保護者・親子研修（幼稚園等）

例年ならば、保護者研修や親子研修などは、できるだけ多くの参加者を募って実施するが、今年度は研修会も回数を極力少なくし、人数制限も行い、実施した。

内容は、保護者や園児にとって有意義なものとなるよう、絵本の読み聞かせの大切さや年齢に応じた絵本の選び方などについて、実際に図書館司書に保護者も園児も読み聞かせをしてもらい、絵本の世界を楽しむことができた。

参加者は受付で検温、マスク着用の確認、手指消毒を行った。また、座席も間隔をできるだけとり、絵本も大型絵本を使って、広い空間でも見えやすい工夫をした。



←研修会の様子
(保護者)



←大型絵本の読み聞かせの様子

作法指導（小・中学校）

毎年、地域の方の協力を得て、年に5回作法指導を実施している。今年は、感染症対策として、実際にお茶菓子を食べたり、お茶を点てて飲んだりするのは控えて実施することとなった。

密を避けるために和室ではなく、保育室に畳を並べたり、人数を半数にしたり、お茶菓子の代わりにお手玉を使ったりする等、作法指導を実体験できるように工夫した。

幼児は、マスク着用のままであるが、あいさつやお辞儀の仕方をはじめ、座り方、立ち振る舞い、お茶菓子の食べ方、箸の使い方等も教えていただいた。短時間であるが集中力が増し、地域の方とともに「無」の時間を楽しむひとときにもなった。

箸の使い方の練習。→



↑先生より、お菓子をいただく。

立ち方の練習→



児童会による、3密を避けて全校で取り組める活動の考案（小・中）

今年、児童会活動で全校集会を例年通り行うことができなかつたので、3密をさけて全校生で取り組めそうなことを代表委員会で話し合い、児童の主体性や自治性を大切にしながら工夫して活動を進めてきた。

1学期は、1年生への歓迎のメッセージを各クラスで画用紙にまとめてプレゼントしたり、

給食時に放送したりして、「ようこそ1年生WEEK」を行った。2学期は、放送を使って各クラス対抗ビンゴ大会を行った。事前に全校生の好きな色などをアンケートでとり、ランキング形式にしてビンゴの答えとして発表したり、各クラスのビンゴの様子を実況中継したりした。



↑ 3密を避けた活動

皆が心から暮らしやすい町を目指したボランティア活動（小・中学校）

毎年、文化祭で体育委員会による展示発表を行っている。今年は全校生に呼びかけ、「コロナに負けるな」という標語をつくった。

また、コロナ禍で生れた差別や偏見を耳にした愛媛県の有志が作成した「シトラスリボン」の想いに賛同し、体育委員や3年生の生徒が「シトラスリボン」を作成した。活動を広げるため保護者に配るなど、皆が心から暮らしやすい新温泉町になるために、生徒自らが発信する取組となった。

「ただいま」「おかえり」と言い合える町にしたい、多くの町民に知ってもらいたいという生徒の想いを大切に、町社会福祉協議会や文化会館にもリボンを置いていただいた。この取組は、町人権パンフレットでも紹介され、校区だけでなく全町民への啓発につながった。



↑ 体育委員、3年生の生徒が作成し、文化祭に保護者に配ったシトラスリボン

ハロウィンパーティー (小・中学校)

6年生が下級生のためにと企画した「ハロウィンパーティー」。

例年なら、全校集会を持つところ、全校生が一堂に会することができない状況。1年生～5年生の学活の時間を割り振り、密を避けてのゲームやクイズを楽しんだ。6年生が数名のグループに分かれて、各々に趣向を凝らして計画・進行した。各学年の割当の時間は30分。会場は4カ所。予め希望を取りまとめ、決められたパーティー会場へ。1年生は、かわいい仮装をして向かった。従来の児童会の集会活動や縦割り遊びを実施できない中、6年生がリーダーシップを発揮できる場を設けたい、6年生と下級生とのつながりを深めたい、最高学年の姿とはこうなんだ、と気風を受け継ぎたい。そんな6年生担任の思いが形となった。



←ようこそ！
パーティー会場へ

カボチャつり(左下)
カボチャたたき(右下)



人権教育講演会 (小・中学校)

今年の人権教育講演会は、元阪神タイガーズの赤星憲広氏に来ていただき対談形式で行った。

体育館で行う講演会が密にならないように、次のような対策を行った。

全校生を前半組と後半組に分け、前半組が体育館で講演会を聞いているときは、後半組が教室で体育館から送られてくる映像を見、途中で入れ替わるようにした。少しでも生の姿、生の声を聞くことが講師の赤星氏の人権に対する考え方に触れる意味で大切だと考えたからである。

例年、保護者にも参加してもらっているが、今年は生徒のみの講演会とした。保護者にも講演会の内容を見てもらうため、期間を決め、保護者のみが視聴できる形でホームページに動画を掲載した。



↑ソーシャルディスタンスを保った講演会会場の様子

顔認証機能付き検温デバイスの活用等 (小・中学校)

地域づくり協議会とPTAからの寄付と学校予算を合わせて、2台の顔認証機能付き検温デバイスを玄関に設置した。そのことにより、児童の体温スクリーニングを少人数の教職員で対応できた。めずらしい機器ということもあり、児童らは機器に愛称をつけ、楽しみながら体温測定をし、毎日の健康チェックシートの記入と合わせ、自ら体調管理をする意識向上にも効果があった。また、手洗い場を自動水栓に変更し、感染リスクの低減を図ったことは、児童の手洗いへの安心感とこまめな手洗い習慣づくりに有効だった。これらの取組は、児童の健康管理や指導にかかる時間短縮になり、教職員の負担軽減、児童と関わる時間の確保、学習指導や健康観察をより丁寧に行うことにつながった。



↑愛称を呼び、検温する児童



↑自動水栓で手洗いをする児童

地域人材の児童に対する精神的な支援 (小・中学校)

コロナ禍での環境変化により、精神的な不安定さを抱える児童に対して、地域人材による支援に大きな成果があった。

学校運営協議会を通じて、地域の人的な資源が確保でき、特に集団生活への適応が困難な児童を支援した。教室で授業を受ける不安を行動として現す児童に、スタッフが個別に丁寧に寄り添った結果、児童が落ち着いて学習に取り組むことができるようになった。

地域人材が教育活動を支援することで、「地域の子どもを地域で育てる」という気運の高まりが窺えた。また、地域人材との関わりを通して児童のコミュニケーション力が高まり、校内の雰囲気は活気づくこととなった。

未だコロナ禍の終息が見通すことができない中、今後とも地域人材による支援の必要性・重要性は増すばかりである。



↑児童に寄り添う地域人材

アンケートを踏まえた個人面談の実施（小・中学校）

臨時休校中に生活アンケートをポストインで配布・収集・集計を行い、生活実態の把握と登校時の心のケアに備えた。内容は、①生活の様子②家族の様子③気持ちの状態④休み中の感想。分散登校日に、アンケートの内容を踏まえ、全生徒に個人面談を実施した。

11月には新型コロナウイルスに係る項目を加えたアンケートを実施し、第1回目と比較しながら、心配な生徒に担任が中心となって個人面談を行った。第1回目では家族とのふれ合いが増え、色々なことに挑戦している姿がうかがえた反面、ゲームや動画鑑賞などの時間が増え、昼夜逆転の心配がある生徒が多数いた。第2回目では、昼夜逆転の心配がある生徒は減少したが、新型コロナウイルスに関して不安を抱える生徒が複数いたため、SCと連携して新型コロナウイルス感染症に係る心のケアのための授業を行うこととした。



↑生活アンケート用紙

令和2年度「新型コロナウイルス感染症対応の記録～各学校園の取組編～」

令和3（2021）年3月発行

編集発行 兵庫県教育委員会

所在地 〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

電 話 （078）-341-7711（代表）